茨城県教育財団文化財調査報告第191集

谷田部漆遺跡

島名・福田坪一体型特定土地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅷ

下　巻

作業室用

平成14年3月

茨　　城　　県
財団法人　茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第191集

谷田部漆遺跡

島名・福田坪一体型特定土地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅷ

下　巻

平成14年3月

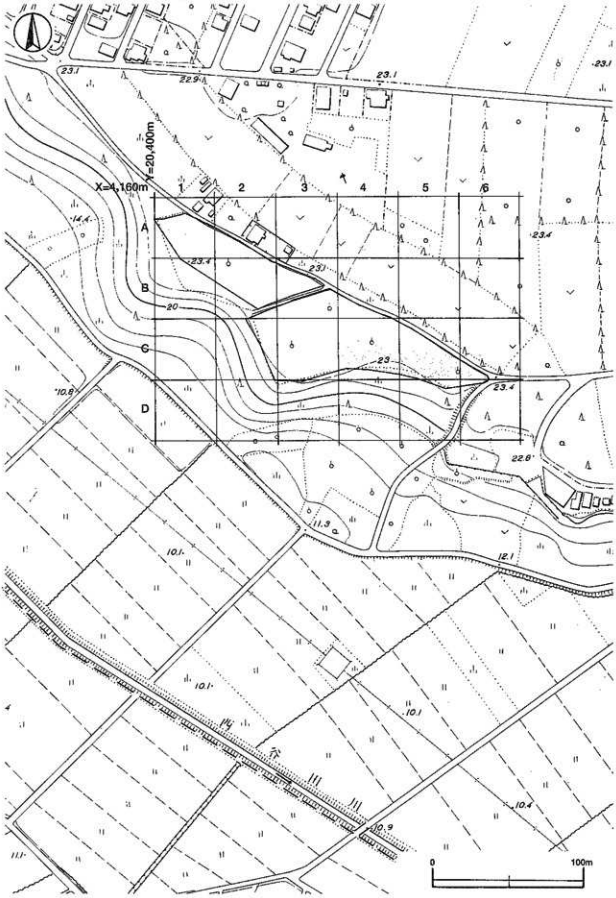
茨　　城　　県
財団法人　茨城県教育財団

目　　次

—下　巻—

第５章　谷口部漆遺跡の調査の成果 ……597
第１節　遺跡の概要 ……597
第２節　基本層序 ……597
第３節　遺構と遺物 ……599
1　縄文時代の遺構と遺物 ……599
（1）陥し穴 ……599
2　古墳時代の遺構と遺物 ……602
（1）竪穴住居跡 ……602
（2）土坑 ……673
3　平安時代の遺構と遺物 ……681
（1）土坑 ……681
4　その他の時代の遺構と遺物 ……682
（1）溝跡 ……682
（2）土坑 ……682
（3）ピット群 ……684
5　遺構外出土遺物 ……685
第４節　まとめ ……689

付章　自然科学分析
『炭化材樹種同定』
写真図版



第1図　谷田部漆遺跡調査区設定図

第5章　谷田部漆遺跡の調査の成果

第1節　遺跡の概要

今回の調査における調査区域の総面積は7,916㎡で，現況は栗畑である。調査区域は台地縁辺部に位置する細長い不整三角形状で，中心の農道によって北西部と南東部に分断されている。農道の北西部分は，トレンチャーによる撹乱を受け，一方，南東部分には撹乱は見られず，遺構の保存状態はおおむね良好であった。調査は区域を便宜的に西・中央・東部の3区に分けて実施した（第1図）。

調査の結果，縄文時代の陥し穴4基，古墳時代の竪穴住居跡26軒，土坑4基，平安時代の土坑1基，時代不明の土坑66基，溝跡1条，ピット群1か所が確認され，古墳時代中期の集落跡を主体とする複合遺跡であることが判明した。遺物は縄文土器，土師器，須恵器，土製品，石器，石製品，鉄製品などが出土している。

第2節　基本層序

テストピットは，平坦な台地の西縁部にあたる調査区北西隅のA1e2区に掘削した。地表面の標高は23mで，地表面から深度3.6mまで掘削した。基本土層図を第2図に示す。

テストピットの土層は，色調・構成粒子・含有物・粘性などから12層に細分される。これらは，表土・関東ローム層・常総粘土層に大きく分類され，第1・2層が表土（耕作土），第3～11層が関東ローム層，そして第12層が常総粘土層に相当する。

テストピット付近は，ゴボウ耕作のトレンチャーによる撹乱が十文字に入り，その深さは最大1.2mほどで，第4層中部まで達している。テストピットにおける関東ローム層の層厚は3.1mで，地表面から深度0.8mに暗色帯（第4・5層）が，最下部に軽石が混じる層（第11層）が認められる。また，遺構は第3層上面で確認した。

茨城県南部の取手市大山1遺跡では，常総粘土層の直上に黄褐色の軽石層が報告され，箱根－東京軽石（約49,000年前）と推定されている[1),2)]。本層も常総粘土層との層位関係から箱根－東京軽石に対比されると考えられる。

各層の特徴を述べる。

第1層は黒褐色を呈する腐植土層で，微量のロームブロックを含む。粘性・しまりはともに弱く，厚さは12～24cmである。

第2層は暗褐色を呈する腐植土層で，ロームブロックを中量含む。また，微量の炭化物を含み，粘性・しまりはともに弱く，厚さは20cmである。

第3層は褐色を呈するローム層で，下層と比較すると粘性・しまりはともにやや弱く，厚さは20～56cmである。

第4層は暗褐色を呈するローム層で，炭化物を少量含み，しまりは強い。また，粘性は弱くて乾燥し，クラックが発達している。厚さは10～40cmである。

第5層は暗褐色を呈するローム層で，炭化物を少量含む。含まれる炭化物の量は4層に比較してやや多い。また，しまりは強いが，粘性は弱く乾燥し，クラックが発達している。厚さは24～50cmである。

第6層はにぶい褐色を呈するローム層で，炭化物を少量含む。粘性は弱く，しまりは強い。厚さは66～78cmである。

第7層はにぶい褐色を呈するローム層である。粘性は弱いがしまりは強く，厚さは22～34cmである。

第8層は明褐色を呈するローム層である。粘性は弱いがしまりは強く，厚さは46～68cmである。

第9層は橙色を呈するローム層で，明確な赤味を帯びた目立つ土層である。粘性は弱いがしまりは強く，厚さは10～24cmである。

第10層は橙色を呈するローム層である。粘性は弱いがしまりは強く，厚さは8～16cmである。

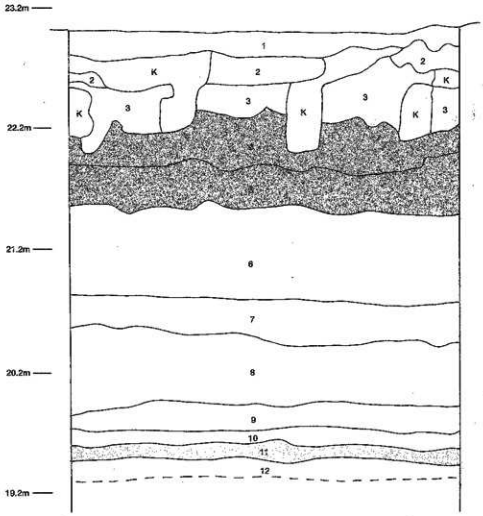
第11層はにぶい橙色を呈するローム層で，径3～5mmの橙色や明褐色を呈する軽石，青灰色の火山岩片を少量含み，厚さは8～16cmである。

第12層はにぶい黄橙色を呈する砂質粘土層である。粘性・しまりはともに強く，厚さは12cm以上である。

註

1）旧石器時代研究班　「茨城県南部における立川ローム層の層序区分について」『研究ノート』6号　茨城県教育財団　1997年

2）町田　洋，新井房夫　「火山灰アトラス」　東京大学出版会　1992年



第2図　基本土層図

第3節　遺構と遺物

1　縄文時代の遺構と遺物

今回の調査で縄文時代の土坑4基が確認された。これらは調査区の東区中央部，台地縁辺の肩部に集中しており，その形状などから縄文時代の陥し穴と考えられる。以下，遺構と遺物について記述する。

（1）陥し穴

第1号陥し穴（第48号土坑）（第3図）

位置と確認状況　台地の縁辺部，調査区東部のC5h2区に位置する。周囲には形態の類似する第2～4号陥し穴がある。

規模と形状　長径2.62m，短径1.91mの楕円形で，深さ1.45mであり，長径方向はN－0°を指している。

壁は底面より1.1mまで直立し，上部は外傾して立ち上がる。北側の壁は袋状に掘り込まれ，西壁も一部で同様に掘り込まれている。底面は楕円形で，中心部付近がやや窪んだ皿状である。

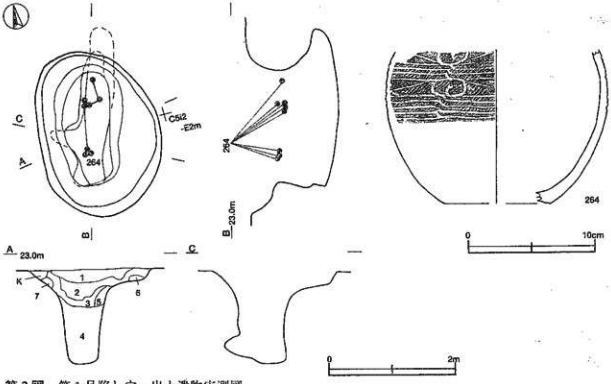
覆土　上層は黒色や黒褐色の腐植土，下層は褐色のローム ブロックであり，自然堆積と考えられる。

土層解説

1	黒　色	ローム ブロック少量	
2	黒褐色	ローム ブロック少量	
3	暗褐色	ローム ブロック少量	
4	褐　色	ローム ブロック中量	
5	褐　色	ローム ブロック中量	
6	褐　色	ローム ブロック多量	
7	褐　色	ローム ブロック多量	

遺物出土状況　覆土中層から口縁部を欠損した壺形土器（264）が破片の状態で出土し，ほかに出土遺物はない。

所見　形態から縄文時代の陥し穴であり，壺形土器は後期後半の加曽利B1式である。覆土中層から出土しているため，本跡が埋没する段階で投棄されたものと考えられる。



第3図　第1号陥し穴・出土遺物実測図

第1号陥し穴出土遺物観察表（第3図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	文様の特徴	出土位置	備考
264	縄文土器	深鉢土器	—	(12.2)	[8.4]	石英・長石・雲母	普通	にぶい黄橙	胴部に沈線と磨消により平行線化した横位回転の単節縄文LRを施す	中層	70%, PL18

第2号陥し穴（第56号土坑）（第4図）

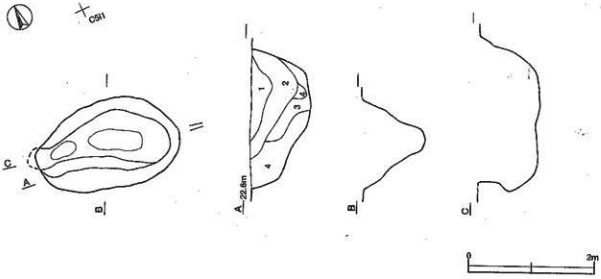
位置と確認状況　台地の縁辺部，調査区東部のC4i0区に位置する。周囲には形態の類似する第1・3・4号陥し穴がある。

規模と形状　長径2.20m，短径1.36mの楕円形で，深さは0.98mであり，長径方向はN－78°－Wを指している。壁は短径方向ではV字状に外傾して立ち上がる。また，長径方向では東側が外傾して立ち上がり，西側は底面から高さ50cmほどが袋状に内彎し，上部は直立する。底面は楕円形で，緩やかな起伏がある。

覆土　上層は黒色や暗褐色の腐植土からなり，下層は褐色のロームブロックである。土層の堆積状況は自然堆積である。

土層解説
1　黒　色　ロームブロック微量
2　暗褐色　ロームブロック少量
3　褐　色　ロームブロック中量
4　褐　色　ロームブロック多量

所見　形態から縄文時代の陥し穴と考えられる。遺物は出土していない。



第4図　第2号陥し穴実測図

第3号陥し穴（第64号土坑）（第5図）

位置と確認状況　台地の縁辺部，調査区東部のC5i1区に位置する。周囲には形態の類似する第1・2・4号陥し穴がある。

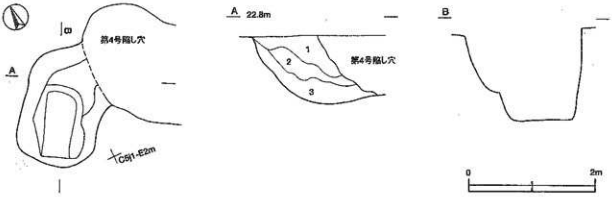
重複関係　第4号陥し穴に掘り込まれている。

規模と形状　長径2.02m，短径1.24mの楕円形で，深さは1.44mであり，長径方向はN－43°－Eを指している。壁はやや外傾して立ち上がり，底面は楕円形でほぼ平坦である。

覆土　褐色のロームブロックからなり，レンズ状の堆積を示した自然堆積である。

土層解説
1　褐　色　ロームブロック中量
2　褐　色　ロームブロック中量
3　褐　色　ロームブロック多量

所見　形態から縄文時代の陥し穴と考えられる。遺物は出土していない。



第5図　第3号陥し穴実測図

第4号陥し穴（第65号土坑）（第6図）

位置と確認状況　台地の縁辺部，調査区東部のC5i1区に位置する。周囲には形態の類似する第1～3号陥し穴がある。

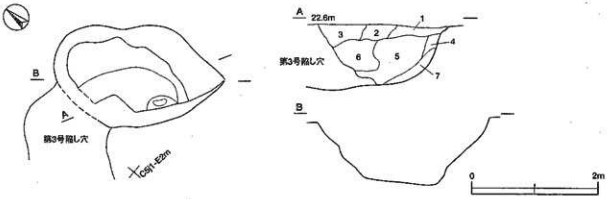
重複関係　前述した第3号陥し穴を掘り込んでいる。

規模と形状　長径2.71m，短径1.62mの楕円形で，深さは1.06mであり，長径方向はN－33°－Wを指している。壁はやや外傾して立ち上がり，底面は楕円形でほぼ平坦である。

覆土　暗褐色を呈する腐植土と褐色のロームブロックがモザイク状に堆積しており，人為的な堆積と考えられる。

土層解説
1　暗褐色　ロームブロック少量
2　暗褐色　ロームブロック少量，炭化物微量
3　褐　色　ロームブロック中量
4　暗褐色　ロームブロック中量
5　暗褐色　ロームブロック中量，焼土粒子微量
6　褐　色　ロームブロック中量
7　褐　色　ロームブロック少量，炭化物微量

所見　形態から縄文時代の陥し穴と考えられる。遺物は出土していない。



第6図　第4号陥し穴実測図

2　古墳時代の遺構と遺物

今回の調査で竪穴住居跡26軒，土坑４基が確認された。以下，確認した遺構と出土した遺物について記述する。

（１）竪穴住居跡

第１号住居跡（第７・８図）

位置と確認状況　調査区東部のＣ６j1区に位置し，周囲には第２・３・８号住居跡などが確認されている。

規模と形状　長軸5.95m，短軸4.90mの長方形で，主軸方向はＮ－17°－Ｗである。壁高は35～46cmで，ほぼ直立する。

床　貯蔵穴周辺に緩やかな高まりがあるほかは，ほぼ平坦である。高まり部がよく踏み固められており，出入り口部と考えられ，そのほかも壁際を除いてよく踏み固められている。壁溝は南東コーナーを除いてほぼ全周しており，間仕切り溝と考えられる２条の浅い溝が確認されている。

炉　中央の北壁寄りに位置する。長径90cm，短径80cmで不整楕円形を呈し，中央部が皿状に９cmほど窪む地床炉である。炉床は全体的に赤変硬化している。

炉土層解説

1　暗赤褐色　焼土ブロック中量，炭化物少量

貯蔵穴　南東コーナーに位置する。径70cmほどの円形で，断面は深さ45cmのU字状を呈す。

ピット　４か所。主柱穴はＰ１～Ｐ３の３か所で，深さは20～21cmである。北西コーナー部では柱穴は検出できなかった。南壁沿いに位置するＰ４は出入り口施設に伴うものと考えられ，深さは18cmである。

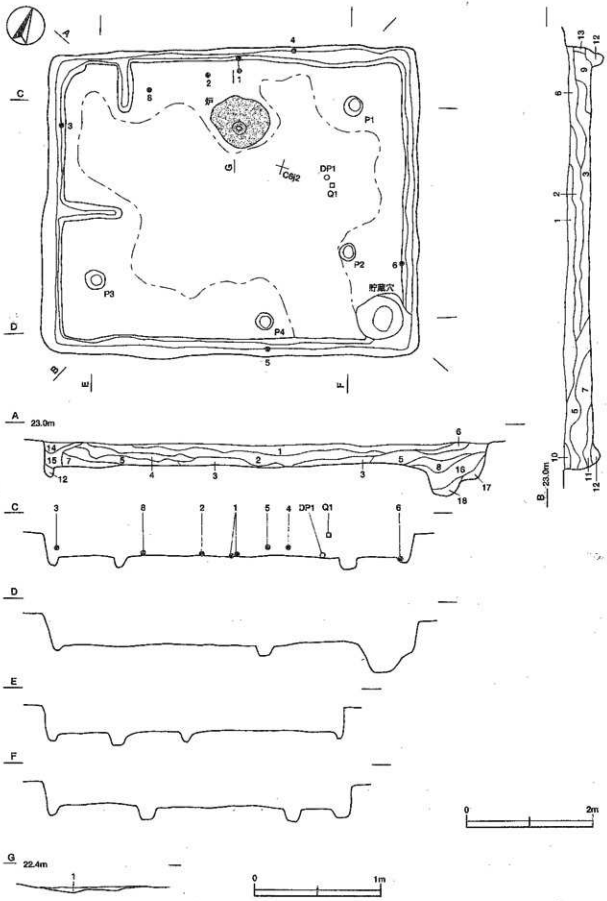
覆土　全体的に暗褐色や黒褐色の腐植土からなり，下層と中層の一部にロームブロックが含まれている。明確に埋め戻された痕跡はなく，レンズ状に堆積しているため自然堆積と考えられる。

土層解説

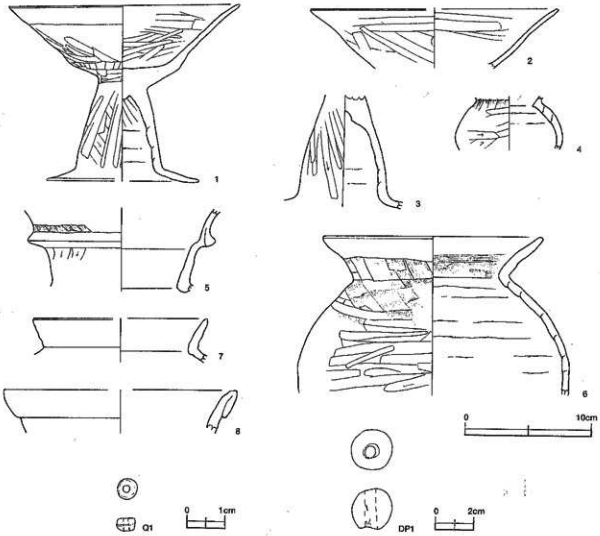
1　黒　　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
2　黒 褐 色　ロームブロック少量，炭化物微量
3　黒 褐 色　ロームブロック中量，焼土ブロック・炭化物微量
4　暗 褐 色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化物微量
5　極暗褐色　ロームブロック・炭化物少量，焼土粒子微量
6　暗 褐 色　ローム粒子少量，炭化物微量
7　極暗褐色　ロームブロック・炭化物少量
8　暗 褐 色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
9　黒 褐 色　ロームブロック少量，炭化物微量
10　暗 褐 色　ロームブロック少量
11　褐　　色　ロームブロック中量
12　暗 褐 色　ロームブロック少量
13　暗 褐 色　ロームブロック中量
14　黒 褐 色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
15　暗 褐 色　ローム粒子少量
16　黒 褐 色　ロームブロック少量，炭化物微量
17　褐　　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
18　褐　　色　ローム粒子中量，炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片474点（高坏109，坩21，壺・甕343，甑１），球状土錘１点，臼玉１点が出土している。土師器片は，覆土下層を中心に本跡全体から出土し，臼玉は確認面から出土している。１・２・４は炉の北側から出土し，６は南東コーナー部の床面から横位で出土している。土師器片のうち，第２号住居跡から出土したものと接合する例（第10図，11）が認められた。

所見　本跡の時期は，出土土器から５世紀前半と考えられる。11の接合例は，埋没過程で窪地に投棄または混入したものと考えられる。



第7図　第1号住居跡実測図



第8図　第1号住居跡出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表（第8図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	高坏	18.0	14.0	[12.0]	石英・長石	にぶい橙	普通	坏部内・外面ヘラナデ	北壁沿い，床面	90%，PL13
2	土師器	高坏	[19.4]	(4.7)	—	石英	にぶい黄橙	普通	坏部内・外面ヘラナデ	北壁沿い，床面	10%
3	土師器	高坏	—	(9.1)	—	石英	明黄褐	普通	脚部外面ヘラナデ	北西コーナー部，下層	10%
4	土師器	甕	—	(4.2)	—	石英・長石	にぶい橙	普通	口縁部ハケ目整形	北壁際，下層	15%
5	土師器	壺	—	(6.6)	—	石英	にぶい赤褐	普通	口縁部ハケ目整形	南壁際，下層	5%
6	土師器	甕	17.2	(12.6)	—	石英・長石	明赤褐	普通	頸部内・外面ハケ目整形	南東コーナー部，床面	25%，PL13
7	土師器	甕	[13.8]	(3.5)	—	石英・長石	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ	北西部，床面	5%
8	土師器	甑	[18.2]	(3.4)	—	石英・長石	橙	普通	器面風化により不明	北西部，床面	5%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重さ	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP1	球状土錘	2.2	2.2	0.6	8.7	長石	にぶい橙	ナデ	東部，床面	100%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
Q1	円盤	0.5	0.3	0.2	0.1	絶滅岩	側面に穴	東部，遺構確認面	100%，PL20

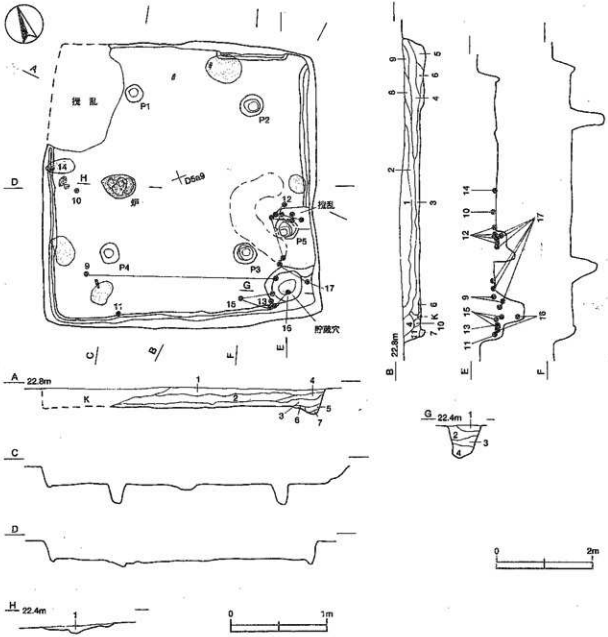
第２号住居跡（第９・10図）

位置と確認状況　調査区東部のＤ５a8区に位置する。本跡の北西部は攪乱され，周囲には第１・３・４号住居跡などが確認されている。また，炭化材や焼土ブロックが検出された，焼失家屋である。

規模と形状　長軸6.10m，短軸5.77mの方形であり，主軸方向はＮ－68°－Ｗである。壁高は35～40cmで，ほぼ直立する。

床　ほぼ平坦である。Ｐ５の周囲は馬蹄形に踏み固められ，出入り口部と考えられる。壁溝は，北西部と北東コーナー，出入り口施設部を除いて検出されている。

炉　中央の西壁寄りに位置する。長径70cm，短径50cmの楕円形を呈し，皿状に10cmほど窪む地床炉である。炉床は全体的に赤変し，西側半分の一部と東側半分の一部が硬化している。



第９図　第２号住居跡実測図

炉土層解説
1　黒褐色　焼土ブロック・炭化物少量

貯蔵穴　南東コーナーに位置する。径80cmほどの不整円形で，断面は深さ61cmのU字状を呈する。

貯蔵穴土層解説
1　黒褐色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　黒褐色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　黒褐色　ロームブロック少量
4　黒褐色　ローム粒子微量

ピット　5か所。主柱穴はP1～P4で，深さは45～71cmである。東壁の貯蔵穴寄りに位置するP5は深さ44cmで，出入り口施設に伴うものと考えられる。

覆土　上層は極暗褐色や黒褐色などを呈する腐植土で，下層は褐色や暗褐色のロームブロックである。覆土中に含まれる遺物は少なく，レンズ状の堆積を示すため自然堆積である。

土層解説
1　極暗褐色　ロームブロック中量
2　黒　褐　色　ロームブロック少量
3　暗　褐　色　ロームブロック・炭化粒子少量，焼土ブロック微量
4　褐　　色　ロームブロック中量
5　褐　　色　ロームブロック中量
6　にぶい赤褐色　ロームブロック・焼土ブロック中量，炭化粒子微量
7　褐　　色　ロームブロック多量
8　極　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子微量
9　黒　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
10　極　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
11　黒　褐　色　ローム粒子少量

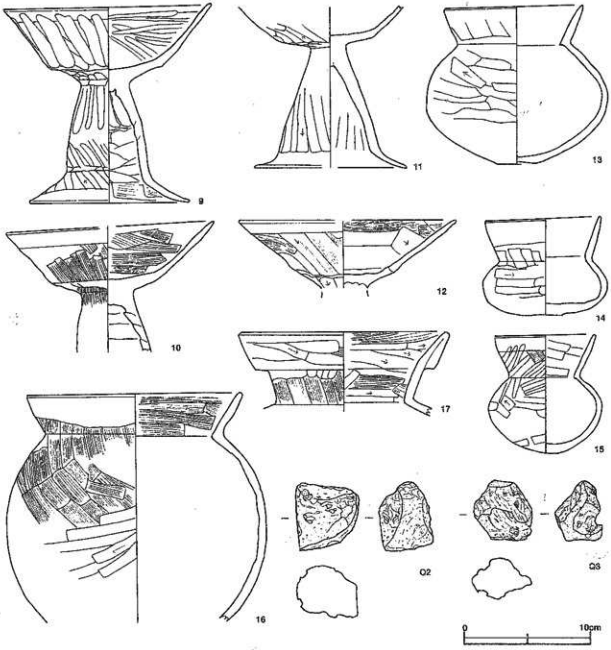
遺物出土状況　土師器片567点（高坏147，坩82，壺9，甕329），軽石4点，混入した縄文土器片1点・剥片1点のほか，炭化材や焼土ブロック，粘土ブロックも検出されている。遺物は覆土下層や床面に多く，出入り口部付近や貯蔵穴付近に集中し，炉の周辺からも多く出土している。9・13・15・16は，貯蔵穴から出土したもので，9は横位で出土し，13は逆位で出土した16の甕の中に入れ子状で正位の状態で出土している。また，16の中から粘土ブロックも検出されている。10・14は炉の西側から出土し，2つの土器の間に粘土ブロックも検出されている。11は南西コーナー部から出土した脚部が，東に位置する第1号住居跡から出土した坏部と遺構間で接合した資料である。

所見　本跡の時期は，出土土器から5世紀前半と考えられる。炭化材や焼土ブロックが検出されており，覆土にも混じるため火災にあったものと考えられる。上屋構築材や土器は，廃絶時にある程度持ち去られたものと考えられ，貯蔵穴付近の遺物は廃絶時に供えられたのち，燃やされた可能性もある。

第2号住居跡出土遺物観察表（第10図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
9	土師器	高坏	16.5	15.7	12.8	石英	にぶい橙	普通	坏部内面ヘラ磨き	貯蔵穴・南西コーナー	90%，	PL13
10	土師器	高坏	[16.3]	(10.4)	—	石英・長石	にぶい橙	普通	坏部内・外面ハケ目整形	西壁沿い，床面	60%，	PL13
11	土師器	高坏		(12.9)	[12.0]	石英・小礫	にぶい黄橙	普通	坏部内面ヘラ磨き	南西コーナー部，下層	40%,坏部出土内補合	
12	土師器	高坏	[16.9]	(5.3)	—	石英	にぶい橙	普通	坏部内・外面ハケ目整形	出入り口施設部，床面	40%	
13	土師器	壺	11.0	12.6	3.0	石英・小礫	にぶい橙	普通	体部外面・底面ヘラ削り	貯蔵穴	98%，	PL13
14	土師器	壺	9.1	7.9	3.4	石英・小礫	にぶい橙	普通	体部外面・底面ヘラ削り	西壁沿い，床面	95%，	PL13
15	土師器	壺	8.0	9.4	2.0	石英・長石	にぶい橙	普通	体部外面・底面ヘラ削り	貯蔵穴	80%，	PL13
16	土師器	甕	17.0	(18.3)	—	石英	にぶい黄橙	普通	胴部・体上部ハケ目整形	貯蔵穴	50%,胴付巻,PL13	
17	土師器	壺	16.0	(6.7)	—	石英	にぶい橙	普通	口縁部外面ヘラ削り	南東コーナー部,下層	10%	

番号	器種	長さ	幅	高さ	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
Q2	滑子カ	5.4	4.9	4.1	32.1	軽石	平坦面2面，擦痕	貯蔵穴	被熱，PL20
Q3	滑子カ	5.4	4.9	4.1	14.9	軽石	平坦面3面	貯蔵穴	被熱，PL20



第10図　第２号住居跡出土遺物実測図

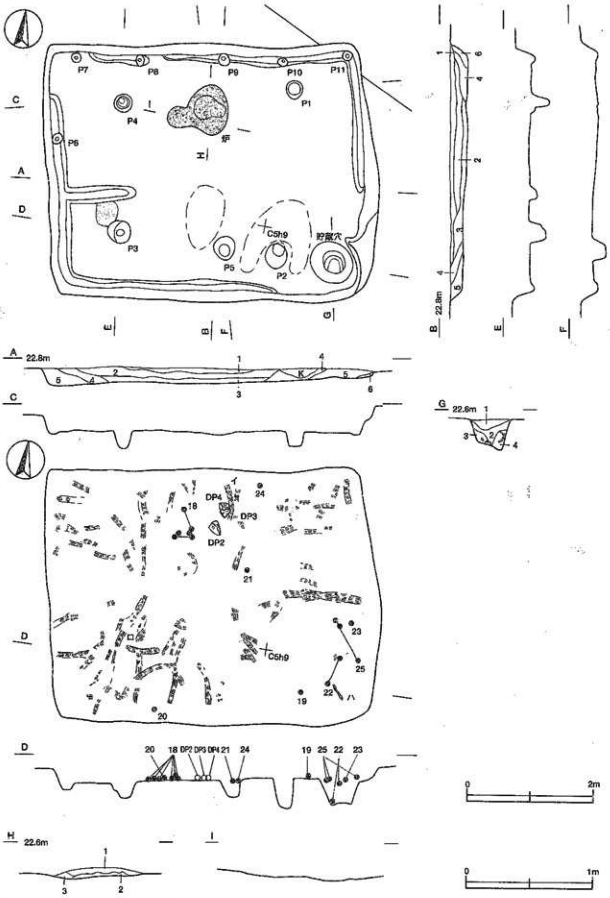
第３号住居跡（第11～13図）

位置と確認状況　調査区東部のＣ５g8区に位置し，周囲には，第１・２・４・５・７号住居跡などが確認されている。また，炭化材が検出された焼失家屋である。

規模と形状　長軸5.24m，短軸4.08mの長方形で，主軸方向はＮ－10°－Ｗである。壁高は20～26cmで，やや外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦であり，Ｐ２の周辺が馬蹄形に踏み固められており，出入り口部と考えられる。また，Ｐ５の西側も小さく楕円形に踏み固められている。壁溝は北西コーナーと南東コーナーを除いてみられ，間仕切り溝と考えられる１条の浅い溝が確認されている。

炉　中央の北壁寄りに位置する。長径76cm，短径65cmの不整楕円形を呈し，皿状に６cmほど窪む地床炉である。



第11図　第3号住居跡実測図

炉床は中央部が赤変硬化している。

炉土層解説

1　暗赤褐色　焼土ブロック多量，炭化物少量
2　赤　褐　色　焼土ブロック多量，炭化物少量
3　極暗褐色　ロームブロック・焼土粒子・炭化物微量

貯蔵穴　南東コーナーに位置する。径66cmの円形で，断面は深さ49cmのU字状を呈する。

貯蔵穴土層解説

1　暗褐色　ロームブロック少量，炭化物微量
2　黒褐色　ロームブロック・炭化物少量
3　黒褐色　ロームブロック・炭化物少量
4　黒褐色　ロームブロック・炭化物少量，焼土粒子微量
5　赤暗褐色　ロームブロック・炭化物少量，焼土粒子微量
6　褐　色　ローム粒子多量，炭化粒子微量

ピット　11か所。主柱穴はP１～P４の４か所で，深さは26～52cmである。南壁の中央付近に位置するP５は深さ26cmで，出入り口施設に伴うものと考えられる。壁際に位置するP６～P11は，位置より壁柱穴と考えられる。

覆土　上層は黒色の腐植土，中層と下層は黒褐色の腐植土からなり，レンズ状堆積を示す自然堆積である。

土層解説

1　黒　色　ローム粒子・炭化粒子微量
2　黒褐色　ロームブロック・炭化物少量，焼土粒子微量
3　黒褐色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
4　黒褐色　ロームブロック中量，炭化物少量，焼土粒子微量
5　赤暗褐色　ロームブロック・炭化物少量，焼土粒子微量
6　褐　色　ローム粒子多量，炭化粒子微量

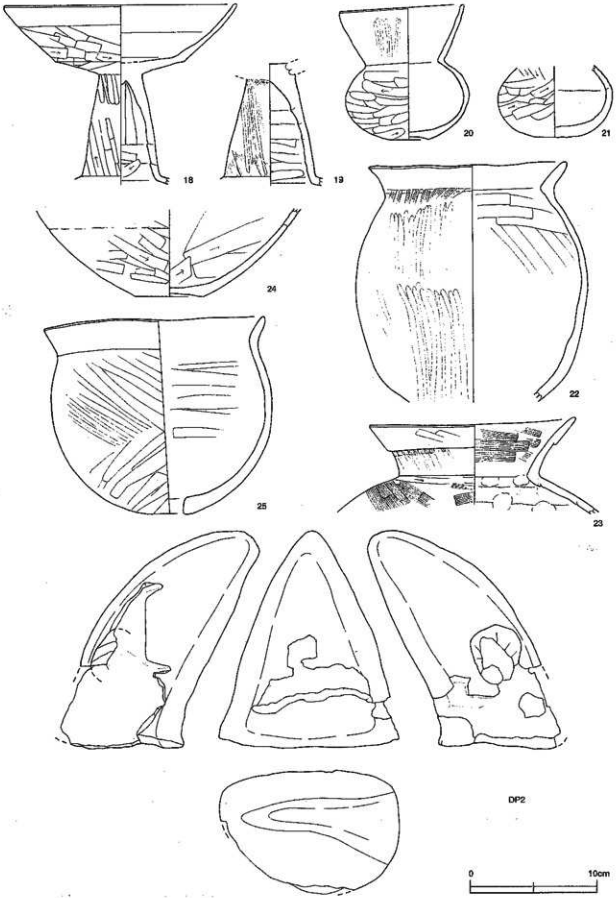
遺物出土状況　土師器片335点（高坏36，壺19，甕８，甕204，甑68），土製支脚３点のほか，炭化材が多量に検出され，焼土ブロックも検出されている。土師器片は炉の周囲，貯蔵穴，東壁の中央付近の床面から多く出土している。DP２～４の土製支脚は，炉の周囲に横位でまとまって出土し，内部は未焼成であり，外側が皮状に焼成されている。全体的に床面から検出された炭化材は，主軸方向に対して平行または直交方向を指すものが多く，これに斜交するものも見られる。

所見　本跡の時期は，出土土器から５世紀前半と考えられる。本跡は居住中に焼失したもので，調査区内では最も炭化材の遺存状態がよく，完全に焼失しない状態のまま放置されたと考えられる。炭化材（イ・ロ・ハ）について樹種同定を行った（付章参照）。その結果，３点ともクヌギ節であることが明らかになった。また，本跡から出土した土製支脚と類似するものは，第13号住居跡からも出土している。

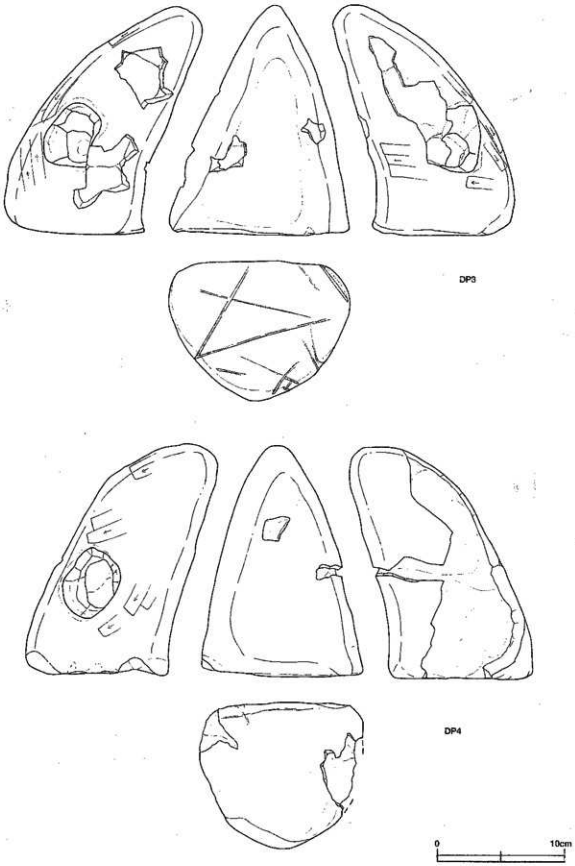
第3号住居跡出土遺物観察表（第12・13図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
18	土師器	高坏	18.4	(14.2)	—	石英	赤	普通	脚部外面ヘラ削り	炉	50%
19	土師器	高坏	—	(9.7)	—	長石	にぶい褐	普通	脚部外面ヘラ磨き	南東コーナー部,床面	20%
20	土師器	壺	9.8	10.7	3.0	石英	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り,底面ナデ	南壁沿い，床面	98%，PL13
21	土師器	壺	—	(5.6)	3.1	石英・長石	にぶい黄橙	普通	体部外面・底面ヘラ削り	中央部，床面	70%
22	土師器	甕	15.6	(19.0)	—	石英	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ磨き	貯蔵穴	60%,復原径,PL13
23	土師器	甕	16.1	(7.7)	—	石英	明赤褐	普通	頸部外面ハケ目整形	東壁沿い，床面	10%
24	土師器	甕	—	(6.9)	5.4	石英・長石	にぶい褐	普通	体部外面・底面ヘラ削り	北壁沿い，床面	30%
25	土師器	甑	17.3	15.6	3.5	長石	橙	普通	体部外面・底面ヘラ削り	東壁沿い，床面	80%，PL13

番号	器種	幅	厚さ	高さ	重さ	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP2	支脚	14.2	(9.9)	17.4	(1,540)	腐植土	にぶい黄橙	体部表面ヘラ削り	炉	80%，PL19
DP3	支脚	14.2	11.1	18.1	1,690	腐植土	にぶい黄橙	体部表面ヘラ削り，底面小枝痕	炉	95%，PL19
DP4	支脚	12.8	11.5	18.3	1,720	腐植土	にぶい黄橙	体部表面ヘラ削り，底面小枝痕	炉	90%，PL19



第12図　第３号住居跡出土遺物実測図(1)



第13図　第３号住居跡出土遺物実測図(2)

第４号住居跡（第14～16図）

位置と確認状況　調査区東部のＣ５j4区に位置する。周囲には，第２・３・５・７号住居跡などが確認されている。

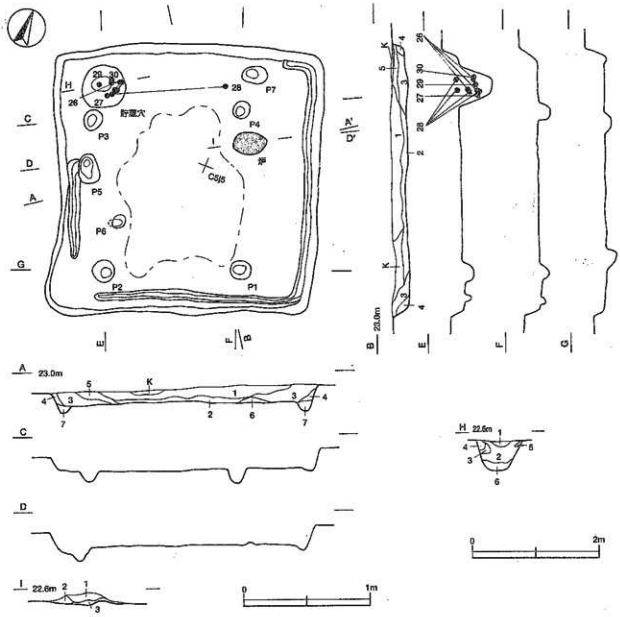
規模と形状　長軸4.27m，短軸4.25mの方形であり，主軸方向はＮ－70°－Ｅである。壁高は27～33cmで，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦であり，中央部が踏み固められている。壁溝は，南壁と東壁，西壁の一部で確認されている。

炉　北東部の東壁寄りに位置する。長径54cm，短径36cmの楕円形を呈し，あまり掘り込まれていない地床炉である。炉床は部分的に赤変している。

炉土層解説

1　にぶい赤褐色　焼土ブロック少量，ローム粒子・炭化物微量
2　にぶい赤褐色　焼土ブロック少量，ロームブロック・炭化粒子微量
3　赤　褐　色　焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化粒子微量



第14図　第４号住居跡実測図

貯蔵穴　北西コーナーに位置する。径65～70cmの円形で，断面は深さ50cmのU字状を呈する。

貯蔵穴土層解説

1　暗褐色　ローム ブロック少量，炭化物微量
2　暗褐色　ローム ブロック・焼土粒子少量，炭化物微量
3　褐　色　ローム ブロック中量，焼土粒子少量，炭化物微量
4　明褐色　ローム ブロック多量
5　褐　色　ローム ブロック中量，焼土粒子少量
6　褐　色　ローム ブロック多量

ピット　7か所。主柱穴はP 1 ～P 4 で，深さは12～22cmである。西壁の北西コーナー近くに位置するP 5 は深さ20cmで，出入り口施設に伴うものと考えられる。P 6 ・P 7 の性格は不明である。

覆土　上層は黒色の腐植土，下層は暗褐色の腐植土からなり，レンズ状の堆積を示す自然堆積である。

土層解説

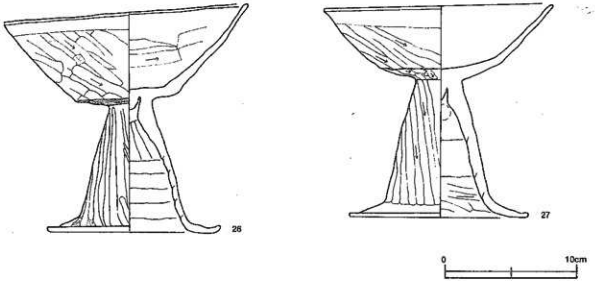
1　黒　　色　ローム ブロック・焼土粒子微量
2　暗 褐 色　ローム粒子少量
3　暗 褐 色　ローム ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
4　暗 褐 色　ローム粒子中量
5　黒 褐 色　ローム ブロック少量
6　暗赤褐色　焼土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子微量
7　暗 褐 色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片166点（高坏48，坩10，甕83，甑25），軽石１点が出土している。土師器片のうちの93点は貯蔵穴から出土している。ほかから出土したものは破片状で，北東部の覆土下層からやや多く出土している。28・29・30は，貯蔵穴内の覆土上部から出土しており，26・27はその下部から出土している。

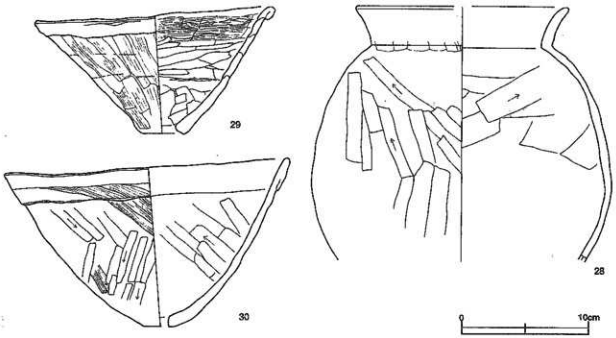
所見　本跡の時期は，出土土器から5世紀前半と考えられる。

第4号住居跡出土遺物観察表（第15・16図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
26	土師器	高坏	18.4	17.4	13.1	石英・小礫	橙	普通	坏部内・外面ヘラ削り	貯蔵穴	95%，PL13
27	土師器	高坏	17.2	16.2	13.6	石英	にぶい橙	普通	坏部外面ヘラ削り	貯蔵穴	85%，PL13
28	土師器	甕	(16.6)	(20.1)	—	石英・長石	灰褐	普通	体部内・外面ヘラ削り	貯蔵穴・北部	30%，復原率PL14
29	土師器	甑	18.8	10.0	4.0	石英	にぶい橙	普通	体部外面ハケ目整形	貯蔵穴	100%，PL13
30	土師器	甑	22.3	13.4	2.4	石英・長石・小礫	赤	普通	体部内・外面ハケ目整形	貯蔵穴	50%，内面白色粒子多量，PL13



第15図　第４号住居跡出土遺物実測図(1)



第16図　第４号住居跡出土遺物実測図(2)

第５号住居跡（第17・18図）

位置と確認状況　調査区東部のC５e6区に位置する。調査区内で南西コーナーと西壁，南壁の一部が調査されそのほかは調査区域外にのび，炭化材が検出された焼失家屋である。

規模と形状　南西コーナーが直角であるため方形または長方形と推定される。南北軸は（4.82）m，東西軸は（2.85）mだけがそれぞれ確認できた。主軸方向は炉や出入り口施設が確認されなかったため不明であるが，西壁の方向はN－26°－Wを指し，壁高は53cmでほぼ直立する。

床　ほぼ平坦であり，貯蔵穴の周囲から中央部が踏み固められている。壁溝は，西壁の一部を除いて確認されている。

貯蔵穴　南西コーナーに位置する。長径78cm，短径64cmの楕円形で，断面は深さ66cmのU字状を呈する。

貯蔵穴土層解説
1　黒褐色　ロームブロック・炭化物少量
2　黒　色　ロームブロック少量，炭化物微量
3　褐　色　ロームブロック中量

ピット　１か所。深さ59cmで南西コーナー近くに位置し，主柱穴の１つと考えられる。

ピット土層解説
1　極暗褐色　ロームブロック中量，炭化物少量
2　暗 褐 色　ロームブロック中量，炭化物微量
3　褐　　色　ロームブロック中量

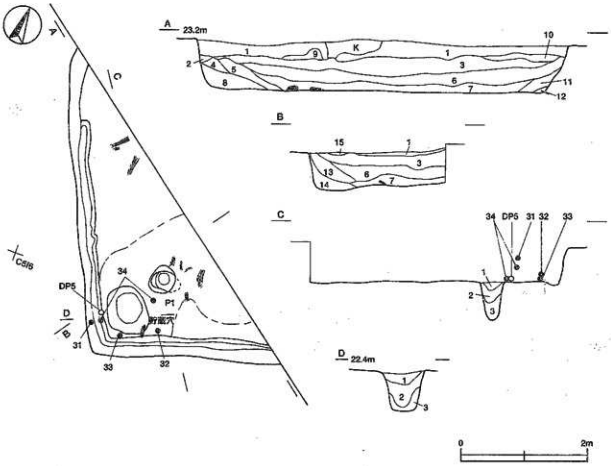
覆土　黒色や黒褐色を呈する腐植土からなり，レンズ状堆積を示す自然堆積である。

土層解説
1　黒 褐 色　ロームブロック少量，炭化物微量
2　黒 褐 色　ロームブロック少量，炭化物微量
3　黒　　色　ロームブロック・炭化物少量
4　暗 褐 色　ロームブロック中量，炭化粒子微量
5　暗 褐 色　ロームブロック中量，炭化物微量
6　黒 褐 色　ロームブロック中量，炭化物少量，焼土ブロック微量
7　黒 褐 色　ロームブロック中量，炭化物少量，焼土粒子微量
8　極暗褐色　ロームブロック中量，炭化物少量，焼土ブロック微量
9　黒　　色　ロームブロック少量，炭化物微量
10　黒　　色　ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化物微量

11 黒 褐 色 ロームブロック少量，炭化物微量
12 暗 褐 色 ロームブロック少量，炭化粒子微量
13 暗 褐 色 ロームブロック・炭化物少量
14 黒 色 ロームブロック・炭化物少量
15 黒 色 ロームブロック・炭化粒子少量，焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片77点（椀5，高坏16，坩8，甕48），球状土錘1点，軽石1点が出土し，炭化物も検出されている。遺物は貯蔵穴周辺の覆土下層から多く出土している。炭化物は，西壁に平行を指すものが多いが，直交するものも見られる。

所見 本跡の時期は，出土土器から5世紀前半と考えられる。本跡の廃絶後に，火災にあったものと考えられる。

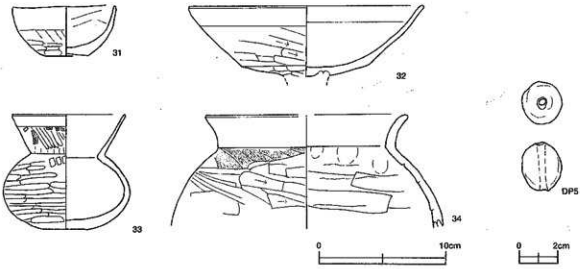


第17図 第5号住居跡実測図

第5号住居跡出土遺物観察表（第18図）

番号	検 測	器 種	口 径	器 高	底 径	胎 土	色 調	焼成	手法の特徴	出土位置	備 考
31	土 師 器	椀	8.1	4.0	3.4	—	にぶい橙	普通	体部外面・底面ヘラ削り	南西コーナー部,上層	80%
32	土 師 器	高 坏	18.6	(5.6)	—	石英	にぶい橙	普通	坏部外面ヘラ削り	南西コーナー部,下層	40%
33	土 師 器	壺	8.8	9.1	3.4	長石	にぶい橙	普通	底面ヘラ削り	南西コーナー部,床面	100%，PL14
34	土 師 器	甕	[15.8]	(9.0)	—	石英・長石	にぶい黄橙	普通	体部内・外面ヘラ削り	南西コーナー部,床面	10%

番号	器 種	径	厚 さ	孔 径	重 さ	胎 土	色 調	特 徴	出土位置	備 考
DP5	球状土錘	2.1	2.5	0.6	9.2	石英	黒 褐	ナデ	南西コーナー部,下層	100%



第18図　第5号住居跡出土遺物実測図

第7号住居跡（第19・20図）

位置と確認状況　調査区東部のC5g3区に位置し，周囲には第3～5・9号住居跡などが確認されている。また，炭化物が検出された焼失家屋である。

規模と形状　長軸6.14m，短軸5.22mの長方形であり，主軸方向はN－28°－Wである。壁高は40～50cmで，やや外傾して立ち上がる。

床　P5と貯蔵穴の周辺に緩やかな高まりがあるほかは，ほぼ平坦である。この高まりは，かなり踏み固められており，出入り口施設部と考えられる。また，炉の周辺もよく踏み固められている。壁溝は北西コーナーと南東コーナー部を除いて壁際を巡り，周仕切り溝と考えられる浅い溝が2条確認されている。

炉　中央の北壁寄りに位置する。長径120cm，短径90cmの楕円形を呈し，炉床は床面とほぼ同じ高さで検出され，全体的に赤変しており，一部分が硬化している。

炉土層解説

1　にぶい赤褐色　焼土ブロック多量，ローム粒子少量
2　赤　褐　色　焼土ブロック多量，ローム粒子少量
3　赤　褐　色　焼土ブロック多量，ローム粒子少量
4　褐　　色　ロームブロック多量，焼土粒子少量

貯蔵穴　南東コーナーに位置する。長軸90cm，短軸70cmの隅丸方形で，断面形は深さ45cmのU字状を呈している。

貯蔵穴土層解説

1　黒　色　炭化物中量，ロームブロック少量，焼土粒子微量
2　黒褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　黒褐色　ロームブロック・焼土ブロック中量，炭化粒子微量
4　暗褐色　ロームブロック中量，焼土粒子微量

ピット　8か所。主柱穴と考えられるものはP1～P4で，深さは18～26cmである。貯蔵穴の西側に位置するP5は深さ42cmで，出入り口施設に伴うものと考えられる。P6～P8の性格は不明である。

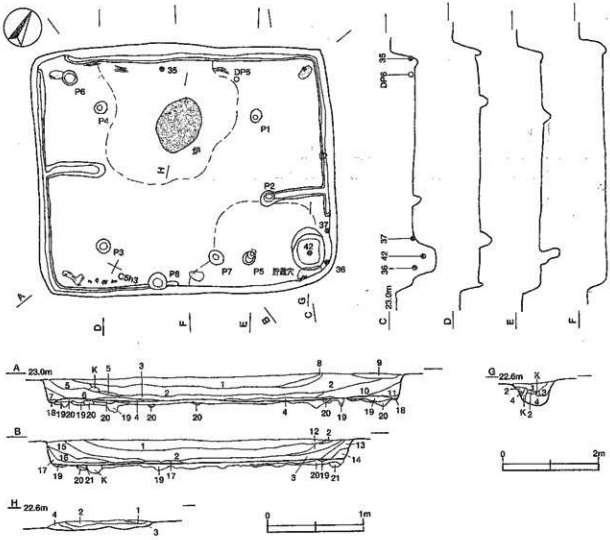
覆土　上層と中層は黒色の腐植土，下層はロームブロックであり，レンズ状堆積を示す自然堆積である。第19～21層は掘り方の埋土である。

土層解説

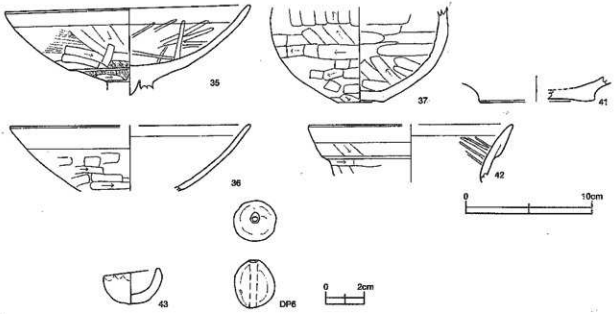
1 黒　色　ロームブロック・焼土粒子少量
2 黒　色　ロームブロック・焼土粒子少量
3 暗褐色　ロームブロック中量
4 褐　色　ロームブロック多量
5 黒褐色　ロームブロック・焼土粒子少量，炭化物微量
6 暗褐色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化物少量
7 暗褐色　ロームブロック中量，炭化物少量
8 黒　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化物少量
9 黒褐色　ロームブロック少量，炭化物微量
10 暗褐色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化物少量
11 褐　色　ロームブロック・焼土粒子中量
12 黒褐色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
13 褐　色　ロームブロック中量
14 褐　色　ロームブロック多量
15 極暗褐色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
16 暗褐色　ロームブロック中量，炭化物少量
17 褐　色　ロームブロック多量，焼土粒子少量
18 褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子微量
19 明褐色　ロームブロック多量
20 褐　色　ロームブロック多量
21 褐　色　ロームブロック多量

遺物出土状況　土師器片481点（坏・椀18，高坏70，坩1，壺・甕391，ミニチュア土器1），球状土錘1点，不明鉄製品1点，礫1点，混入した縄文土器片4点のほか，炭化物も検出されている。遺物は，中央部と北壁近く，貯蔵穴周辺の覆土中層や下層からも多く出土している。中央部付近のものは覆土中層から出土しているものが多く，投棄されたものである（第84図，38・39）。炭化物は，北壁と南壁沿いに検出され，北壁のものは主軸と直交方向，南壁は主軸方向を向いている。

所見　本跡の時期は，出土土器から5世紀前半と考えられる。本跡の廃絶後に，火災にあったものと考えられる。中央部に投棄された遺物は古墳時代後期のもので，これらは本跡の埋没過程で窪地に投棄されたものと考えられる。



第19図　第7号住居跡実測図



第20図　第７号住居跡出土遺物実測図

第7号住居跡出土遺物観察表（第20図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
35	土師器	高坏	19.3	(7.2)	—	石英・長石・小礫	にぶい橙	普通	坏部内面ヘラナデ	北壁際，下層	50%
36	土師器	高坏	[19.0]	(5.2)	—	石英・長石	にぶい橙	普通	坏部外面ヘラ削り	南東コーナー部，下層	5%
37	土師器	坩	—	(7.5)	3.6	石英・長石	にぶい橙	普通	底面ヘラ削り	南東コーナー部，床面	10%
41	土師器	甕	—	(2.0)	3.8	石英・長石・小礫	橙	普通	底面ヘラ削り	南東部，覆土中	5%
42	土師器	壺	[16.0]	(4.6)	—	長石	灰黄褐	普通	口縁部内面ヘラ磨き	貯蔵穴	5%
43	土師器	ミニチュア土器	3.0	1.9	1.6	—	にぶい橙	普通	体部内・外面，底面部ナデ	南部，床面	98%

番号	種別	径	厚さ	孔径	重さ	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP6	球状土錘	2.1	2.6	0.6	9.2	石英	橙	ナデ	北部，下層	100%

第８号住居跡（第21・22図）

位置と確認状況　調査区東部のＣ６j4区に位置する。南西コーナーと壁の一部が確認されており，そのほかは調査区域外に延びる。

規模と形状　南西コーナーが直角であるため方形または長方形と推定される。南北軸は（4.30）m，東西軸は（4.20）mだけがそれぞれ確認でき，主軸方向はN－６°－Wである。壁高は32～35cmで，やや外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦であり，出入り口部はよく踏み固められ，壁溝は確認されていない。

ピット　３か所。Ｐ１とＰ３は，深さ16～17cmで南西コーナー近くに位置し，Ｐ１が主柱穴と考えられる。南壁近くに位置するＰ２は深さ９cmで，出入り口施設に伴うものと考えられる。

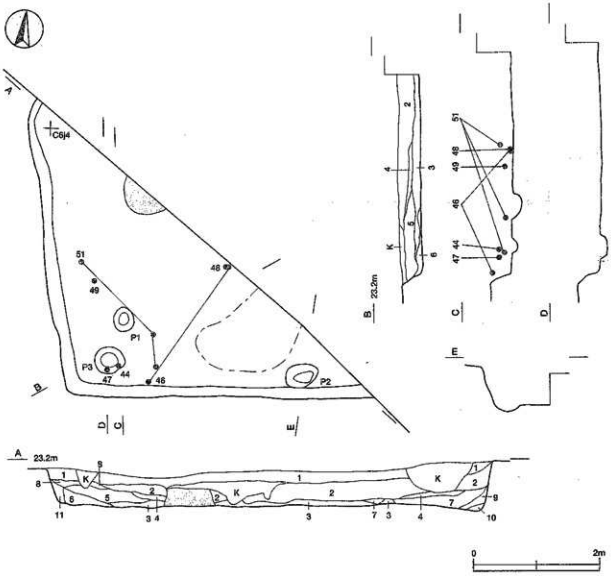
覆土　上層や中層は黒褐色の腐植土，下層はロームブロックである。レンズ状堆積を示した自然堆積と考えられる。

土層解説

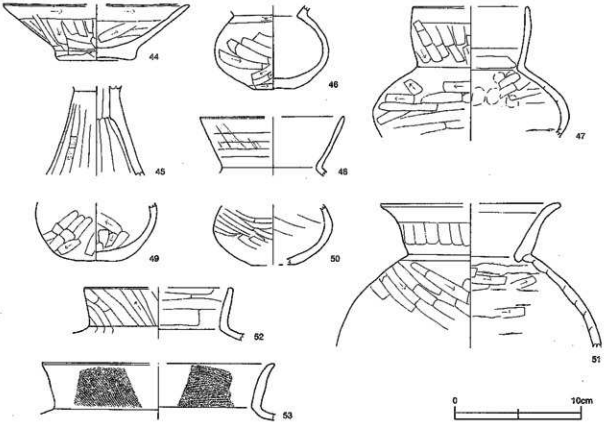
1　黒褐色　ロームブロック少量，炭化物微量
2　黒褐色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化物微量
3　褐　色　ロームブロック中量，炭化物微量
4　極暗褐色　ローム粒子・炭化物微量
5　暗褐色　ロームブロック少量，炭化物微量
6　暗褐色　ロームブロック中量，炭化物微量
7　黒褐色　ロームブロック少量，炭化物微量
8　黒褐色　ロームブロック少量，炭化物微量
9　褐　色　ロームブロック中量
10　暗褐色　ロームブロック少量
11　極暗褐色　ローム粒子少量，炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片182点（坏1，高坏8，甕49，壺・甕124），鞴1点が出土しており，焼土ブロックも検出されている。遺物は，南西コーナー部の覆土中層や下層から出土し，出土層位は土層に沿うように中央部に向かい低くなる。また，焼土ブロックは中央部の覆土中から検出されている。

所見　覆土中の遺物や焼土ブロックは，土層の堆積状況に沿って出土しているため，本跡の埋没段階での投棄物と考えられる。遺構の全体が明らかになっていないため内部施設なども不明である。このため時期を特定することはできないが，遺跡全体の状況から古墳時代中期のものと考えられる。出土した土器の時期は，5世紀前半のものであり，本跡はそれらと同時期かあるいは多少古い時期のものと考えられる。



第21図　第8号住居跡実測図



第22図　第8号住居跡出土遺物実測図

第8号住居跡出土遺物観察表（第22図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
44	土師器	坏	[14.1]	4.4	6.0	石英・長石	にぶい黄橙	普通	底面ヘラ削り	南西コーナー部,上層	50%, PL14
45	土師器	高台坏	—	(7.0)	—	石英・小礫	にぶい黄橙	普通	脚部外面ハケ目整形	南西コーナー部,覆土中	15%
46	土師器	甕	—	(6.6)	2.9	石英	明赤褐	普通	底面ヘラ削り	南西コーナー部,上層	50%
47	土師器	甕	[9.0]	(10.4)	—	石英・長石	にぶい赤褐	普通	体部内・外面ヘラ削り	南西コーナー部,中層	50%
48	土師器	甕	[11.4]	(4.7)	—	石英・長石	橙	普通	口縁部外面ハケ目整形	中央部, 下層	5%
49	土師器	甕	—	(4.6)	3.2	石英・長石	にぶい橙	普通	底面ヘラ削り後ナデ	南西コーナー部,中層	10%
50	土師器	甕	—	(4.7)	[3.4]	石英・長石	橙	普通	底面ヘラ削り	北部, 覆土中	15%
51	土師器	壺	[14.1]	(11.3)	—	石英	にぶい橙	普通	口縁部外面ヘラ削り	南西コーナー部,中層	15%
52	土師器	壺	[11.6]	(4.1)	—	石英・長石	にぶい褐	普通	口縁部内・外面ヘラ削り	南部, 覆土中	5%
53	土師器	甕	[18.2]	(4.5)	—	石英・長石	にぶい赤褐	普通	口縁部内・外面ハケ目整形	南部, 覆土中	5%,図面縮尺表

第9号住居跡（第23・24図）

位置と確認状況　調査区東部のC5c1区に位置する。西側の3分の2以上が確認されており，北東コーナー部は調査区域外へのびる。また，炭化物や焼土ブロックが検出された焼失家屋であり，周囲には第5・7・12・15号住居跡などが確認されている。

規模と形状　長軸7.07m，短軸7.00mの方形であり，主軸方向はN－30°－Wである。壁高は35～43cmで，やや外傾して立ち上がる。

床　南西コーナーの貯蔵穴周辺に高さ15cmほどの土壇状の高まりがあるほかは，ほぼ平坦である。高まり部

分は踏み固められており，出入り口施設部と考えられる。壁溝は南壁の一部と西壁の一部に確認されている。

炉　中央部の北壁寄りに位置する。長径80cm，短径70cmの楕円形を呈し，皿状に10cmほど掘り窪めた地床炉である。炉床は全体に赤変硬化している。

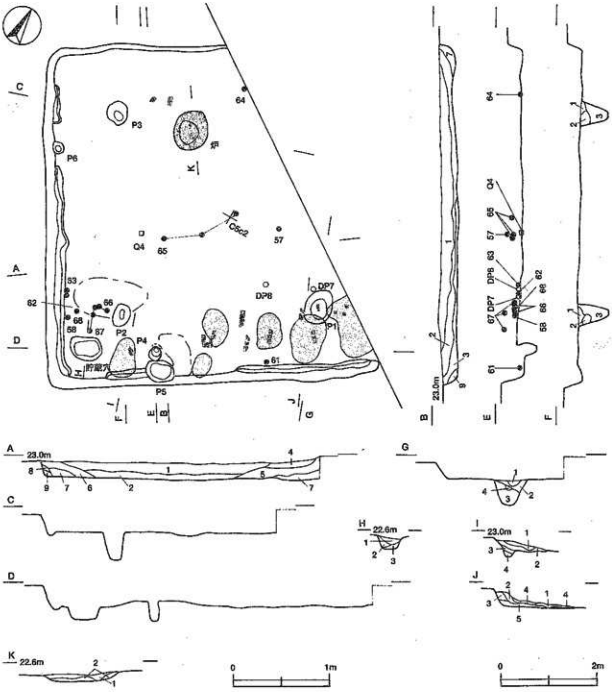
炉土層解説

1　黒　褐　色　焼土粒子中量，ロームブロック・炭化物少量
2　暗赤褐色　焼土ブロック多量，ロームブロック少量

貯蔵穴　南西コーナーに位置する。長軸65cm，短軸50cmの長方形で，断面は深さ31cmのU字状を呈する。

貯蔵穴土層解説

1　黒褐色　ロームブロック中量
2　褐　色　ロームブロック中量
3　褐　色　ロームブロック中量



第23図　第９号住居跡実測図

ピット　6か所。主柱穴はP1～P3の3か所で，深さは53～82cmである。北東コーナー部の柱穴は調査区域外のため検出できなかった。貯蔵穴の東側に位置するP4・P5は，深さ18～42cmで，出入り口施設に伴うものと考えられる。P6の性格は不明である。

ピット土層解説
1　暗　褐　色　ローム ブロック中量
2　極暗褐色　ローム ブロック・炭化物少量
3　褐　　色　ローム ブロック多量
4　褐　　色　ローム ブロック中量

覆土　全体的に極暗褐色や黒褐色などを呈する腐植土よりなり，レンズ状堆積を示した自然堆積である。

土層解説
1　黒　褐　色　ローム ブロック少量，炭化粒子微量
2　極暗褐色　ローム ブロック・炭化物少量，焼土ブロック微量
3　暗　褐　色　ローム ブロック中量，炭化物微量
4　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
5　黒　　色　ローム ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
6　黒　褐　色　ローム ブロック少量，焼土粒子・炭化物微量
7　暗　褐　色　ローム ブロック少量，焼土粒子・炭化物微量
8　褐　　色　ローム粒子中量
9　褐　　色　ローム ブロック多量

遺物出土状況　土師器片604点（坏4，高坏61，坩54，壺・甕453，甑31，ミニチュア土器1），球状土錘2点，磨石1点，臼玉1点，軽石1点，礫1点のほか，炭化物と焼土ブロックも検出されている。土師器片は貯蔵穴周辺や中央部，炉の周囲の覆土下層や床面から多く出土している。炭化物と焼土ブロックは南壁沿いの床面から検出されており，P1付近の焼土ブロック直下の床面は赤変していた。Q4の臼玉は中央部の床面から出土したものである。炭化物と焼土ブロックの方向は，主軸方向と平行している。

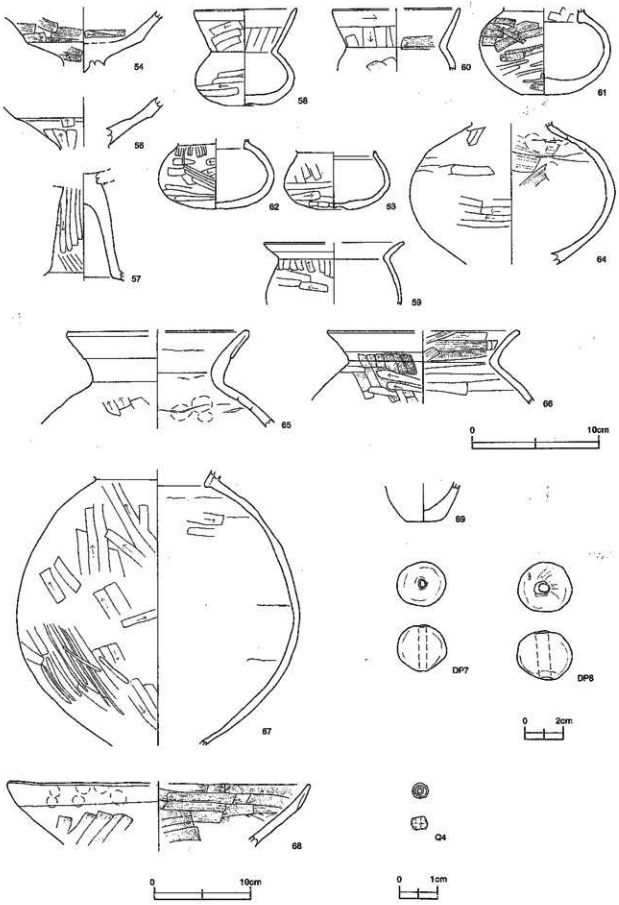
焼土ブロック土層解説
1　暗赤褐色　焼土ブロック多量，ローム ブロック・炭化物少量
2　暗　褐　色　焼土ブロック中量，ローム ブロック少量，炭化物微量
3　褐　　色　ローム ブロック中量
4　暗　褐　色　ローム ブロック中量
5　暗　褐　色　ローム ブロック・焼土ブロック中量，炭化物少量

所見　本跡の時期は，出土土器から5世紀前半と考えられる。炭化物や遺物の出土状況から，本跡の廃絶後に火災にあったものと考えられる。

第9号住居跡出土遺物観察表（第24図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
54	土師器	高坏	—	(4.9)	—	長石	明赤褐	普通	坏部内・外面ハケ目整形	東部，覆土中	10%
56	土師器	高坏	—	(4.0)	—	石英・長石	にぶい橙	普通	坏部外面ヘラ削り	南部，覆土中	10%
57	土師器	高坏	—	(8.6)	—	石英	にぶい橙	普通	脚部外面ヘラ削り	中央部，中層	10%
58	土師器	壺	8.1	7.6	2.6	石英・長石	橙	普通	底面ヘラ削り	南西コーナー部，床面	95%，PL14
59	土師器	小形甕	[11.0]	(4.9)	—	石英	橙	普通	頸・体部外面ヘラ削り	北部，覆土中	10%
60	土師器	壺	[10.0]	(4.9)	—	石英	にぶい橙	普通	頸部外面ヘラ削り	北部，覆土中	10%
61	土師器	壺	—	(6.5)	3.8	石英・長石	にぶい橙	普通	底面ヘラ削り	南壁際，下層	70%
62	土師器	壺	—	(5.5)	2.2	石英	明赤褐	普通	底面ヘラ削り	西壁際，床面	70%
63	土師器	壺	—	(4.6)	2.4	石英	にぶい橙	普通	底面ヘラ削り	西壁際，床面	30%
64	土師器	壺	—	(11.1)	—	石英・長石	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り	北部，床面	20%
65	土師器	壺	[14.0]	(12.7)	—	石英・長石	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り	中央部，中層	10%
66	土師器	甕	[14.8]	(5.8)	—	石英	にぶい橙	普通	体部外面ハケ目整形	南西コーナー部，床面	5%
67	土師器	甕	—	(28.7)	—	石英・長石・小礫	にぶい橙	普通	体部下端ヘラ磨き	南西コーナー部，上層	30%，器付き，PL14
68	土師器	甑	[31.0]	(6.5)	—	石英	褐灰	普通	体部内・外面ハケ目整形	南西コーナー部，床面	10%
69	土師器	ミニチュア土器	—	(2.0)	1.6	—	にぶい橙	普通	底面指ナデ	南西部，覆土中	70%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重さ	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP7	球状土錘	2.8	2.6	0.7	15.8	—	にぶい褐	ナデ	南部，床面	100%
DP8	球状土錘	2.4	2.5	0.6	10.6	石英	褐灰	ナデ，穿孔部付近擦痕	南部，床面	100%



第24図　第９号住居跡出土遺物実測図

番号	器種	径	厚さ	孔径	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
Q4	臼	玉	0.4	0.35	0.15	0.1	滑石	側面に穿	中央部，床面	100%，PL30

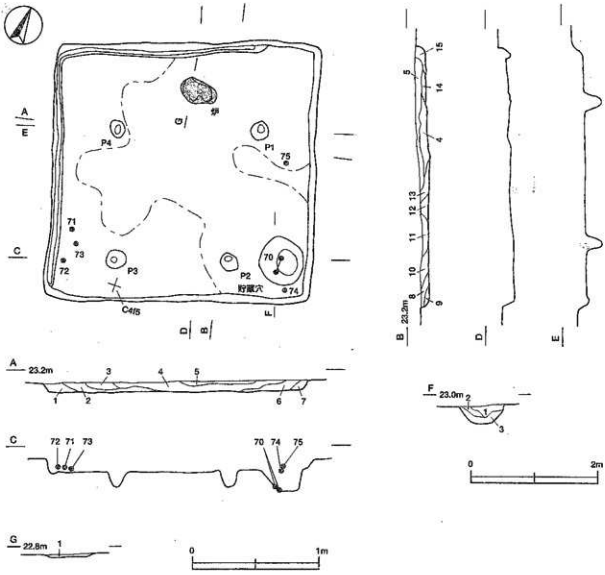
第10号住居跡（第25・26図）

位置と確認状況　調査区中央部のC 4 e5区に位置し，周囲には第11～13・15号住居跡などが確認されている。

規模と形状　長軸4.15m，短軸4.10mの方形であり，主軸方向はN－15°－Wである。壁高は15～20cmで，やや外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦であり，南西コーナー部や北西コーナー部を除いて広く踏み固められている。壁溝は北壁と西壁に確認されている。

炉　中央の北壁寄りに位置する。長径60cm，短径36cmの楕円形で，皿状に4cmほど掘り窪めた地床炉である。炉床は全体的に赤変し，部分的に硬化している。



第25図　第10号住居跡実測図

炉土層解説
1　赤褐色　焼土粒子多量，ローム粒子少量

貯蔵穴　南東コーナーに位置する。径35cmの円形を呈し，断面は深さ33cmの西側が外傾するU字状を呈している。

貯蔵穴土層解説
1　暗褐色　ロームブロック・炭化粒子少量
2　暗褐色　ロームブロック少量
3　褐　色　ロームブロック中量

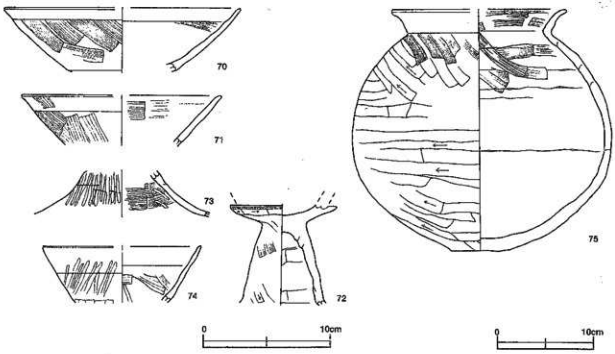
ピット　4か所。これらは主柱穴であり，深さは24～29cmである。

覆土　全体的に暗褐色や極暗褐色の腐植土からなり，レンズ状堆積を示した自然堆積である。

土層解説
1　暗 褐 色　ロームブロック少量，炭化物微量
2　極暗褐色　ロームブロック中量，炭化物微量
3　暗 褐 色　ロームブロック中量，炭化物微量
4　黒 褐 色　ロームブロック・炭化粒子少量
5　暗 褐 色　ロームブロック・炭化物少量
6　暗 褐 色　ロームブロック中量，炭化物微量
7　褐　色　ロームブロック中量
8　極暗褐色　ロームブロック少量，炭化物微量
9　黒 褐 色　ロームブロック・炭化物少量
10　暗 褐 色　ロームブロック中量，焼土ブロック・炭化物微量
11　黒 褐 色　ロームブロック・炭化物少量
12　暗 褐 色　ロームブロック中量，炭化物微量
13　黒 褐 色　ロームブロック・炭化物少量
14　暗 褐 色　ロームブロック少量，炭化物微量
15　極暗褐色　ロームブロック少量，炭化物微量

遺物出土状況　土師器片115点（高坏31，坩5，甕79）が出土している。土師器片は貯蔵穴周辺や南西コーナー部の覆土下層や床面から多く出土している。75は東壁沿いからつぶれた状態で出土し，74は貯蔵穴近くの床面から，70は貯蔵穴内から出土している。また，71～73は南西コーナー部の覆土下層から出土している。

所見　本跡の時期は，出土土器から5世紀前半である。



第26図　第10号住居跡出土遺物実測図

第10号住居跡出土遺物観察表（第26図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	成形	手法の特徴	出土位置	備考
70	土師器	高坏	[18.6]	(5.0)	—	石英・小礫	にぶい橙	普通	坏部内・外面ハケ目整形	貯蔵穴，底面	10%
71	土師器	高坏	[15.6]	(4.0)	—	石英・長石	にぶい橙	普通	坏部内・外面ハケ目整形	南西コーナー部，下層	5%
72	土師器	高坏	—	(7.9)	—	石英	にぶい黄橙	普通	受部部ハケ目痕	南西コーナー部，下層	30%
73	土師器	高坏	—	(3.7)	—	石英・長石	橙	普通	脚部外面ハケ目整形	南西コーナー部，下層	5%
74	土師器	坩	[12.4]	(4.4)	—	石英・長石	にぶい橙	普通	口縁部外面ヘラ磨き	南東コーナー部，床面	10%
75	土師器	甕	[17.8]	25.0	5.9	石英・長石	にぶい黄橙	普通	底部ヘラ削り	東壁沿い，床面	60%，張付痕，凹14

第11号住居跡（第27・28図）

位置と確認状況　調査区中央部のC４a2区に位置し，周囲には第13・17号住居跡，第27・30号土坑などが確認されている。

規模と形状　長軸6.16m，短軸6.13mの方形で，主軸方向はN－43°－Wである。壁高は18～30cmで，やや外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦であり，P１とP２の周辺，貯蔵穴１の周辺や出入り口施設部が踏み固められている。壁溝は西コーナー部を除きほぼ全周する。

炉　中央の北西壁寄りに位置する。径33cmほどの不整円形を呈し，皿状に14cmほど掘り窪めた地床炉である。炉床は全体的に赤変硬化している。

炉土層解説
1　暗赤褐色　焼土ブロック少量，ローム粒子・炭化物微量
2　暗赤褐色　焼土ブロック多量，炭化粒子微量

貯蔵穴　２か所。貯蔵穴１は南コーナーに位置しており，径80cmほどの円形で，深さ40cmの擂鉢状を呈する。貯蔵穴２は東コーナーに位置しており，長径66cm，短径48cmの楕円形で，断面は深さ40cmのU字状を呈する。

貯蔵穴１・２土層解説
1　極暗褐色　ロームブロック中量，炭化物微量
2　暗　褐色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
3　黒　褐色　ロームブロック少量，炭化物微量
4　暗　褐色　ロームブロック中量，炭化粒子微量

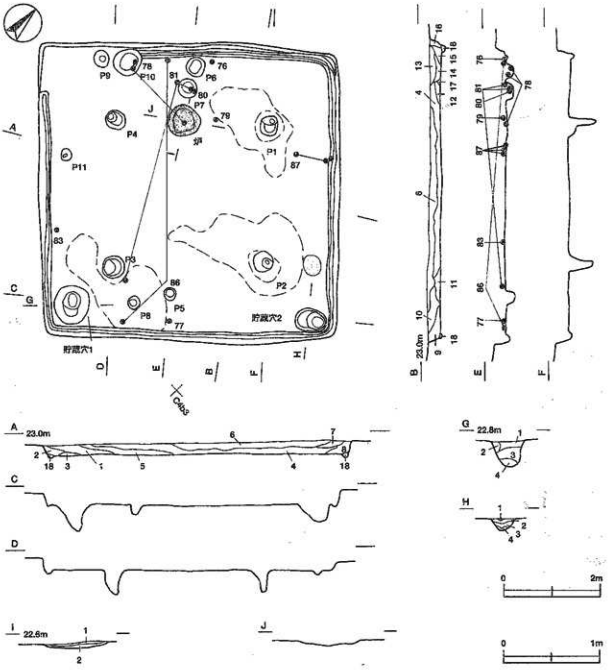
ピット　11か所。主柱穴はP１～P４の４か所で，深さは47～57cmである。南東壁の貯蔵穴１寄りに位置するP５・P８は深さ20cmで，出入り口施設に伴うものと考えられる。P６・P７・P９～P11の性格は不明である。

覆土　全体的に暗褐色や黒褐色などを呈する腐植土からなり，レンズ状堆積を示した自然堆積である。

土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量，炭化物微量
2　暗　褐　色　ロームブロック中量，炭化物微量
3　極暗褐色　ロームブロック少量，炭化物微量
4　黒　褐　色　ロームブロック・炭化物少量，焼土粒子微量
5　極暗褐色　ロームブロック中量，炭化物微量
6　黒　褐　色　ロームブロック中量，炭化物少量
7　暗　褐　色　ロームブロック中量，炭化物微量
8　暗　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
9　黒　褐　色　ロームブロック・炭化物少量
10　黒　褐　色　ロームブロック・炭化物少量
11　極暗褐色　ロームブロック中量，炭化物微量
12　黒　褐　色　ロームブロック少量，炭化物微量
13　黒　褐　色　ロームブロック・炭化物少量
14　黒　　色　炭化物中量，ロームブロック少量
15　極暗褐色　ロームブロック中量，炭化物微量
16　褐　　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
17　黒　　色　炭化物中量，ロームブロック少量
18　暗　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片797点（坏14，高坏92，坩66，壺・甕629，甑３），礫１点が出土している。土師器片は炉の周辺や出入り口部，南コーナー部などの床面から破片の状態で出土している。

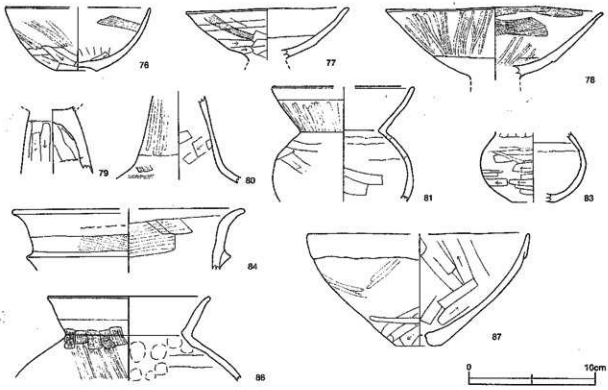
所見　本跡の時期は出土土器から５世紀前半と考えられる。



第27図　第11号住居跡実測図

第11号住居跡出土遺物観察表（第28図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
76	土師器	鉢	[11.3]	5.0	3.2	長石	にぶい黄橙	普通	底面ヘラ削り	北西壁沿い，床面	30%
77	土師器	高坏	12.8	(4.1)	—	石英・長石	にぶい橙	普通	坏部外面ハケ目整形	出入り口部，床面	40%
78	土師器	高坏	17.0	(5.8)	—	石英・長石	明赤褐	普通	坏部内・外面ヘラ磨き	ピット（P10）・炉	45%
79	土師器	高坏	—	(5.3)	…	石英・長石	にぶい橙	普通	脚部外面ヘラ削り	炉東側，下層	10%
80	土師器	高坏	—	(7.0)	—	石英・長石	にぶい赤褐	普通	脚部外面ヘラ磨き	ピット（P7）	5%
81	土師器	壺	[11.0]	(9.1)	—	長石	にぶい褐	普通	口縁部外面ヘラ磨き	北西部，床面	20%
83	土師器	壺	—	(5.5)	[3.4]	石英・長石	にぶい橙	普通	底面ヘラ削り	南西壁沿い，床面	15%
84	土師器	壺	[18.2]	(4.9)	—	長石	赤	普通	口縁部内・外面ハケ目整形	南部，覆土中	5%
86	土師器	甕	12.7	(6.6)	…	石英	にぶい黄橙	普通	頸部ハケ目整形	北西壁・出入り口部	10%
87	土師器	甕	[17.4]	8.9	3.5	石英	にぶい橙	普通	底面ヘラ削り	北東壁沿い，床面	30%



第28図　第11号住居跡出土遺物実測図

第12号住居跡（第29～31図）

位置と確認状況　調査区東部のC 4 d6区に位置し，炭化物が検出された焼失家屋である。周囲には第10・15号住居跡などが確認されている。

規模と形状　長軸4.85m，短軸4.70mの方形であり，主軸方向はN－10°－Wである。壁高は15～23cmで，やや外傾して立ち上がる。

床　南東部に5cmほどの緩やかな高まりがあるほかは，ほぼ平坦である。高まり部周辺はよく踏み固められており，出入り口部と考えられる。また，炉の東側の一部もよく踏み固められている。

炉　中央の北壁寄りに位置する。長径86cm，短形50cmの不整楕円形を呈し，皿状にわずかに掘り窪められた地床炉である。炉床は東半分が赤変硬化している。

炉土層解説

1　にぶい赤褐色　焼土ブロック多量，ロームブロック粒子少量
2　褐　　色　ローム粒子中量，焼土粒子微量
3　褐　　色　ローム粒子中量，焼土粒子微量

貯蔵穴　南東コーナーに位置する。平面形は長径70cm，短径50cmの楕円形で，断面形は深さ36cmのU字状を呈している。

貯蔵穴土層解説

1　極暗褐色　ロームブロック・炭化物少量
2　黒　褐　色　炭化物中量，ロームブロック少量
3　褐　　色　ロームブロック多量

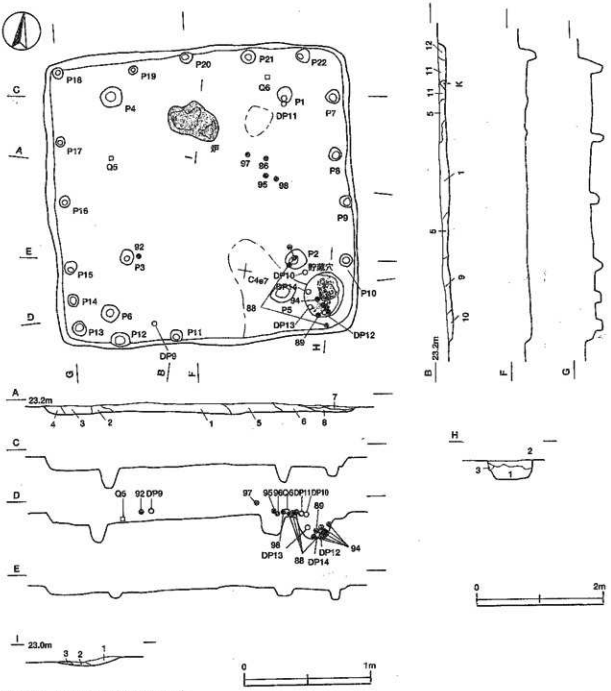
ピット　22か所。主柱穴はP 1 ～P 4 の 4 か所で，深さは11～31cmである。貯蔵穴の脇に位置するP 5 は深さ31cmで，出入り口施設に伴うものと考えられる。P 6 の性格は不明であるが，壁際に位置するP 7 ～P22は，位置などから壁柱穴と考えられる。

覆土　全体的に暗褐色や黒褐色などを呈する腐植土からなる。ロームブロックを含んでおりブロック状の堆積を示すことから人為的な堆積と考えられる。

土層解説

1　暗褐色　ロームブロック少量
2　暗褐色　ロームブロック中量
3　褐　色　ロームブロック中量，炭化物微量
4　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化物微量
5　黒褐色　ロームブロック・炭化物少量
6　暗褐色　ロームブロック中量，炭化物少量
7　極暗褐色　ロームブロック・炭化物少量
8　褐　色　ロームブロック中量
9　暗褐色　ロームブロック中量，炭化物少量
10　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子少量，炭化物微量
11　極暗褐色　ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化物微量
12　褐　色　ロームブロック中量，炭化物微量

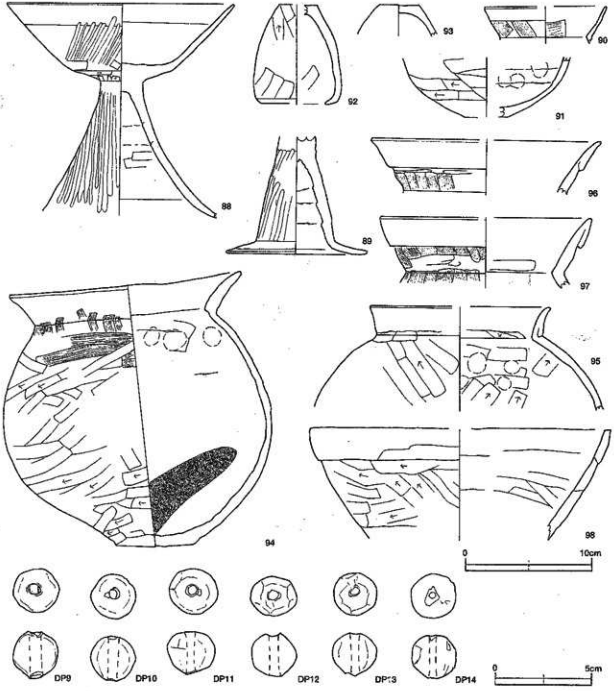
遺物出土状況　土師器片904点（坏4，椀4，高坏49，器台2，埦49，甕781，甑15），球状土錘8点，剣形模造品1点，軽石1点のほか，炭化米のブロックや炭化物も検出されている。遺物は全体に散在しているが，と



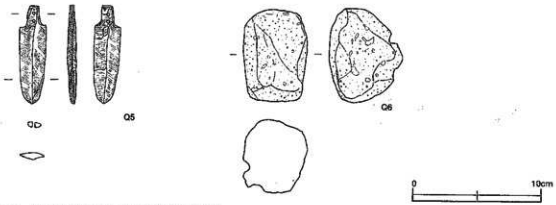
第29図　第12号住居跡実測図

くに貯蔵穴付近と北東部に集中し，貯蔵穴内からも多くの遺物が出土している。89・94は貯蔵穴からの出土であり，炭化米と炭化物はこれらの土器の下から出土している。94の内側には煤が付着し，出土状況から炭化米は94に入っていたものと考えられる。

所見　本跡の時期は，出土土器から5世紀前半と考えられ，西の第10号住居跡，北の第15号住居跡とほぼ同時期と考えられる。また炭化米などの遺物の出土状況から居住中に火災にあったもので，炭化物は床面からはほとんど検出されず，上屋構造物は完全に燃焼したものと考えられる。炭化米は籾殻が付着しているもので糯籾と推定される。92，93の器台は，出土の状況や二次焼成を受けていることから，支脚としての再利用が想定され，同じ形状のものは第15号住居跡からも出土している。



第30図　第12号住居跡出土遺物実測図(1)



第31図　第12号住居跡出土遺物実測図(2)

第12号住居跡出土遺物観察表（第30・31図）

番号	器別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
88	土師器	高坏	17.9	(17.0)	—	石英・長石	橙	普通	坏部・脚部外面ヘラ磨き	南東コーナー部	80%，PL14
89	土師器	高坏	—	(9.4)	11.2	石英・長石	橙	普通	坏部内面ヘラナデ	貯蔵穴	40%
90	土師器	壺	[9.6]	(2.9)	—	石英・長石	にぶい黄橙	普通	口辺部内・外面ハケ目整形	南部，覆土中	5%
91	土師器	壺	—	(4.8)	[3.4]	石英・長石	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り	南部，覆土中	15%
92	土師器	器台	[3.0]	7.9	[5.2]	石英・長石	にぶい橙	普通	体部外面・器受部ヘラ削り	中央部，上層	40%，二次焼成
93	土師器	器台	3.1	(2.5)	—	石英・長石	にぶい橙	普通	体部外面・器受部ヘラ削り	南部，覆土中	20%，二次焼成
94	土師器	甕	18.1	20.2	6.1	石英・長石・小礫	橙	普通	底面ヘラ削り	貯蔵穴	95%，内面剥落，孔出
95	土師器	甕	[14.2]	(8.3)	—	石英・長石	赤橙	普通	体部内・外面ヘラ削り	中央部，床面	5%
96	土師器	甕	[18.0]	(4.2)	—	石英・長石	にぶい橙	普通	頸部外面ハケ目整形	中央部，床面	5%
97	土師器	甕	[16.6]	(5.6)	—	石英・長石・小礫	にぶい橙	普通	頸部外面ハケ目整形	中央部，上層	5%
98	土師器	甑	[23.6]	(8.8)	—	石英・長石	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り	中央部，下層	15%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重さ	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP9	球状土錘	2.4	2.5	0.6	10.6	石英	褐灰	ナデ	南壁沿い，上層	100%，PL19
DP10	球状土錘	2.4	2.4	0.5	10.6	—	橙	ナデ	貯蔵穴付近	100%，PL19
DP11	球状土錘	2.5	2.1	0.5	11.5	—	にぶい黄橙	ナデ	北東部	100%，PL19
DP12	球状土錘	2.5	2.2	0.5	9.3	—	暗灰黄	ナデ	貯蔵穴	100%，PL19
DP13	球状土錘	2.4	2.3	0.4	8.9	—	橙	ナデ	貯蔵穴	98%，PL19
DP14	球状土錘	2.4	2.3	0.4	12.7	—	橙	ナデ	貯蔵穴	98%，PL19

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
Q5	剥形模造品	7.7	2.1	0.6	13.2	滑石	裏表面に鎬，側面横方向の研磨	西部，床面	100%，PL20
Q6	浮子カ	7.2	5.0	5.7	50.5	軽石	平坦面1面	北部，床面	被熱，PL20

第13号住居跡（第32～34図）

位置と確認状況　調査区中央部のC３d0区に位置し，炭化物が検出された焼失家屋である。周囲には第11・16・18号住居跡などが確認されている。

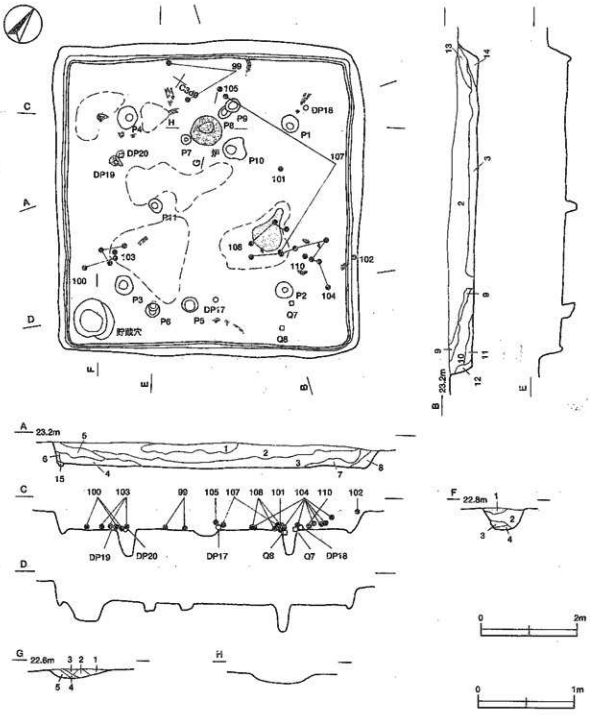
規模と形状　長軸6.60m，短軸6.44mの方形であり，主軸方向はN－33°－Wである。壁高は40～49cmで，やや外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦であり，西コーナー部と中央部が部分的に踏み固められ，壁溝は全周する。P２近くの硬化部は，焼失時の火を受けて赤変している。

炉　中央の北西壁寄りに位置する。径65cmほどの円形を呈し，皿状に10cmほど掘り窪められた地床炉であり，炉床はわずかに赤変している。

炉土層解説

1　暗赤褐色　焼土ブロック中量，炭化粒子微量
2　にぶい赤褐色　焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化粒子微量
3　にぶい赤褐色　焼土ブロック中量，炭化粒子微量
4　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
5　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子微量



第32図　第13号住居跡実測図

貯蔵穴　南コーナーに位置する。径85cmほどの円形で，断面は深さ46cmのU字状を呈している。

貯蔵穴土層解説

1　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子微量
2　極暗褐色　ロームブロック少量，炭化物微量
3　黒　褐　色　ロームブロック・炭化物微量
4　褐　　色　ロームブロック多量

ピット　11か所。主柱穴はP1～P4で，深さは53～60cmである。P5・P6は貯蔵穴の東側に位置し，出入り口施設に伴うものと考えられる。P5は深さ16cm，P6は深さ25cmで斜めに掘り込まれている。P7～P11の性格は不明である。

覆土　全体的に黒褐色や黒色などを呈する腐植土からなり，下層にはロームブロックが多く含まれているが，レンズ状の堆積を示した自然堆積である。

土層解説

1　黒　　色　ロームブロック・焼土粒子少量
2　黒　　色　ロームブロック少量，焼土粒子微量
3　黒　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量
4　暗　褐　色　ロームブロック中量
5　極暗褐色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量
6　褐　　色　ロームブロック中量
7　黒　褐　色　ロームブロック少量
8　極暗褐色　ロームブロック・炭化物少量
9　黒　褐　色　ロームブロック中量
10　極暗褐色　ロームブロック少量，炭化物微量
11　暗　褐　色　ロームブロック中量，炭化物微量
12　暗　褐　色　ロームブロック中量，炭化物微量
13　暗　褐　色　ロームブロック中量
14　褐　　色　ロームブロック中量
15　暗　褐　色　ロームブロック少量，炭化物微量

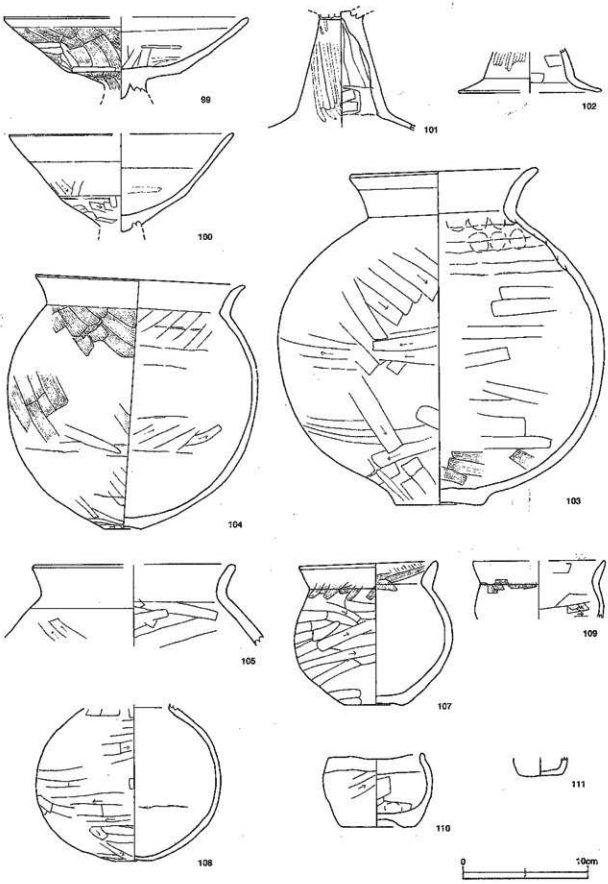
遺物出土状況　土師器片287点（坏1，高坏43，坩9，壺・甕231，手捏・ミニチュア土器3），土製支脚片4点，球状土錘1点，臼玉2点，軽石1点，礫3点，混入した陶器片1点のほか，炭化物も検出されている。土師器片は東部や南部，炉周囲の床面や覆土下層から多く出土し，DP19・20は西部の床面から近接して出土している。また，炭化物は全体に散在した状態で検出されている。

所見　本跡の時期は，出土土器から5世紀前半と考えられる。炭化物や遺物の出土状況からみると，本跡の廃絶後間もない時期に火災にあったものと考えられる。土製支脚は，DP18～20のほかに取り上げ時に破損したものを含めて3個体分が出土している。

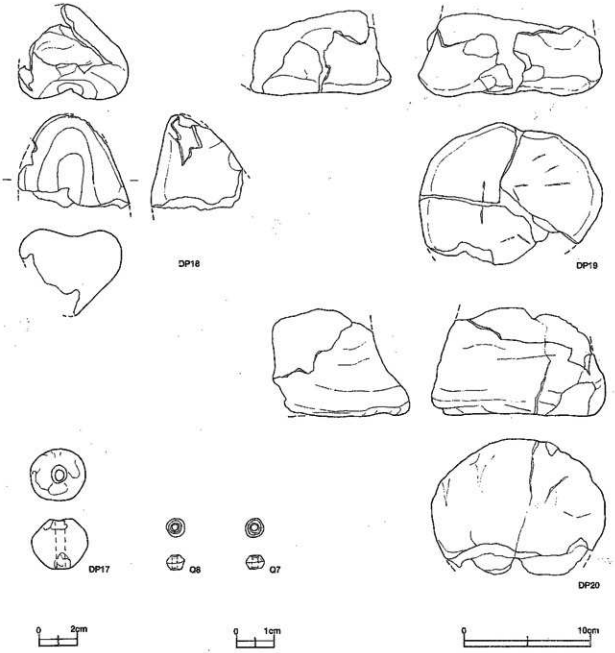
第13号住居跡出土遺物観察表（第33・34図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	成形	手法の特徴	出土位置	備考
99	土師器	高坏	[19.5]	(6.5)	—	石英・小礫	橙	普通	坏部内面ヘラ削り	炉北側，床面	35%
100	土師器	高坏	[17.8]	(7.9)	—	石英	にぶい橙	普通	坏部内・外面ヘラ削り	南部，下層	30%
101	土師器	高坏	…	(9.6)	—	長石	にぶい褐	普通	脚部外面ヘラ磨き	中央部，下層	15%
102	土師器	高坏	—	(3.5)	[11.2]	石英	にぶい橙	普通	脚部外面ヘラ磨き	北東壁沿い，上層	5%
103	土師器	壺	14.6	27.0	6.8	石英・長石	にぶい橙	普通	底面ヘラ削り	南部，床面	80%,黒付着,PL14
104	土師器	甕	16.6	19.5	3.1	石英・小礫	橙	普通	底面ヘラ削り	北東壁沿い，下層	80%,黒付着
105	土師器	甕	[15.8]	(6.5)	—	石英・長石	明赤褐	普通	体部内・外面ヘラ削り	炉北側，下層	5%
107	土師器	小形甕	11.0	11.5	5.5	石英・長石	橙	普通	底面ヘラ削り	北東壁沿い，下層	80%,黒付着,PL15
108	土師器	小形甕	—	(12.6)	2.9	石英・小礫	にぶい黄橙	普通	底面ヘラ削り	中央部，床面	60%
109	土師器	小形甕	[10.1]	(4.7)	—	石英・長石	にぶい黄橙	普通	胴部外面ハケ目整形	東部，覆土中	15%
110	土師器	手捏土器	7.3	5.9	5.6	長石	にぶい橙	普通	底面ヘラ削り	北東壁沿い，下層	95%，PL15
111	土師器	ミニチュア土器	—	(1.5)	3.6	長石	にぶい橙	普通	底面ヘラ削り	東部，覆土中	60%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重さ	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP17	球状土錘	2.9	2.6	0.5	18.1	—	にぶい黄橙	ナデ	出入り口部，床面	100%



第33図　第13号住居跡出土遺物実測図(1)



第34図　第13号住居跡出土遺物実測図(2)

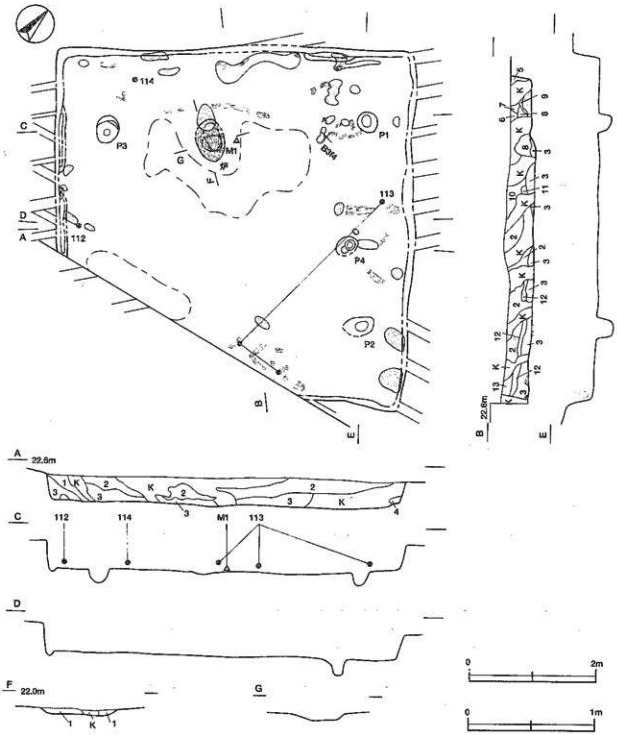
番号	器種	幅	厚さ	高さ	重さ	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP18	土製支脚	(8.2)	(6.9)	(7.3)	(220)	—	黄　橙	体部内・外面ヘラ削り	北コーナー部、床面	30%、頂上部の破片
DP19	土製支脚	14.5	(11.2)	(6.6)	(669)	繊維土、土師器片	黄　橙	底面小枝痕	西部、床面	20%、底部の破片、PL19
DP20	土製支脚	13.8	(10.8)	(8.5)	(853)	繊維土	橙	底面小枝痕	西部、床面	30%、底部の破片、PL19

番号	器種	径	厚さ	孔径	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
Q7	臼玉	0.5	0.3	0.2	0.1	蛇紋岩	側面に穿	東コーナー部、床面	100%、PL20
Q8	臼玉	0.5	0.4	0.2	0.1	滑石	側面に穿	東コーナー部、床面	100%、PL20

第14号住居跡（第35・36図）

位置と確認状況　調査区西部のB３f3区に位置し，南コーナー部が調査区域外へとのび，炭化物が検出された焼失家屋である。また，トレンチャーによる撹乱を受けており，周囲には第17・20・21・24号住居跡，第１号土坑などが確認されている。

規模と形状　長軸5.17m，短軸5.15mの方形であり，主軸方向はN－47°－Wである。壁高は41～43cmで，ほぼ直立する。



第35図　第14号住居跡実測図

床　ほぼ平坦であり，南側の一部分と炉の周りの南半分がとくに踏み固められている。壁溝は南西壁の一部で確認されている。

炉　中央の北西壁寄りに位置する。長径65cm，短径45cmの楕円形を呈し，皿状に7cmほど掘り窪められた地床炉である。炉床は南東輔がやや赤変している。

炉土層解説
1　暗褐色　焼土ブロック中量，炭化物少量

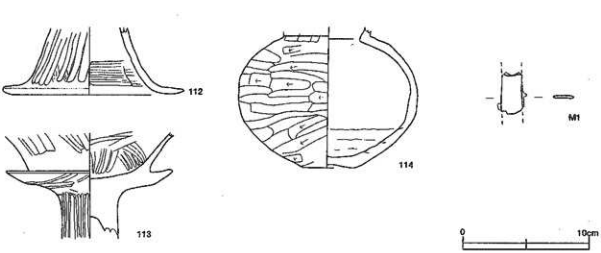
ピット　4か所。主柱穴はP1～P3で，深さは21～26cmである。南コーナー部は調査区域外のため柱穴は確認されていない。P4の性格は不明である。

覆土　上層は黒褐色の腐植土からなり，下層はロームブロックが多く含まれているが，レンズ状の堆積を示す自然堆積である。

土層解説
1　黒褐色　ロームブロック・炭化物少量，焼土ブロック微量
2　黒褐色　ロームブロック・炭化物少量，焼土粒子微量
3　暗褐色　ロームブロック中量，焼土ブロック・炭化物微量
4　褐　色　ロームブロック中量
5　褐　色　ロームブロック中量
6　極暗褐色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
7　黒褐色　焼土ブロック・炭化物少量，ロームブロック微量
8　黒褐色　ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化物微量
9　黒褐色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
10　黒　色　ロームブロック中量，炭化物少量
11　黒褐色　ロームブロック中量，炭化物少量
12　黒褐色　ロームブロック中量，炭化物少量
13　黒褐色　ロームブロック・炭化物少量

遺物出土状況　土師器片220点（坏1，高坏25，器台1，坩6，甕187），不明鉄製品1点，礫4点，混入した須恵器片3点・石核2点・剥片9点が出土しているほか，炭化物も検出されている。土師器片の多くは，トレンチャーによる攪乱のため，攪乱層から出土したものが多い。112は南西壁沿いの覆土下層から，113は東部の覆土下層から，114は西コーナーの覆土下層から出土している。炭化物は，破片状であるが各壁近くの床面から確認され，向きは主軸と直交するものが見られる。

所見　本跡の時期は，出土土器から5世紀前半と考えられる。上屋構築材や遺物の出土状況から，廃絶されて間もないうちに火災にあったものと考えられる。



第36図　第14号住居跡出土遺物実測図

第14号住居跡出土遺物観察表（第36図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
112	土師器	高坏	—	(5.3)	14.3	石英・小石	明赤褐	普通	脚部外面ハケ目整形	南西壁沿い，下層	20%
113	土師器	器台	—	(8.4)	—	石英・長石	橙	普通	筒部上・下面ナデ	東部，下層	50%
114	土師器	坩	—	(11.2)	4.6	石英・長石・小石	にぶい橙	普通	底面ヘラ削り	西コーナー部，下層	80%，PL14

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	色調	特徴	出土位置	備考
M1	不明	(3.3)	1.6	0.25	(2.4)	鉄	板状	刃付近，床面	出入り口部，床面	PL20

第15号住居跡（第37・38図）

位置と確認状況　調査区東部のC4b8区に位置し，周囲には第9～12号住居跡などが確認されている。

規模と形状　長軸4.35m，短軸4.18mの方形であり，主軸方向はN－3°－Wである。壁高は4～28cmで，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦であり，とくに中央部と西部が細長く踏み固められ，壁溝は全周している。

炉　中央の北壁寄りに位置する。長径64cm，短径50cmの楕円形を呈し，皿状に11cmほど掘り窪められた地床炉である。炉床は全体がやや赤変している。

炉土層解説
1　橙暗赤褐色　焼土ブロック・炭化粒子少量，ロームブロック微量
2　にぶい赤褐色　焼土ブロック・ローム粒子中量，炭化物微量
3　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量

貯蔵穴　2か所。貯蔵穴1は南東コーナーに位置しており，長径66cm，短径60cmの楕円形で，断面は深さ32cmのU字状を呈している。貯蔵穴2は南西コーナーに位置しており，長軸84cm，短軸72cmの隅丸長方形で，断面は深さ32cmのU字状を呈している。

貯蔵穴1土層解説
1　暗褐色　ロームブロック・炭化粒子微量
2　暗褐色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
3　暗褐色　ロームブロック中量，炭化粒子微量
4　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
5　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量

貯蔵穴2土層解説
1　橙暗褐色　ローム粒子微量
2　暗褐色　ローム粒子少量，炭化物微量
3　暗褐色　ローム粒子少量，炭化粒子微量

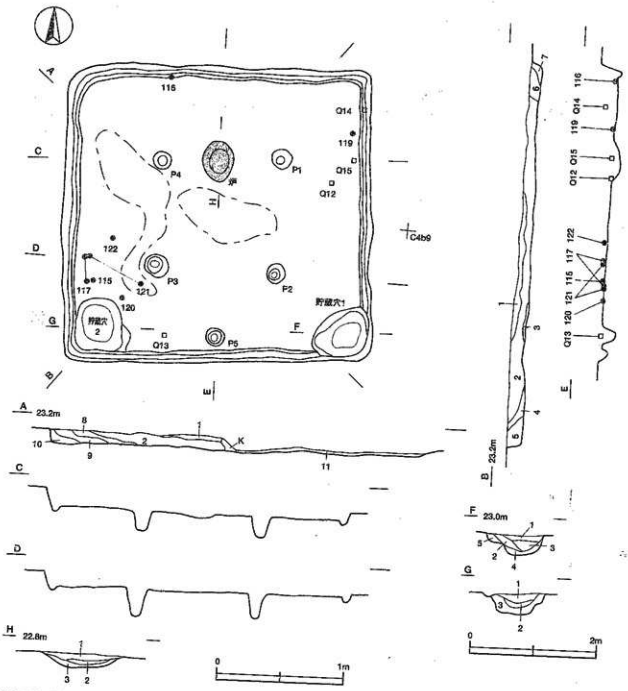
ピット　5か所。主柱穴はP1～P4で，深さは32～44cmである。南壁の中央部付近に位置するP5は深さ20cmで，出入り口施設に伴うものと考えられる。

覆土　全体的に暗褐色や極暗褐色などを呈するロームブロックを含む腐植土からなり，覆土中に含まれる遺物の量は少なく，レンズ状の堆積を示した自然堆積である。

土層解説
1　黒　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
2　橙暗褐色　ロームブロック中量
3　褐　色　ロームブロック中量
4　黒褐色　ロームブロック少量
5　暗褐色　ロームブロック少量
6　暗褐色　ロームブロック中量，焼土粒子微量
7　暗褐色　ロームブロック少量
8　橙暗褐色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
9　暗褐色　ロームブロック少量
10　褐　色　ロームブロック少量
11　褐　色　ロームブロック中量

遺物出土状況　土師器片452点（高坏73，器台2，坩87，壺・甕289，甑1），砥石片5点，剣形模造品2点，磨石1点が出土している。遺物は貯蔵穴2の周辺と北東部の覆土下層や床面から多く出土している。

所見　本跡の時期は，出土土器から5世紀前半と考えられる。118・119の器台は第12号住居跡から出土したものと同じ状況で，支脚として再利用されている。

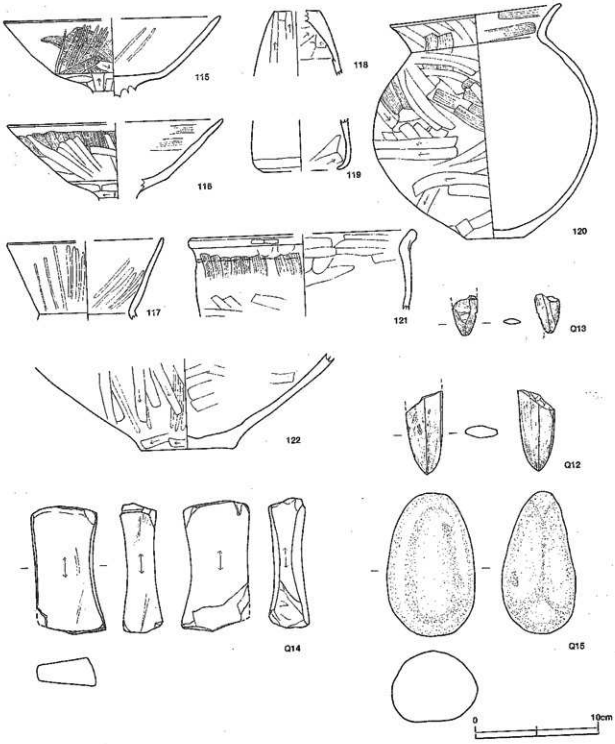


第37図　第15号住居跡実測図

第15号住居跡出土遺物観察表（第38図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
115	土師器	高坏	[17.6]	(6.4)	—	石英・長石	にぶい褐	普通	坏部外面ハケ目整形	南西コーナー部,床面	20%
116	土師器	高坏	[17.4]	(6.3)	—	石英・長石	赤	普通	坏部外面ハケ目整形	北壁際,床面	20%
117	土師器	坩	[12.6]	(6.5)	—	石英	にぶい橙	普通	口縁部内・外面ヘラ磨き	西壁際,床面	30%
118	土師器	台	[3.5]	(5.4)	—	石英	にぶい黄橙	普通	器受部,体部外面ヘラ削り	北東部,覆土中	20%,二次被成
119	土師器	鉢	—	(6.2)	[6.0]	石英	にぶい黄橙	普通	体部内・外面ヘラ削り	東壁際,床面	20%,二次被成
120	土師器	甕	13.9	19.0	4.5	石英・長石	にぶい橙	普通	底面ヘラ削り	南東コーナー部,床面	80%,PL.16
121	土師器	甕カ	[17.8]	(6.5)	—	石英・長石	にぶい橙	普通	口縁部ヘラ削り	南東コーナー部,床面	5%
122	土師器	壺	—	(7.5)	7.4	石英	にぶい橙	普通	底面ナデ	西壁沿い,床面	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
Q12	剥片剥離品	(7.7)	3.0	0.9	(25.0)	滑石	底表面に縁、側面斜め方向の研磨	東壁沿い	40%, PL20
Q13	剥片剥離品	(3.3)	1.9	0.4	(3.3)	滑石	裏表面に縁	南壁沿い	30%, PL20
Q14	砥石	(10.7)	15.4	2.2	(206)	凝灰岩	四面に研	北東コーナー部、覆土中層	80%, PL20
Q15	磨石	11.7	7.0	6.0	706	砂岩	上・下端に使用痕、側面に敲打痕の凹み	東壁際、覆土下層	100%



第38図　第15号住居跡出土遺物実測図

第16号住居跡（第39・40図）

位置と確認状況　調査区中央部のC３g9区に位置し，焼土ブロックが検出された焼失家屋である。周囲には第13・18・19号住居跡などが確認されている。

規模と形状　長軸4.23m，短軸4.16mの方形であり，主軸方向はN－42°－Wである。壁高は12～25cmで，やや外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦であり，壁際とピットの周りを除いて，広く踏み固められている。壁溝は南コーナー部を除いた壁下に認められる。

炉　中央の北西壁寄りに位置する。長径62cm，短径48cmの楕円形を呈し，皿状に６cmほど掘り窪められた地床炉である。炉床は全体が赤変している。

炉土層解説

1　黒　　色　ロームブロック少量
2　褐　　色　ロームブロック中量
3　にぶい赤褐色　焼土ブロック中量，ローム粒子少量
4　赤　褐　色　焼土ブロック多量，ローム粒子少量
5　暗 赤 褐 色　ローム粒子・焼土粒子少量

貯蔵穴　南コーナーに位置する。長径48cm，短径42cmの楕円形を呈し，深さ55cmで断面形はU字状である。覆土は上層が褐色のロームブロックからなり，下層は焼土が多量に含まれている。

貯蔵穴土層解説

1　褐　色　ロームブロック中量
2　褐　色　ロームブロック中量
3　暗褐色　ロームブロック中量，焼土粒子少量，炭化物微量
4　暗褐色　ロームブロック中量，焼土粒子少量
5　暗褐色　ロームブロック中量，焼土ブロック少量
6　褐　色　ロームブロック・焼土粒子少量，炭化物微量
7　褐　色　ロームブロック多量
8　赤褐色　焼土ブロック多量，ロームブロック少量，炭化物微量
9　暗褐色　焼土ブロック中量，ロームブロック少量

ピット　８か所。主柱穴はＰ１～Ｐ４で，深さは24～68cmである。Ｐ５～Ｐ７の性格は不明である。またＰ８は，炉を掘り抜いているため本跡よりも新しいものである。

Ｐ５土層解説

1　暗褐色　ロームブロック・焼土粒子少量，炭化物微量
2　暗褐色　ロームブロック中量，焼土粒子少量，炭化物微量
3　褐　色　ロームブロック多量，焼土粒子微量

覆土　主として暗褐色や褐色を呈するロームブロックからなる。床の直上に一部焼土が多く含まれる土層がみられるが，レンズ状の堆積を示した自然堆積である。

土層解説

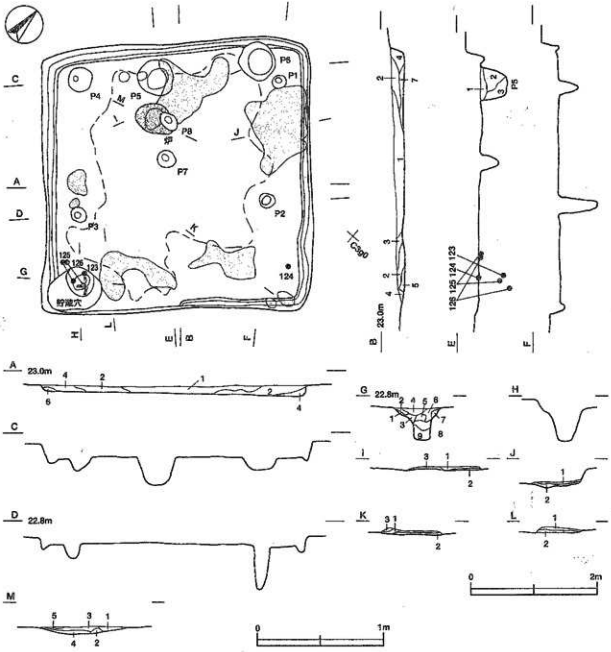
1　暗　褐　色　ロームブロック少量，炭化物微量
2　暗　褐　色　ロームブロック中量，炭化物微量
3　褐　　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量
4　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化物微量
5　にぶい赤褐色　ロームブロック中量，焼土ブロック少量，炭化物微量
6　褐　　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量
7　にぶい赤褐色　焼土ブロック中量，ロームブロック少量，炭化物微量

遺物出土状況　土師器片225点（高坏36，坩34，甕154，甑１），礫１点のほか，炭化物や焼土ブロックも検出されている。土師器片は床面や覆土下層から出土しており，南東部や北コーナー部，貯蔵穴付近などでは散在した状態で出土している。焼土ブロックは各壁際を中心に検出され，貯蔵穴からは123・125・126のほか炭化物も検出されている。

焼土ブロック土層解説

1　赤 褐 色　焼土ブロック多量，ローム粒子少量
2　褐　　色　ローム粒子中量
3　暗赤褐色　ロームブロック・焼土ブロック少量

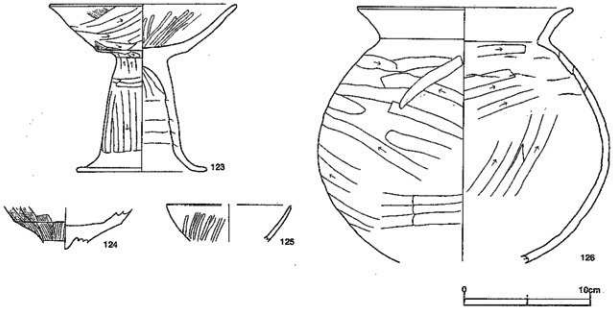
所見　本跡の時期は，出土土器より５世紀前半と考えられる。炭化物や遺物の出土状況から，廃棄後に焼失したものと考えられる。



第39図　第16号住居跡実測図

第16号住居跡出土遺物観察表（第40図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	破成	手法の特徴	出土位置	備考
123	土師器	高坏	14.5	13.3	10.0	石英	橙	普通	坏部内面ヘラ磨き	貯蔵穴	95%, PL14
124	土師器	高坏	—	(3.0)	—	石英	にぶい橙	普通	坏部外面ハケ目整形	東コーナー部，下層	20%
125	土師器	壺	[9.8]	(3.0)	—	石英・長石	にぶい黄橙	普通	口縁部外面ヘラ磨き	貯蔵穴	10%
126	土師器	甕	16.8	(20.3)	—	石英・長石・小石	橙	普通	体部内・外面ヘラ削り	南コーナー部，床面	40%,底付近PL16



第40図　第16号住居跡出土遺物実測図

第17号住居跡（第41～45図）

位置と確認状況　調査区中央部のB３i9区に位置し，炭化物や焼土ブロックが検出された焼失家屋である。周囲には第11・20号住居跡，第27・30号土坑などが確認されている。

規模と形状　長軸6.30m，短軸6.20mの方形であり，主軸方向はN－18°－Wである。壁高は23～30cmで，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦であり，中央から出入り口部と貯蔵穴付近，さらに，北東コーナー部の一部がよく踏み固められている。壁溝は確認されていない。

炉　中央のやや北壁寄りに位置する。径70～76cmの円形を呈し，皿状に９cmほど掘り窪められた地床炉である。炉床は全体が赤変し，中央部が硬化している。

炉土層解説

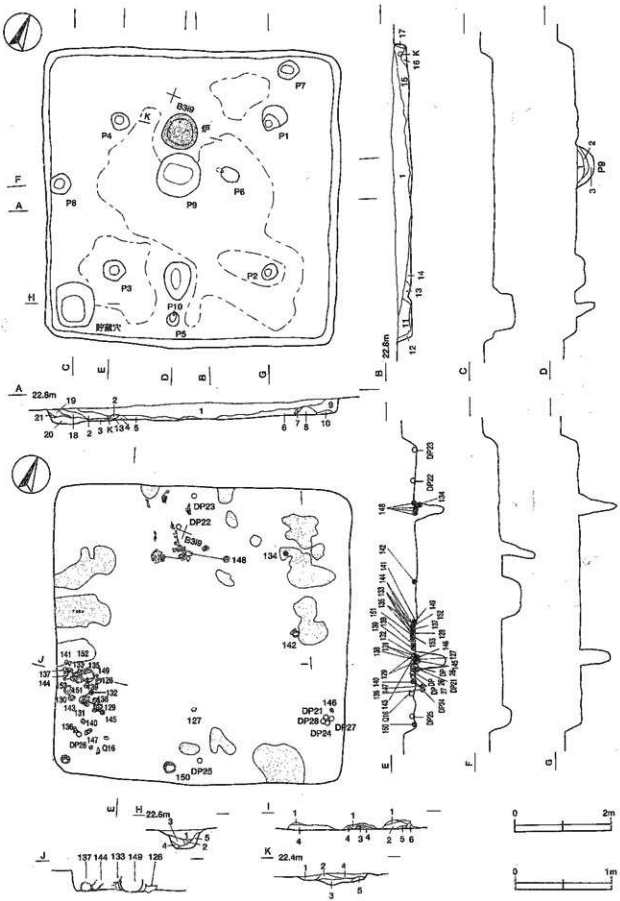
1　暗赤褐色　ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化物微量
2　極暗赤褐色　焼土ブロック少量，ロームブロック・炭化物微量
3　にぶい赤褐色　焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化物微量
4　極暗赤褐色　焼土ブロック少量，ロームブロック・炭化物微量
5　暗赤褐色　ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化粒子微量

貯蔵穴　南西コーナーに位置する。長軸94cm，短軸80cmの隅丸長方形を呈し，断面は深さ44cmのU字状を呈している。

貯蔵穴土層解説

1　黒褐色　ローム粒子・炭化物微量
2　暗褐色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
3　褐　色　ロームブロック中量
4　暗褐色　ローム粒子少量
5　暗褐色　ロームブロック中量

ピット　10か所。主柱穴はP１～P４で，深さは59～79cmである。P５・P10は南壁中央近くに位置し，出入り口施設に伴うものと考えられる。P５は深さ43cmで斜めに掘り込まれており，P10は深さ21cmである。P９は本跡中央部に位置し，径90cm，深さ39cmの円形の大きなピットであるが，後世のものであり性格は不明である。また，P６～P８の性格も不明である。



第41図　第17号住居跡実測図

P 9 土層解説

1　黒　色　ローム粒子・焼土粒子微量
2　暗褐色　ロームブロック中量，焼土粒子微量
3　褐　色　ロームブロック多量

覆土　全体的に暗褐色や黒褐色などを呈する腐植土からなり，下層にはロームブロックが多く含まれている。レンズ状の堆積を示した自然堆積と考えられる。

土層解説

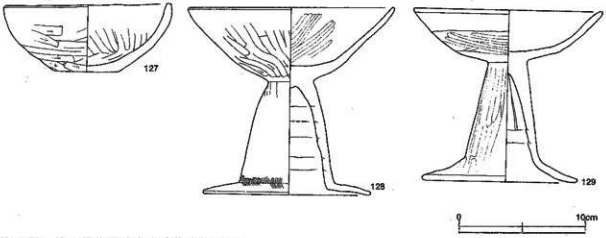
1　黒　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
2　黒 褐 色　ロームブロック中量，炭化物少量，焼土ブロック微量
3　極暗褐色　ロームブロック中量，炭化物少量
4　暗赤褐色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
5　黒 褐 色　ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化物微量
6　黒 褐 色　ロームブロック・炭化物少量，焼土ブロック微量
7　極赤褐色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
8　暗赤褐色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
9　黒 褐 色　ロームブロック・炭化物少量，焼土ブロック微量
10　暗 褐 色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
11　黒 褐 色　ロームブロック・炭化物少量，焼土ブロック微量
12　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量
13　暗赤褐色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
14　暗 褐 色　ロームブロック少量，炭化物微量
15　黒 褐 色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
16　暗赤褐色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
17　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量
18　赤 褐 色　焼土ブロック多量，ロームブロック少量，炭化物微量
19　暗 褐 色　ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化物微量
20　褐　色　ロームブロック中量
21　褐　色　ロームブロック中量

遺物出土状況　土師器片824点（坏・椀5，高坏241，坩111，甕463，甑3，ミニチュア土器1），球状土錘8点，磨石1点，礫7点のほか，炭化材も確認され，各壁の近くを中心に焼土ブロックが広がっている。土師器片は貯蔵穴付近にとくに集中し，炉の周囲，出入り口部付近，北東コーナー部などからも出土し，ほとんどが床面からの出土である。貯蔵穴付近からは，高坏8，坩9，甕3，ミニチュア土器1が出土している。また球状土錘4点は南東部の床からまとまって出土している。

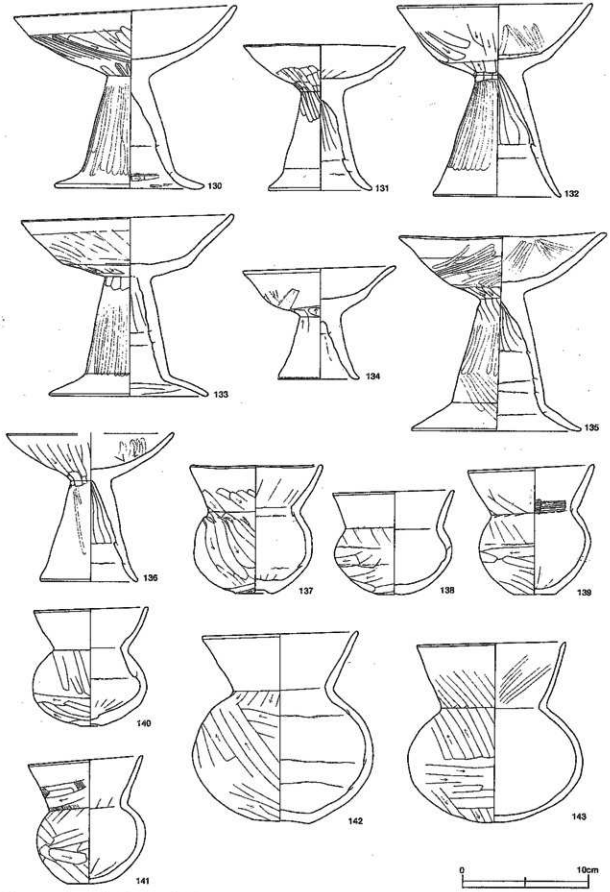
焼土ブロック土層解説

1　褐　色　ロームブロック・焼土粒子少量，炭化物微量
2　暗 褐 色　ロームブロック中量，焼土粒子少量，炭化物微量
3　暗赤褐色　焼土粒子中量，ロームブロック少量
4　褐　色　焼土粒子少量，ローム粒子少量
5　暗赤褐色　焼土粒子中量，ローム粒子少量
6　極暗褐色　炭化物多量，ローム粒子少量

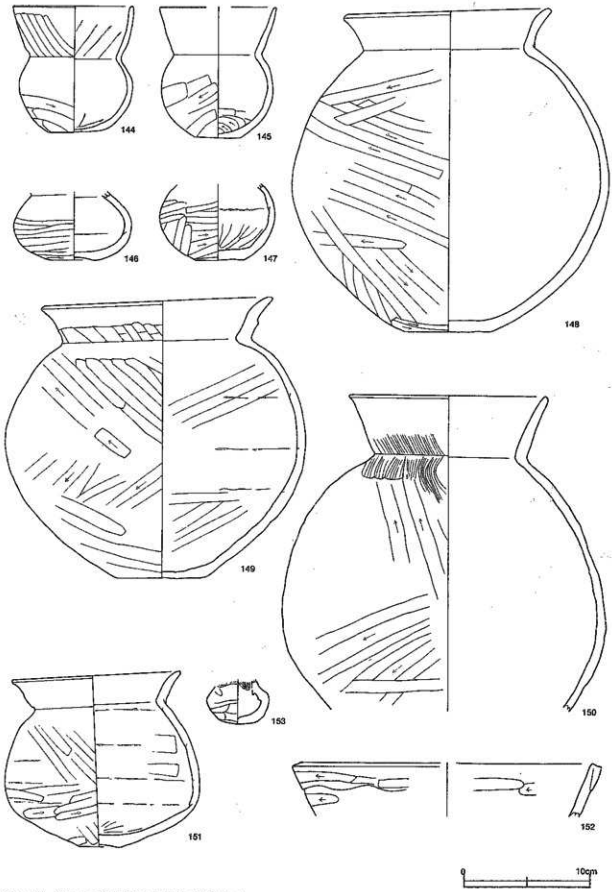
所見　本跡の時期は，出土土器から5世紀前半と考えられる。本跡は居住中に焼失したもので，そのときの状態のままで放置されて埋没したものと考えられる。



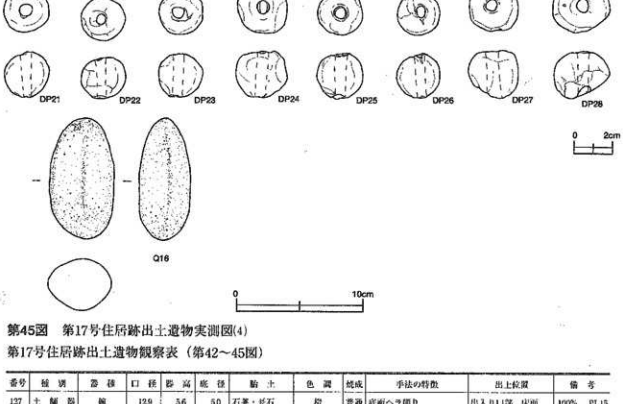
第42図　第17号住居跡出土遺物実測図(1)



第43図　第17号住居跡出土遺物実測図(2)



第44図　第17号住居跡出土遺物実測図(3)



第45図　第17号住居跡出土遺物実測図(4)

第17号住居跡出土遺物観察表（第42～45図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
127	土師器	椀	12.9	5.6	5.0	石英・長石	橙	普通	底面ヘラ削り	出入り口部、床面	100%、	PL.15
128	土師器	高　坏	16.0	14.9	13.0	石英	明赤褐	普通	坏部内面ヘラ磨き	南西コーナー部、床面	90%、	PL.14
129	土師器	高　坏	14.7	13.7	11.9	石英	にぶい赤褐	普通	坏部・脚部外面ヘラ磨き	南西コーナー部、床面	98%、	PL.14
130	土師器	高　坏	17.4	14.6	11.8	石英	にぶい橙	普通	坏部・脚部外面ヘラ磨き	南西コーナー部、床面	90%、	PL.15
131	土師器	高　坏	12.7	11.7	8.1	石英	黄　橙	普通	坏部・脚部外面ヘラ磨き	南西コーナー部、床面	90%、	PL.15
132	土師器	高　坏	15.3	15.4	10.0	石英	橙	普通	坏部内面ヘラ磨き	南西コーナー部、床面	85%、	PL.15
133	土師器	高　坏	16.8	14.5	12.6	石英	橙	普通	坏部外面ヘラナデ	南西コーナー部、床面	90%、	PL.16
134	土師器	高　坏	12.1	9.0	6.4	石英	橙	普通	坏部外面ヘラ削り	ピット（P1）	95%、	PL.16
135	土師器	高　坏	16.1	15.7	13.2	石英	明赤褐	普通	坏部内・外面ヘラ磨き	南西コーナー部、床面	85%、	PL.16
136	土師器	高　坏	[13.2]	11.8	7.5	石英	橙	普通	坏部内面ヘラ磨き	貯蔵穴	75%	
137	土師器	壺	10.2	10.2	3.1	石英	赤褐	普通	底面ヘラ削り	南西コーナー部、床面	100%、	PL.14
138	土師器	壺	9.6	9.3	1.9	石英	明赤褐	普通	底面ヘラ削り	南西コーナー部、床面	100%	
139	土師器	壺	9.9	10.4	3.5	石英・小礫	にぶい橙	普通	底面ヘラ削り	南西コーナー部、床面	100%、	PL.14
140	土師器	壺	9.0	9.4	1.8	石英	にぶい褐	普通	底面ヘラ削り	貯蔵穴	100%、	PL.15
141	土師器	壺	9.0	10.2	3.5	石英	明赤褐	普通	底面ヘラ削り	南西コーナー部、床面	98%、	PL.15
142	土師器	壺	12.2	15.5	4.2	石英・小礫	にぶい褐	普通	底面ヘラ削り	東部、床面	98%、	PL.15
143	土師器	壺	11.6	14.3	—	石英・小礫	にぶい褐	普通	口縁部内・外面ヘラ磨き	南西コーナー部、床面	90%、	PL.15
144	土師器	壺	9.4	10.1	4.4	石英	にぶい橙	普通	底面ヘラ削り	南西コーナー部、床面	75%、	PL.15
145	土師器	壺	[9.1]	10.4	3.7	石英・小礫	にぶい橙	普通	底面ヘラ削り	南西コーナー部、床面	60%、	PL.15
146	土師器	壺	—	(3.4)	3.3	石英	にぶい黄橙	普通	体部外面・底面ナデ	南東コーナー部、床面	70%	
147	土師器	壺	—	(6.0)	3.8	石英	にぶい橙	普通	底面ヘラナデ	貯蔵穴	50%、焼に転ず	
148	土師器	甕	15.8	25.7	7.6	石英	橙	普通	底面ヘラ削り	炉	90%、	PL.16
149	土師器	甕	17.7	22.4	6.8	石英	にぶい褐	普通	底面ヘラ削り	南西コーナー部、床面	70%、焼台有、	PL.16
150	土師器	甕	15.6	(25.0)	—	石英・小礫	橙	普通	体部外面ヘラ削り	出入り口部、床面	60%、	PL.16
151	土師器	甕	13.2	14.1	3.4	石英	橙	普通	底面ヘラ削り	南西コーナー部、床面	100%、	PL.15
152	土師器	甑	[21.6]	(4.4)	—	石英	橙	普通	口縁部外面ヘラ削り	南西コーナー部、床面	5%	
153	土師器	ミニチュア土器	—	(3.6)	1.8	石英	にぶい褐	普通	体部外面ヘラナデ	南西コーナー部、床面	80%	

番号	器種	径	厚さ	孔径	重さ	新土	色調	特徴	出土位置	備考
DP21	球状土錘	2.4	2.4	0.6	10.9	—	灰黄褐	ナデ	南東コーナー部,床面	100%, PL19
DP22	球状土錘	2.3	2.2	0.6	9.3	—	明灰	ナデ	炉	100%, PL19
DP23	球状土錘	2.3	2.3	0.5	10.3	—	にぶい黄褐	ナデ, 穿孔部付近に剥痕	北壁際, 床面	100%, PL19
DP24	球状土錘	2.6	2.4	0.7	12.8	—	にぶい黄橙	ナデ, 体部に剥痕	南東コーナー部,床面	100%, PL19
DP25	球状土錘	2.4	2.4	0.7	9.7	—	灰黄褐	ナデ, 体部に剥痕	出入り口部, 床面	100%, PL19
DP26	球状土錘	2.2	2.4	0.6	8.6	—	褐灰	ナデ, 体部に剥痕	貯蔵穴	100%, PL19
DP27	球状土錘	2.6	2.5	0.6	12.3	—	にぶい黄橙	ナデ, 穿孔部付近磨滅	南東コーナー部,床面	70%, PL19
DP28	球状土錘	3.1	2.0	0.7	12.5	—	にぶい黄橙	ナデ, 穿孔部付近磨滅	南東コーナー部,床面	70%, PL19

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
Q16	砥石	9.7	5.0	4.0	277.0	安山岩	上端・下端部に打撃痕	南西コーナー部,床面	100%

第18号住居跡（第46・47図）

位置と確認状況　調査区中央部のC3 e7区に位置し，炭化材や焼土ブロックが検出された焼失家屋である。周囲には第13・16・19号住居跡などが確認されている。

規模と形状　長軸4.40m，短軸4.17mの方形であり，主軸方向はN－31°－Wである。壁高は30～50cmで，ほぼ直立して立ち上がる。

床　ほぼ平坦であり，中央から貯蔵穴付近にかけてよく踏み固められている。壁溝は確認されていない。

炉　中央の北西壁寄りに位置する。長径66cm，短径56cmの楕円形を呈し，皿状に8cmほど掘り窪められた地床炉である。炉床は中央部が赤変している。

炉土層解説
1　暗赤褐色　焼土ブロック多量，ローム粒子微量
2　極暗赤褐色　焼土ブロック中量，ロームブロック微量

貯蔵穴　南コーナーに位置する。長径83cm，短径62cmの楕円形を呈し，断面は深さ30cmの椀状である。貯蔵穴の覆土中層には焼土が含まれている。

貯蔵穴土層解説
1　極暗褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
2　暗赤褐色　焼土ブロック中量，ロームブロック少量
3　褐　色　ローム粒子中量

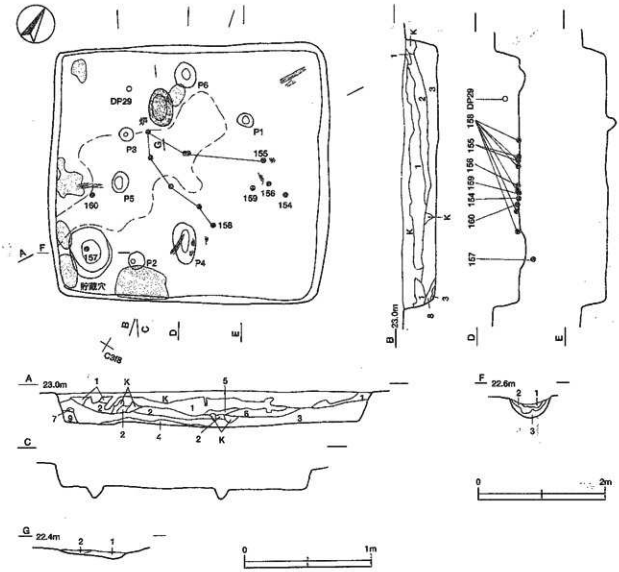
ピット　6か所。主柱穴はP1～P3で，深さは17～38cmであり，東コーナー部には確認されなかった。南東壁の中央近くに位置するP4は深さ16cmで，出入り口施設に伴うものと考えられる。P5・P6の性格は不明である。

覆土　確認面から深さ26cmまでは撹乱を受けている。覆土は黒褐色や黒色などを呈する腐植土からなる。一部，ブロック状の堆積を示して，ロームブロックが多く含まれることから人為堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　色　ロームブロック少量，焼土粒子微量
2　黒　褐　色　ロームブロック少量
3　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化物微量
4　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子少量，炭化粒子微量
5　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
6　極暗褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
7　暗赤褐色　焼土粒子中量，ローム粒子微量
8　極暗赤褐色　焼土粒子少量，ロームブロック微量
9　暗赤褐色　ローム粒子・焼土粒子少量，炭化物微量

遺物出土状況　土師器片158点（椀5，高坏44，坩8，甕100，甑1），球状土錘1点，踝2点，混入した縄文土器片13点が出土しているほか，炭化材も検出されている。また南コーナー部を中心に薄い焼土層の広がりも確認されている。土師器片の多くは，中央部の覆土下層または床面から散在した状態で出土し，貯蔵穴からは157が出土している。炭化材はほぼ床面から検出されており，主軸方向に斜交するものが多い。

所見　本跡の時期は，出土土器より５世紀前半と考えられる。炭化材や遺物の出土状況から，本跡の廃絶後に火災にあったものと考えられる。

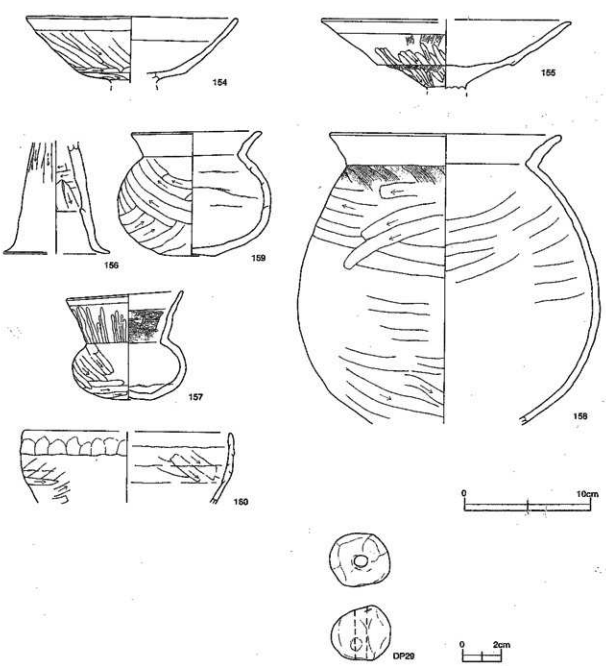


第46図　第18号住居跡実測図

第18号住居跡出土遺物観察表（第47図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
154	土師器	高坏	16.5	(5.2)	－	石英	黄橙	普通	坏部外面ヘラ削り	北東部，床面	30%
155	土師器	高坏	[19.5]	(5.5)	－	石英・小礫	にぶい褐	普通	坏部外面ハケ目整形	北東部，床面	20%
156	土師器	高坏	－	(8.9)	[8.4]	石英	橙	普通	脚部外面ヘラナデ	北東部，床面	15%
157	土師器	壺	9.3	8.6	2.6	石英・長石	橙	普通	底面ヘラ削り	貯蔵穴	100%，PL15
158	土師器	甕	18.0	(23.5)	－	石英・小礫	橙	普通	体部内面ヘラナデ	中央部，床面	50%，底付近，PL15
159	土師器	小形壺	10.0	9.9	3.4	石英	にぶい黄橙	普通	底面ヘラ削り	北東部，床面	98%，PL15
160	土師器	甑	[16.4]	(5.7)	－	石英	にぶい橙	普通	体部内・外面ヘラ削り	南西壁沿い，床面	20%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重さ	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
DP29	建状土錘	3.2	3.3	0.6	21.5	石英	灰黄褐	普通	ナデ	西コーナー部，中層	100%



第47図　第18号住居跡出土遺物実測図

第19号住居跡（第48～50図）

位置と確認状況　調査区中央部のC３f6区に位置し，周囲には第16・18・22号住居跡などが確認されている。

規模と形状　長軸4.32m，短軸4.30mの方形であり，主軸方向はN－14°－Eである。壁高は33～40cmで，ほぼ直立して立ち上がる。

床　ほぼ平坦で，全体的に軟弱であり，踏み固められた部分はほとんど認められない。壁溝は全周するが，柱穴は確認されていない。

貯蔵穴　南東コーナーに位置する。長径42cm，短径30cmの楕円形を呈し，断面は深さ24cmの円筒状で上部は外傾している。底面に深さ16cmのピット状の掘り込みがみられる。

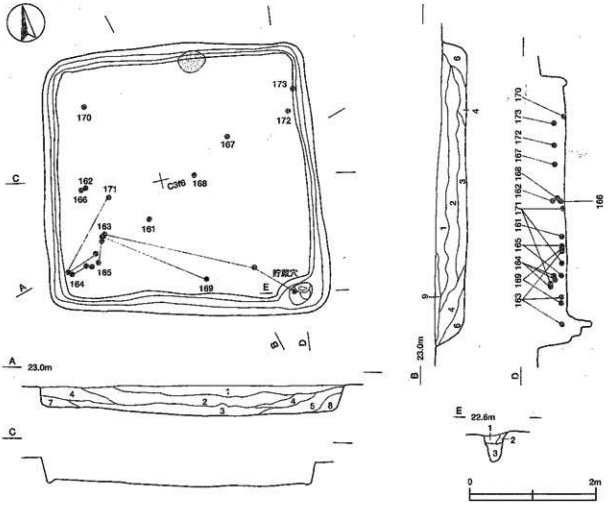
貯蔵穴土層解説
1　暗褐色　ロームブロック中量
2　褐　色　ロームブロック多量
3　褐　色　ロームブロック中量

覆土　上層は極暗褐色の腐植土，中層は黒褐色の腐植土，下層は暗褐色のロームブロックからなる。中層には多くの遺物が含まれ，投棄された様相を呈しており，人為堆積と考えられる。

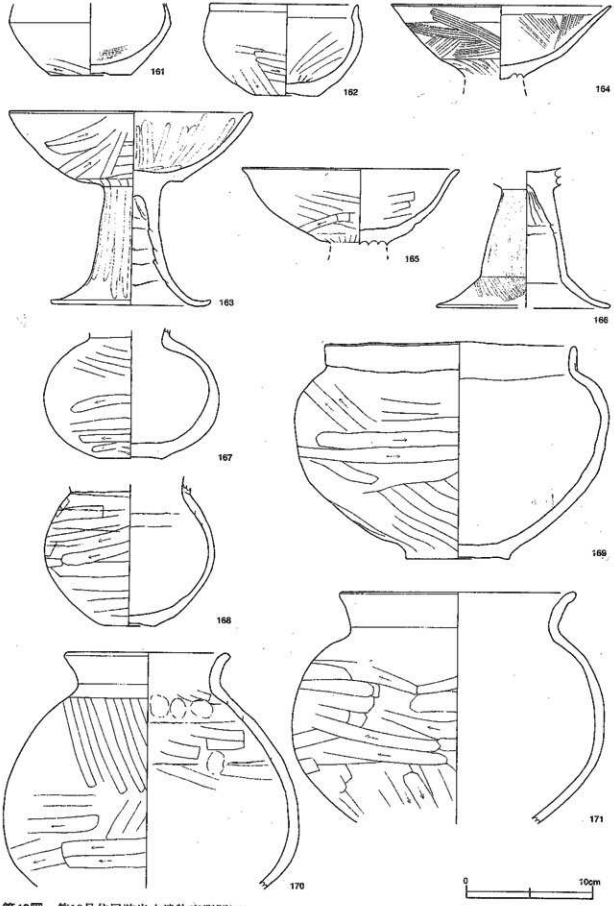
土層解説
1　極暗褐色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　黒 褐 色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化物微量
3　暗 褐 色　ロームブロック中量，炭化物微量
4　黒 褐 色　ローム粒子少量，焼土ブロック・炭化物微量
5　暗 褐 色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
6　褐　色　ローム粒子・焼土ブロック少量，炭化物微量
7　暗 褐 色　ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化物微量
8　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量
9　暗 褐 色　ロームブロック少量

遺物出土状況　土師器片346点（坏10，椀7，高坏73，坩44，甕208，甑4），礫7点が出土しており，北部には焼土ブロックも検出されている。土師器片は，覆土中層を中心に，本跡全体に散在した状態で出土しており，とくに南西コーナー部（163～165）と北東コーナー部（172・173）などに多い。

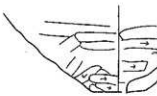
所見　本跡は床面に踏み固められた様子は認められず，炉と柱穴も確認されていないため，使用期間が短かったか，または住居以外の建物跡と想定される。一方，遺物の出土状況は，埋没過程で投棄された様相を呈している。外面に煤が付着した煮炊き用の甕（169）も出土しており，別の住居で使用されたものが投棄されたと考えられる。本跡の時期は，出土土器から5世紀後半と考えられる。



第48図　第19号住居跡実測図



第49図　第19号住居跡出土遺物実測図(1)



0　10cm

第50図　第19号住居跡出土遺物実測図(2)

第19号住居跡出土遺物観察表（第49・50図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
161	土師器	椀	—	(5.7)	6.4	石英・小礫	にぶい黄橙	普通	底面ヘラ削り	中央部，下層	50%,表面風化
162	土師器	椀	11.6	7.3	5.0	石英・小礫	にぶい橙	普通	底面ヘラ削り	西壁沿い，中層	70%,表面風化,PL15
163	土師器	高　坏	19.2	15.4	11.8	石英・小礫	にぶい褐	普通	脚部外面ヘラ磨き	南西コーナー部，下層	70%,　PL16
164	土師器	高　坏	17.1	(5.9)	—	石英・小礫	にぶい橙	普通	坏部内・外面ヘラ磨き	南西コーナー部，中層	40%
165	土師器	高　坏	17.0	(6.0)	—	石英	にぶい橙	普通	坏部内面ヘラナデ	南西コーナー部，下層	40%
166	土師器	高　坏	—	(11.1)	[13.6]	石英・小礫	橙	普通	脚部外面ヘラ磨き	西壁沿い，中層	30%
167	土師器	坩	—	(10.4)	5.0	石英	にぶい赤褐	普通	底面ヘラ削り	中央部，中層	80%
168	土師器	坩	—	(11.9)	4.0	石英・小礫	にぶい橙	普通	底面ヘラ削り	中央部，中層	60%,　PL15
169	土師器	壺	19.4	17.3	8.1	石英	明赤褐	普通	底面ヘラ削り	南壁際，下層	80%,重付着,PL16
170	土師器	甕　か	12.5	(18.7)	—	石英・小礫	にぶい赤褐	普通	体部内・外面ヘラ削り	北西コーナー部，下層	70%,　PL16
171	土師器	甕	18.2	(18.4)	—	石英・小礫	にぶい褐	普通	体部外面ヘラ削り	南西コーナー部，中層	50%,重付着,PL16
172	土師器	甑	—	(6.9)	4.1	石英	明赤褐	普通	底面ヘラ削り	北東コーナー部，中層	30%
173	土師器	甑	—	(2.8)	3.8	石英	橙	普通	底面ヘラ削り	北東コーナー部，中層	15%

第20号住居跡（第51・52図）

位置と確認状況　調査区中央部のB３i6区に位置し，周囲には第14・17・21号住居跡などが確認されている。

規模と形状　長軸5.00m，短軸4.37mの長方形であり，主軸方向はN－27°－Wである。壁高は９～14cmで，ほぼ直立して立ち上がる。

床　ほぼ平坦であり，中央部や出入り口施設部付近，および貯蔵穴の周囲がよく踏み固められ，壁溝が全周している。

炉　２か所。炉１は中央の北西壁寄りに位置する。長径112cm，短径44cmの楕円形を呈し，あまり掘り窪められていない地床炉である。炉床は全体が赤変し，北西部と南東部が硬化している。炉２は北東壁寄りに位置する。長径35cm，短径28cmの楕円形を呈し，炉１と同様の地床炉である。炉床は全体が赤変硬化している。

炉１土層解説
1　暗赤褐色　焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化物微量
2　暗赤褐色　焼土ブロック多量，ロームブロック・炭化物微量
3　黒　褐　色　焼土ブロック少量，ロームブロック・炭化物微量
4　暗褐赤褐色　焼土ブロック中量，炭化物少量，ロームブロック微量

炉２土層解説
1　にぶい赤褐色　焼土粒子多量，ローム粒子・炭化物・灰微量
2　にぶい赤褐色　ロームブロック・焼土粒子少量，炭化粒子微量

貯蔵穴　南コーナーに位置する。平面形は長径78cm，短径60cmの楕円形で，断面形は深さ54cmのU字状を呈している。

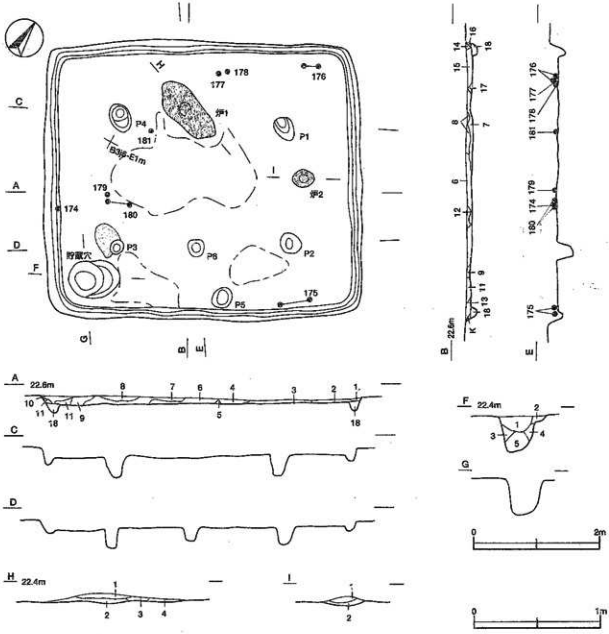
貯蔵穴土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック少量，炭化物微量
2　暗　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量
3　極暗褐色　ロームブロック中量，炭化粒子微量
4　暗　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量
5　黒　褐　色　ロームブロック少量，炭化物微量

ピット　6か所。主柱穴はP１～P４で，深さは27～33cmである。南東壁の中央付近に位置するP５は深さ17cmで，出入り口施設に伴うものと考えられる。P６の性格は不明である。

覆土　主に褐色や暗褐色などを呈するロームブロックからなり，ブロック状の堆積を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

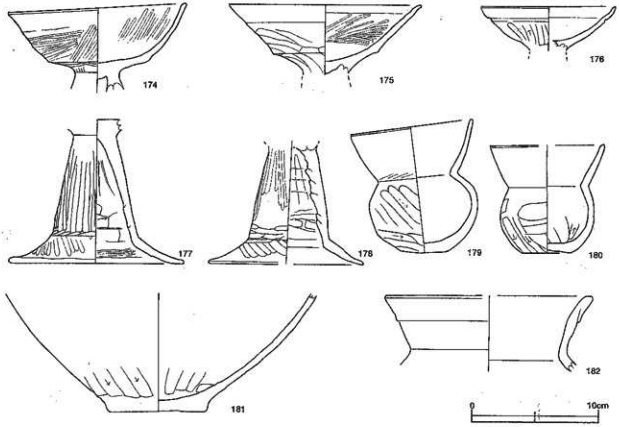
1　暗褐色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
2　暗褐色　ロームブロック中量，炭化粒子少量，焼土粒子微量
3　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量
4　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子少量
5　褐　色　ロームブロック中量
6　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量
7　黒褐色　ロームブロック少量
8　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量
9　暗褐色　ロームブロック・炭化粒子少量
10　暗褐色　ロームブロック・炭化粒子少量
11　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
12　暗褐色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
13　暗褐色　ロームブロック少量，炭化物微量
14　暗褐色　ロームブロック少量
15　暗褐色　ロームブロック少量
16　暗褐色　ローム粒子少量
17　褐　色　ロームブロック中量
18　極暗褐色　ロームブロック中量，炭化粒子微量



第51図　第20号住居跡実測図

遺物出土状況　土師器片554点（高坏195，坩23，壺・甕336），鞴2点，混入した剥片2点が出土している。土師器片は本跡全体に散在した状態で出土しており，覆土が浅いため下層や床面からの出土である。

所見　本跡の時期は，出土土器から5世紀前半と考えられ，廃絶後に埋め戻された可能性がある。



第52図　第20号住居跡出土遺物実測図

第20号住居跡出土遺物観察表（第52図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
174	土師器	高坏	14.0	(7.0)	—	石英・小礫	にぶい橙	密	坏部内・外面ヘラ磨き	南西壁際，床面	50%
175	土師器	高坏	15.2	(5.6)	—	石英	橙	普通	坏部外面ヘラナデ，内面ヘラ磨き	北コーナー部，床面	30%
176	土師器	高坏	10.5	(3.5)	—	石英・小礫	にぶい橙	普通	坏部外面ヘラ削り	北コーナー部，下層	30%
177	土師器	高坏	—	(11.4)	13.8	石英・小礫	にぶい橙	普通	脚部外面ヘラナデ	北西壁際，床面	50%
178	土師器	高坏	—	(9.7)	[12.1]	石英	明赤褐	普通	脚部外面ヘラ磨き	北西壁際，床面	30%
179	土師器	坩	9.6	10.6	3.8	石英	にぶい橙	普通	底面ヘラ削り	南西壁近い，床面	95%，PL15
180	土師器	坩	[8.8]	8.6	4.0	石英	にぶい黄橙	普通	底面ヘラ削り	南西壁近い，床面	60%
181	土師器	甕	—	(9.4)	7.7	石英	にぶい黄橙	普通	底面ヘラ削り	炉1付近，床面	20%
182	土師器	壺	[16.2]	(6.0)	—	石英	橙	普通	口縁部ナデ	貯蔵穴	5%

第21号住居跡（第53・54図）

位置と確認状況　調査区中央部のC3a3区に位置し，周囲には第20・22号住居跡，第1号土坑などが確認されている。

規模と形状　長軸4.15m，短軸4.03mの方形であり，主軸方向はN－20°－Wである。壁高は8～19cmで，やや

床　ほぼ平坦であり，中央部がよく踏み固められている。壁溝は南東部を除いた壁際に確認されている。

炉　中央のやや西側，北壁寄りに位置する。長径48cm，短径32cmの楕円形を呈し，皿状に5cmほど掘り窪められた地床炉である。炉床は中央部がやや赤変している。

炉土層解説
1　極暗赤褐色　焼土ブロック中量，炭化物少量

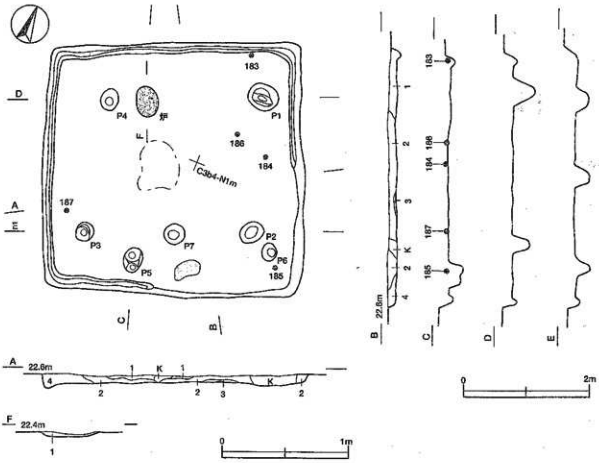
ピット　7か所。主柱穴はP1～P4で，深さは22～35cmである。南壁近くに位置するP5は深さ20cmほどで，出入り口施設に伴うものと考えられる。P6・P7の性格は不明である。

覆土　全体的に暗褐色や黒褐色などを呈する腐植土からなり，堆積状況から自然堆積と考えられる。

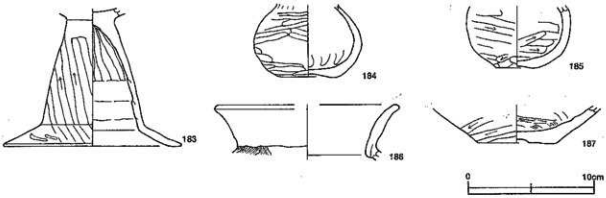
土層解説
1　黒　色　ローム粒子・焼土粒子微量
2　黒褐色　ローム粒子少量，炭化物微量
3　暗褐色　ローム粒子少量
4　黒褐色　ローム粒子少量，炭化物微量

遺物出土状況　土師器片145点（椀2，高坏11，坩41，甕91），碗2点，混入した縄文土器片8点，磨製石斧2点が出土している。土師器片は本跡全体に散在して床面近くから出土している。中央部付近に多数の甕の破片が認められたが，183・185など形を保つものは壁際から出土している。

所見　本跡の時期は，出土土器から5世紀前半と考えられる。



第53図　第21号住居跡実測図



第54図　第21号住居跡出土遺物実測図

第21号住居跡出土遺物観察表（第54図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
183	土師器	高坏	—	(10.9)	14.0	石英	にぶい橙	普通	脚部外面ヘラ削り	北東コーナー部，下層	50%
184	土師器	壺	—	(5.7)	4.0	石英	にぶい黄橙	普通	底面ヘラ削り	東壁沿い，床面	30%
185	土師器	壺	—	(4.9)	3.2	石英	にぶい黄橙	普通	底面ヘラ削り	南東コーナー部，下層	20%
186	土師器	甕	[14.2]	(4.4)	—	石英・小礫	にぶい橙	普通	頸部外面ハケ目整形	東壁沿い，下層	3%
187	土師器	甕	—	(2.9)	6.0	石英・長石	明赤褐	普通	底面ヘラ削り	西壁沿い，床面	5%

第22号住居跡（第55～57図）

位置と確認状況　調査区中央部のC３c2区に位置し，炭化材や焼土ブロックが検出された焼失家屋である。周囲には第19・21号住居跡，第１号土坑などが確認されている。

規模と形状　長軸5.33m，短軸5.13mの方形であり，主軸方向はN－40°－Wである。壁高は46～50cmで，ほぼ直立する。

床　ほぼ平坦であり，本跡の東コーナー部がよく踏み固められている。壁溝は北東壁の一部を除いて確認されている。

炉　中央の北西壁寄りに位置する。平面形は長径78cm，短径66cmの楕円形を呈し，７cmほど掘り窪められた地床炉である。炉床は中央部が赤変している。

炉土層解説

1　暗赤褐色　ローム粒子中量，焼土粒子少量
2　暗赤褐色　焼土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子少量
3　赤黒色　焼土粒子・炭化粒子少量
4　暗赤褐色　焼土粒子多量，ローム粒子少量
5　暗赤褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量

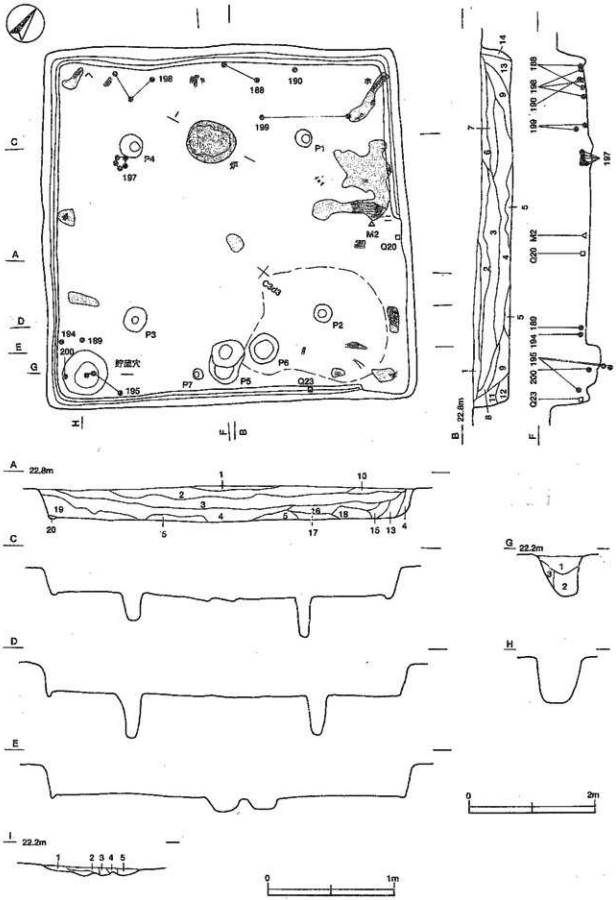
貯蔵穴　南コーナーに位置する。径72cmの円形で，断面形は深さ73cmのU字状を呈している。

貯蔵穴土層解説

1　黒褐色　ロームブロック中量，炭化物少量
2　暗褐色　ロームブロック中量，炭化物微量
3　暗褐色　ロームブロック中量，炭化物微量

ピット　７か所。主柱穴はP１～P４で，深さは41～69cmである。南東壁の中央近くに位置するP５は深さ22cmで，出入り口施設に伴うものと考えられる。P６・P７は深さ19～22cmで，P５の脇に位置しており，補助的な柱穴と考えられる。

覆土　全体的にロームブロックを少量含む暗褐色や黒褐色などを呈する腐植土からなる。ロームブロックを多く含み，一部でブロック状の堆積を示すため，人為堆積と考えられる。



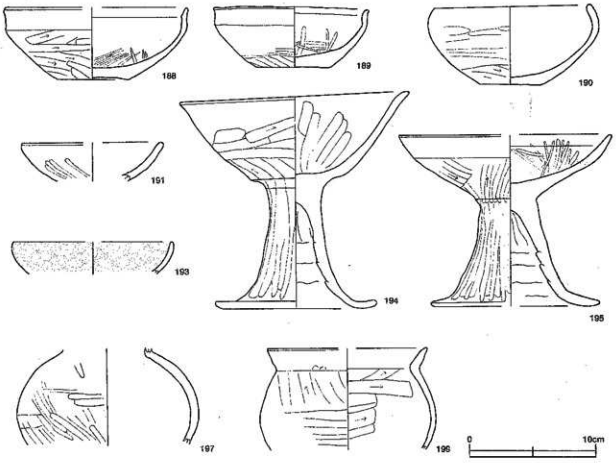
第55図　第22号住居跡実測図

土層解説

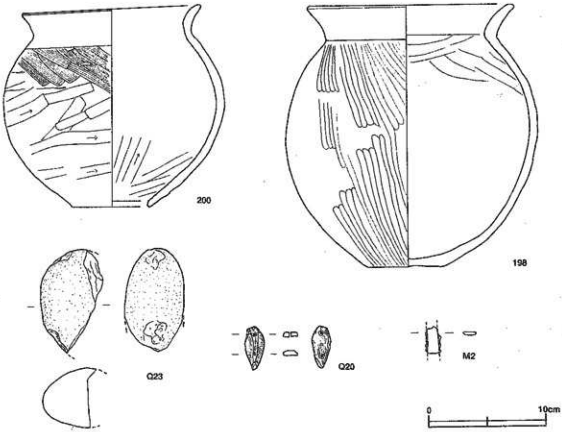
1 暗褐色 ロームブロック少量，焼土粒子・炭化物微量
2 黒褐色 ロームブロック少量，焼土粒子・炭化物微量
3 極暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化物微量
4 黒褐色 ロームブロック・炭化物少量，焼土粒子微量
5 褐 色 ロームブロック中量，炭化物少量，焼土粒子微量
6 黒 色 ローム粒子・焼土粒子・炭化物微量
7 黒褐色 ロームブロック少量，炭化物微量
8 暗褐色 ロームブロック・炭化物少量
9 暗褐色 ロームブロック少量，焼土粒子・炭化物微量
10 黒 色 ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化物微量
11 褐 色 ローム粒子少量，炭化物微量
12 黒褐色 ロームブロック少量，炭化物微量
13 暗褐色 ロームブロック少量，焼土粒子・炭化物微量
14 褐 色 ロームブロック中量，焼土粒子・炭化物微量
15 黒褐色 炭化物少量，ロームブロック微量
16 黒褐色 炭化物少量，ローム粒子微量
17 暗褐色 ロームブロック少量，炭化物・焼土粒子微量
18 暗褐色 ロームブロック中量，炭化物微量
19 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量，炭化物微量
20 暗褐色 ロームブロック中量，炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片413点（坏39，椀3，高坏150，坩1，甕218，甑2），不明鉄製品1点，敲石1点，剣形模造品1点，臼3点，鉄滓1点，混入した縄文土器片53点・石鏃1点が出土しており，炭化材と焼土ブロックも検出されている。土師器片は，南東壁と北西壁沿いを中心に，散在した状態で出土しており，貯蔵穴からも出土している。188・190は北西壁沿いの床面から出土し，189・194は南コーナー部，195・200は貯蔵穴から出土している。炭化材は，北東・北西壁沿いを中心にほぼ床面から検出されている。

所見　本跡の時期は，出土土器から5世紀後半と考えられる。炭化材や遺物の出土状況から，廃絶後間もなく火災にあったものと考えられる。これらの炭化材（ニ・ホ・ヘ）について樹種同定を行った（付章参照）。その結果，ニはクヌギ節，ホ・ヘはコナラ節であることが明らかになった。



第56図　第22号住居跡出土遺物実測図(1)



第57図　第22号住居跡出土遺物実測図(2)

第22号住居跡出土遺物観察表（第56・57図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
188	土師器	坏	[14.1]	5.8	5.4	石英	にぶい橙	普通	底面ヘラ削り	北西壁際，床面	60%
189	土師器	坏	12.2	4.8	5.7	石英・小礫	橙	普通	底面ヘラ削り	南コーナー部，床面	70%，PL17
190	土師器	坏	12.2	5.4	4.8	石英・小礫	にぶい橙	普通	底面ヘラ削り	北コーナー部，床面	75%，PL17
191	土師器	坏	[11.2]	(3.0)	—	石英	明褐	普通	体部外面ヘラ磨き	東部，覆土中	10%
193	土師器	坏	[12.5]	(2.6)	—	石英	にぶい橙	普通	赤彩	東部，覆土中	5%
194	土師器	高坏	17.8	17.1	10.8	石英・小礫	にぶい橙	普通	坏部内面ヘラナデ	南コーナー部，床面	90%，PL16
195	土師器	高坏	[16.7]	13.5	[13.3]	石英・小礫	橙	普通	坏部内面ヘラ磨き	貯蔵穴	50%，PL16
197	土師器	壺	—	(7.6)	—	石英	にぶい褐	普通	体部外面ヘラナデ	ピット（P4）付近	30%
198	土師器	甕	17.2	22.4	6.6	石英	橙	普通	底面ヘラ削り	西コーナー部，床面	80%，焼付著，PL17
199	土師器	小形甕	[12.5]	(8.1)	—	石英	橙	普通	体部内・外面ヘラ削り	北コーナー部，下層	10%
200	土師器	甑	14.9	17.2	6.6	石英・長石・小礫	橙	普通	体部内・外面ヘラ削り	貯蔵穴	100%，PL17

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
Q20	剣形模造品	3.3	1.6	0.5	4.1	粘板岩	表裏に鎬，側面斜め方向の研磨	北東壁際，下層	98%，PL20
Q23	砥石	(8.6)	(5.4)	4.9	(264)	安山岩	上端・下端に敲打痕，上端部に炭化物付着	南東壁際，下層	40%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
M2	不明	(2.3)	1.1	0.3	(1.8)	鉄	板状	北東壁沿い，下層	PL20

第23号住居跡（第58・59図）

位置と確認状況　調査区西部のB 2 d7区に位置し，炭化材や焼土ブロックが検出された焼失家屋である。トレンチャーによる撹乱を受けており，周囲には第14・24・25号住居跡などが確認されている。

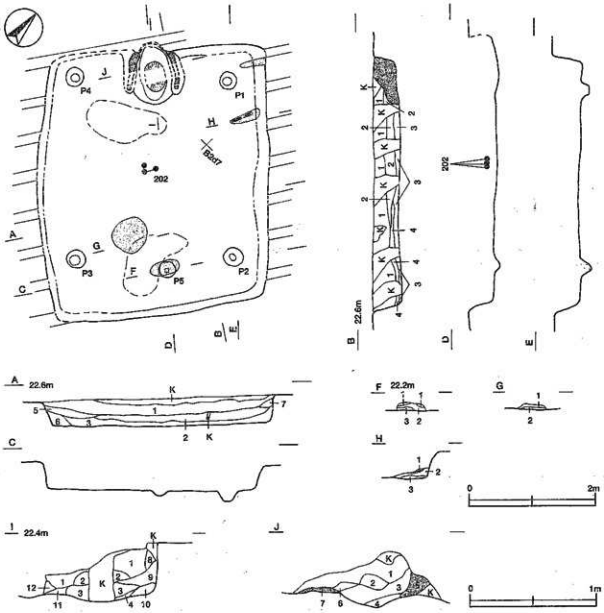
規模と形状　長軸4.12m，短軸3.65mの長方形であり，主軸方向はN－45°－Wである。壁高は35～45cmで，ほぼ直立する。

床　ほぼ平坦であり，竈付近と出入り口部がよく踏み固められている。貼床は確認されていない。

竈　北西壁の中央に構築されている。袖部と火床部，煙道部が遺存しており，焚口から煙道部までの長さ98cm，両袖部幅90cmで，砂質粘土で構築されている。煙道部は壁外に8cmほど掘り込まれ，火床部からほぼ直立する。火床部は10cmほど掘り窪められ，赤変硬化している。

覆土層解説

1　褐　　色　砂粒・粘土粒子中量，焼土ブロック・炭化物少量，ローム粒子微量
2　暗　褐　色　砂粒・粘土粒子中量，焼土ブロック・炭化物少量，ローム粒子微量
3　暗　赤　褐　色　焼土ブロック多量，炭化物・砂粒・粘土粒子少量，ローム粒子微量



第58図　第23号住居跡実測図

4　暗赤褐色　焼土ブロック多量，炭化粒子・粘土粒子少量，砂粒微量
5　褐　　色　粘土粒子多量，砂粒中量，ローム粒子・焼土粒子・炭化物微量
6　暗　褐　色　砂粒・粘土粒子中量，焼土ブロック・炭化物少量，ローム粒子微量
7　暗　褐　色　粘土粒子多量，砂粒中量，ローム粒子・焼土粒子・炭化物微量
8　にぶい赤褐色　砂粒・粘土粒子中量，焼土ブロック・炭化物少量
9　暗赤褐色　焼土ブロック多量，砂粒・粘土粒子中量，ロームブロック・炭化物微量
10　褐　　色　ロームブロック中量，炭化物・砂粒・粘土粒子微量
11　極暗赤褐色　焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化物・砂粒・粘土粒子少量
12　赤　褐　色　焼土ブロック・炭化物・砂粒・粘土粒子少量

ピット　5か所。主柱穴はP1～P4で，深さは11～18cmである。南東壁の中央近くに位置するP5は深さ11cmで，出入り口施設に伴うものと考えられる。

覆土　上層と中層は黒褐色や黒色の腐植土からなり，下層は暗褐色の腐植土からなる。トレンチャーによる攪乱を受けているが，レンズ状の堆積を示した自然堆積である。

土層解説

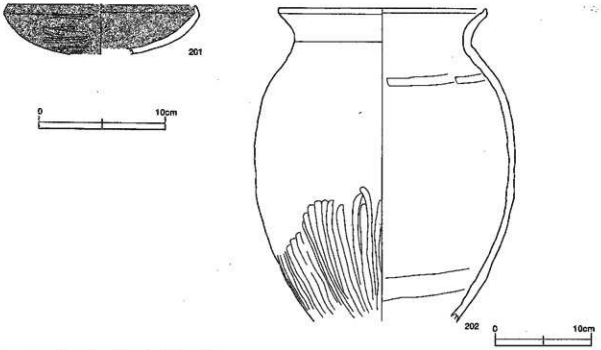
1　黒褐色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化物微量
2　黒　色　ロームブロック多量，炭化物微量
3　暗褐色　ロームブロック中量，炭化物少量，焼土粒子微量
4　暗褐色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
5　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
6　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化物微量
7　暗褐色　ロームブロック少量，焼土粒子微量

遺物出土状況　土師器片225点（坏2，高坏3，坩6，甕214），須恵器片1点が出土しており，北コーナー部と出入り口部付近に炭化材や焼土ブロックも検出されている。遺物は攪乱層や覆土上層から中層にかけての出土が多く，201は南部の覆土中から出土しており，202は中央部の覆土中層から出土している。

焼土ブロック土層解説

1　暗赤褐色　焼土ブロック多量，ローム粒子・炭化物微量
2　極暗赤褐色　焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化物少量
3　褐　　色　ロームブロック中量，炭化物微量

所見　本跡の時期は，出土土器より7世紀前半のものと考えられ，北西にある第25号住居跡も，ほぼ同時期のものと考えられる。本跡に伴う遺物は201と202だけであり，そのほかの土師器片は混入した古墳時代中期のもので，また，203（第84図）も混入である。炭化材や遺物の出土状況から，廃棄後に火災にあったものと考えられる。

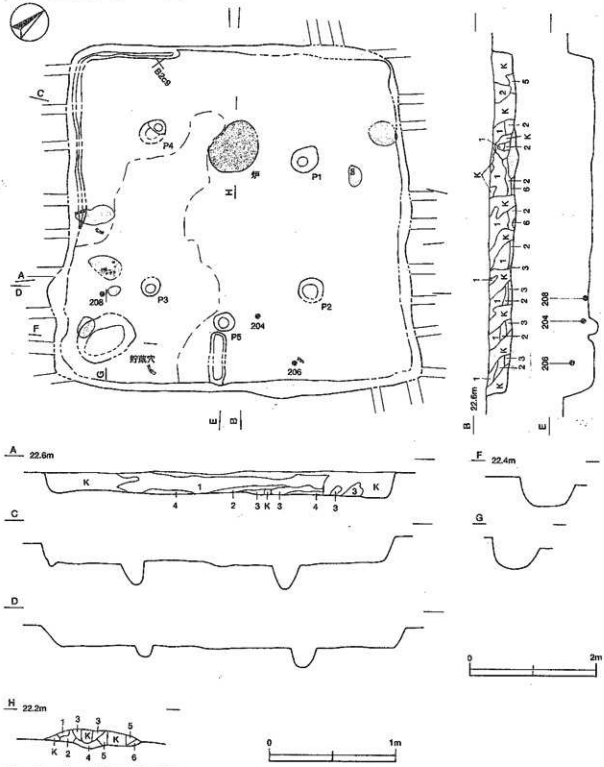


第59図　第23号住居跡出土遺物実測図

第23号住居跡出土遺物観察表（第59図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
201	土師器	坏	[14.8]	4.0	—	石英	黒	普通	体部外面ヘラ磨き	南部，覆土中	3%
202	土師器	甕	21.4	(32.6)	—	石英・長石	橙	普通	体部外面ヘラ磨き	中央部，中層	25%,図付著,PL.17

第24号住居跡（第60・61図）



第60図　第24号住居跡実測図

位置と確認状況　調査区西部のB2c9区に位置し，炭化材や焼土ブロックが検出された焼失家屋である。トレンチャーによる撹乱を受けており，周囲には第14・23・25・27号住居跡などが確認されている。

規模と形状　長軸5.45m，短軸5.40mの方形であり，主軸方向はN－53°－Wである。壁高は30～39cmでほぼ直立する。

床　ほぼ平坦であり，炉から貯蔵穴にかけてよく踏み固められている。壁溝は西コーナー部で確認され，南東壁より浅い溝が1条確認されている。

炉　中央の北西壁寄りに位置する。長径90cm，短径66cmの不整楕円形を呈し，皿状に6cmほど掘り窪められた地床炉である。炉床は南東部がわずかに赤変している。

炉土層解説

1　暗赤灰色　焼土ブロック中量，炭化物少量，ローム粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量，炭化物微量
3　暗赤褐色　焼土ブロック少量，ローム粒子・炭化物微量
4　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化物微量
5　暗赤褐色　焼土ブロック中量，炭化物微量
6　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量

貯蔵穴　南コーナーに位置する。長径92cm，短径68cmの楕円形で，断面形は深さ32cmのU字状を呈している。

ピット　5か所。主柱穴はP1～P4で，深さは20～39cmである。南東壁の中央近くに位置するP5は深さ15cmで，出入り口施設に伴うものと考えられる。

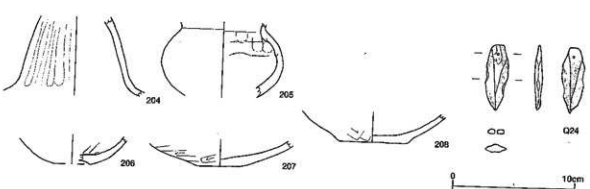
覆土　黒褐色や黒色などを呈する腐植土からなる。トレンチャーによる撹乱を受けているが，レンズ状堆積を示した自然堆積である。

土層解説

1　黒　色　ロームブロック中量，焼土粒子少量
2　黒褐色　ロームブロック・焼土粒子・炭化物少量
3　暗褐色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化物微量
4　褐　色　ロームブロック中量
5　褐　色　ロームブロック多量
6　褐　色　ロームブロック中量

遺物出土状況　土師器片530点（坏21，高坏84，坩27，甕398），剣形模造品1点，礫4点，混入した縄文土器片1点が出土しており，炭化材も検出されている。遺物のほとんどは覆土中から出土したものであるが，204・208は覆土下層から出土し，207は貯蔵穴から出土している。炭化材は，北東・南西の壁際に散在して検出されている。

所見　本跡の時期は，出土遺物から5世紀前半である。遺物や炭化材の出土状況は散在的で，廃絶後に火災にあったものと考えられる。



第61図　第24号住居跡出土遺物実測図

第24号住居跡出土遺物観察表（第61図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
204	土師器	高坏	—	(7.4)	—	石英	にぶい黄橙	普通	脚部外面ヘラ磨き	出入り口部，下層	5%
205	土師器	坩	—	(6.1)	—	石英・長石	にぶい橙	普通	体部外面指ナデ	北部，覆土中	20%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
206	土師器	坩	—	(2.4)	[2.8]	石英・長石	にぶい橙	普通	底面ナデ	南東壁沿い，上層	10%
207	土師器	坩	—	(2.2)	3.4	石英・長石	にぶい橙	普通	底面ナデ	貯蔵穴	5%
208	土師器	甕	…	(2.5)	5.6	石英・長石	にぶい橙	普通	底部ヘラ削り	南コーナー部，下層	3%,内面煤付着

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
Q24	側形模造品	5.4	1.8	0.6	6.7	滑石	断面は楕円形で，両面斜めの穿孔，一方から穿孔	東部，覆土中	90%，P1,20

第25号住居跡（第62図）

位置と確認状況　調査区西部のB２b2区に位置し，炭化材が検出された焼失家屋である。また，周囲には第23・26・27号住居跡などが確認され，トレンチャーによる撹乱を受けている。

規模と形状　長軸3.91m，短軸3.55mの長方形であり，主軸方向はN－35°－Wである。壁高は45～55cmで，ほぼ直立する。

床　ほぼ平坦であり，中央部がよく踏み固められている。壁溝は確認されていない。

竈　北西壁の中央に構築されている。北東側の袖部と火床部，煙道部が遺存しており，焚口から煙道部まで130cm，両袖部の幅は約100cmと推定される。袖部は，砂質粘土によって構築されている。煙道部は壁外に30cmほど掘り込んでおり，火床部から緩やかに外傾し，確認面近くで直立する。火床部は，７cmほど掘り窪められ赤変硬化している。５・６層は砂質粘土を多く含んだ焼土層で，内面が赤変硬化した天井部の一部と考えられる。

竈土層解説

1　暗　褐　色　ロームブロック中量，焼土ブロック少量，炭化粒子・砂粒・粘土粒子微量
2　褐　　色　砂粒・粘土粒子中量，ローム粒子・焼土ブロック・炭化物微量
3　褐　　色　砂粒・粘土粒子中量，ロームブロック少量，炭化物微量
4　暗　褐　色　砂粒・粘土粒子中量，ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
5　にぶい赤褐色　焼土ブロック・砂粒・粘土粒子中量，炭化物微量
6　赤　褐　色　焼土ブロック多量，砂粒・粘土粒子中量，炭化物微量
7　暗 赤 褐 色　焼土ブロック多量，ロームブロック中量，砂粒・粘土粒子少量，炭化物微量
8　灰　褐　色　焼土ブロック・砂粒中量，粘土粒子少量，炭化物微量
9　暗 赤 褐 色　砂粒・粘土粒子・焼土ブロック中量，炭化粒子微量
10　にぶい赤褐色　砂粒・粘土粒子中量，焼土粒子・炭化物微量
11　暗　褐　色　ロームブロック中量，炭化物・砂粒・粘土粒子微量
12　暗 赤 褐 色　焼土ブロック・砂粒・粘土粒子中量，炭化粒子微量
13　暗 赤 褐 色　焼土ブロック多量，砂粒・粘土粒子少量，炭化物微量
14　暗 赤 褐 色　焼土ブロック中量，ローム粒子・砂粒・粘土粒子少量，炭化物微量

ピット　１か所。P１は南東壁の中央付近に位置しており，出入り口施設に伴うものと考えられ，深さは24cmである。

ピット土層解説

1　極暗褐色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化物微量
2　褐　　色　ロームブロック中量

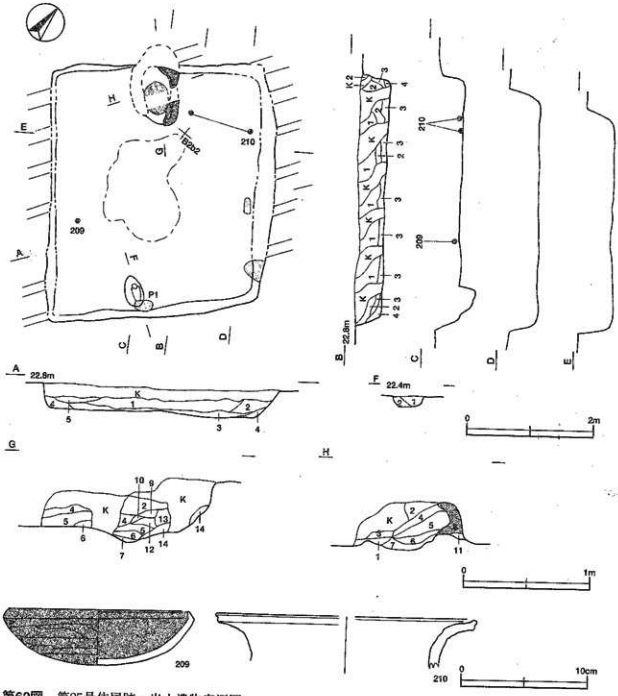
覆土　上層から中層は極暗褐色や黒褐色の腐植土からなり，下層は褐色のロームブロックからなる。レンズ状堆積を示した自然堆積である。

土層解説

1　黒 褐 色　ローム粒子・焼土粒子・炭化物微量
2　極暗褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
3　褐　　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量
4　暗 褐 色　ロームブロック中量
5　黒 褐 色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化物微量

遺物出土状況　土師器片102点（坏12，高坏２，甕88），碗５点，混入した石器２点，磁器片１点が出土しており，焼土ブロックも検出されている。遺物のほとんどは，覆土中層からの出土であるが，210は北部の床面から出土している。

所見　本跡の時期は，出土土器より７世紀前半と考えられ，南東にある第23号住居跡も，ほぼ同時期のものと考えられる。遺物の出土状況から，廃棄後に火災にあったものと考えられる。



第62図　第25号住居跡・出土遺物実測図

第25号住居跡出土遺物観察表（第62図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
209	土師器	坏	14.1	4.5	—	石英	明黄褐	普通	内・外面黒色処理	南西壁沿い，下層	95%，PL17
210	土師器	甕	[20.4]	(4.0)	—	石英・長石	にぶい黄橙	普通	口縁部ナデ	北部，床面	5%

第26号住居跡（第63・64図）

位置と確認状況　調査区西部のＡ１j9区に位置し，炭化材や焼土ブロックが検出された焼失家屋である。また，周囲には第25・27号住居跡などが確認され，トレンチャーによる攪乱を受けている。

規模と形状　長軸6.38m，短軸5.24mの長方形であり，主軸方向はＮ－71°－Ｗである。壁高は34～43cmでほぼ直立する。

床　ほぼ平坦であり，炉１・２の周辺と貯蔵穴付近が部分的に踏み固められている。壁溝は北東・南東壁と北西壁の一部で確認されている。また，間仕切り溝状の浅い溝が，２条確認されている。

炉　２か所。炉１は中央の北コーナー寄りに位置する。径64～66cmの不整円形を呈し，掘り窪みのほとんどない地床炉であり，炉床全体が赤変している。炉２は西コーナー寄りに位置する。長径88cm，短径54cmの楕円形を呈し，わずかに掘り窪められた地床炉であり，炉床全体が赤変硬化している。

炉１土層解説
1　極暗赤褐色　焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化物微量
2　暗赤褐色　焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化粒子微量
3　にぶい赤褐色　焼土ブロック多量，ローム粒子・炭化物微量

炉２土層解説
1　暗赤褐色　焼土ブロック中量，炭化物少量，ローム粒子微量
2　にぶい赤褐色　焼土ブロック多量，ローム粒子・炭化粒子微量
3　暗赤褐色　焼土ブロック多量，炭化粒子少量，ローム粒子微量
4　暗赤褐色　焼土ブロック多量，ローム粒子・炭化物微量
5　極暗赤褐色　焼土ブロック少量，ローム粒子・炭化粒子微量

貯蔵穴　南コーナーに位置する。径70～72cmの円形を呈し，断面形は深さ32cmのＵ字状を呈している。

貯蔵穴土層解説
1　黒褐色　ロームブロック・炭化物少量
2　暗褐色　ロームブロック中量，炭化物微量

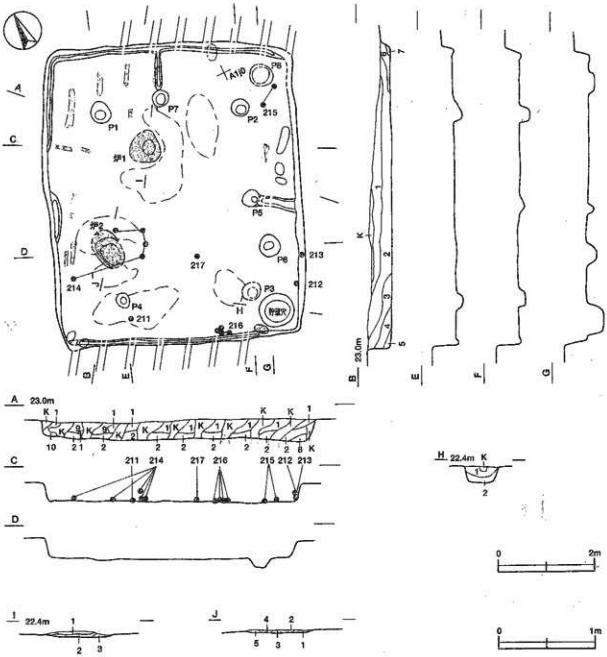
ピット　８か所。主柱穴はP1～Ｐ４で，深さは14～26cmである。Ｐ５は深さ18cmで，南東壁の中央付近に位置し，出入り口施設に伴うものと考えられる。Ｐ６～Ｐ８の性格は不明である。

覆土　上層は黒色の腐植土からなり，下層はロームブロックを多く含む黒褐色の腐植土からなる。レンズ状の堆積を示した自然堆積である。

土層解説
1　黒　色　炭化物中量，ロームブロック少量，焼土ブロック微量
2　黒褐色　ロームブロック中量，炭化物少量，焼土粒子微量
3　黒褐色　ロームブロック中量，炭化物少量，焼土粒子微量
4　暗褐色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化物微量
5　極暗褐色　ロームブロック中量，炭化物少量，焼土ブロック微量
6　黒褐色　ロームブロック中量，炭化物少量，焼土粒子微量
7　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量
8　暗赤褐色　ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化物微量
9　極暗褐色　ロームブロック中量，炭化粒子微量
10　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片382点（椀２，高坏78，坩８，壺・甕284，甑10），碗５点，混入した石器２点が出土しており，炭化材や焼土ブロック，粘土ブロックも検出されている。床面に近い遺物は，炉２の周囲や東コーナー，南東・南西壁沿いに多く見られる。炭化材は北東・北西壁沿いの床面から主軸方向と直交する向きで検出されている。また焼土ブロックは，東コーナー部や西コーナーに検出され，粘土ブロックは南コーナーから検出されている。

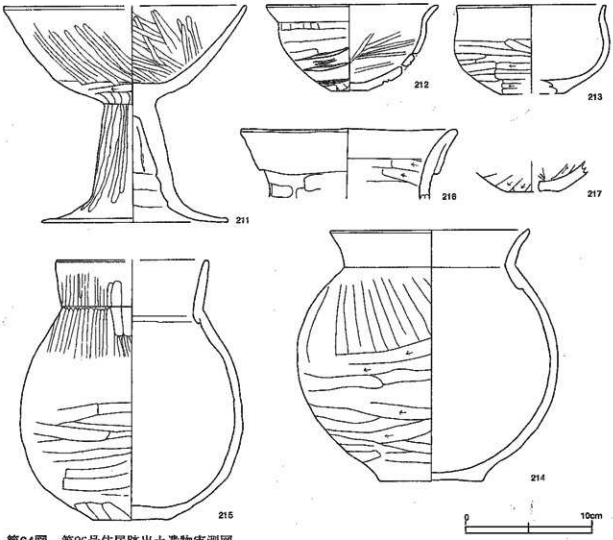
所見　本跡の時期は，出土土器から５世紀後半で，東に位置する第27号住居跡とほぼ同時期と考えられる。炭化材や遺物の出土状況から，廃棄後に火災にあったものと考えられる。



第63図　第26号住居跡実測図

第26号住居跡出土遺物観察表（第64図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
211	土師器	甕　坏	(19.0)	17.3	14.6	石英・小礫	にぶい橙	普通	坏部内・外面ヘラ磨き	西コーナー部，床面	60%，　PL.17
212	土師器	椀	13.3	6.8	2.8	石英・小礫	橙	普通	底面ヘラ削り	南コーナー部，下層	30%,底径に亀裂,PL17
213	土師器	椀	11.7	7.0	[5.0]	石英・小礫	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り	南コーナー部，床面	40%，　PL.17
214	土師器	甕	15.5	20.0	8.0	石英・小礫	橙	普通	底面ヘラ削り	西コーナー部，床面	90%,底付近,PL17
215	土師器	甕	[12.0]	20.7	6.0	石英・小礫	にぶい橙	普通	口縁・頸部外面ヘラ磨き	東コーナー部，床面	40%，　PL.17
216	土師器	壺	16.8	(5.7)	—	石英	橙	普通	胴部外面指ナデ	南西壁際，床面	10%
217	土師器	甑	—	(2.4)	4.0	石英・小礫	にぶい黄橙	普通	底面ヘラ削り	中央部，床面	5%



第64図　第26号住居跡出土遺物実測図

第27号住居跡（第65～67図）

位置と確認状況　調査区西部のＡ２h2区に位置し，炭化材や焼土ブロックが検出された焼失家屋である。南コーナー及び西コーナーが確認されているが，北部は調査区外へのび，その状況から方形または長方形と推定される。周囲には，第24～26号住居跡などが確認されている。ドレンチャーによる攪乱を受けている。

重複関係　Ｐ２近くを第83号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　南西壁は8.66m，南東は7.00mだけが確認されている。主軸方向はN－38°－Wであり，壁高は45～50cmで，ほぼ直立する。

床　ほぼ平坦であり，貯蔵穴付近と炉の西側がよく踏み固められている。壁溝は，西・南コーナー部を除いて確認されている。

炉　中央の北西壁寄りに位置する。長径130cm，短径110cmの不整楕円形を呈し，皿状に４cmほど掘り窪められた地床炉である。炉床は中央部が赤変硬化している。

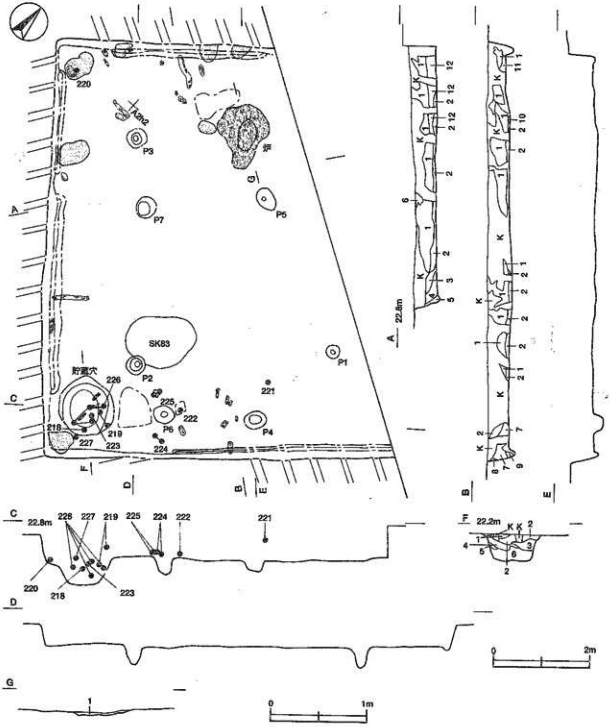
炉土層解説
1　暗赤褐色　焼土ブロック多量，ロームブロック中量，炭化物少量

貯蔵穴　南コーナーに位置する。径120cmの円形で，断面は深さ56cmのU字状を呈している。

貯蔵穴土層解説

1　極暗褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化物微量
2　黒　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
3　暗　褐　色　ロームブロック少量，炭化物微量
4　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化物微量
5　暗　褐　色　ローム粒子少量，炭化物微量
6　黒　褐　色　炭化物中量，ローム粒子・焼土粒子微量

ピット　7か所。P1～P3が主柱穴であり，深さは38～42cmである。北コーナー部は調査区域外のため，柱穴は検出されていない。南東壁の中央付近に位置するP4は深さ22cmで，出入り口施設に伴うものと考えられる。P5～P7の性格は不明である。



第65図　第27号住居跡実測図

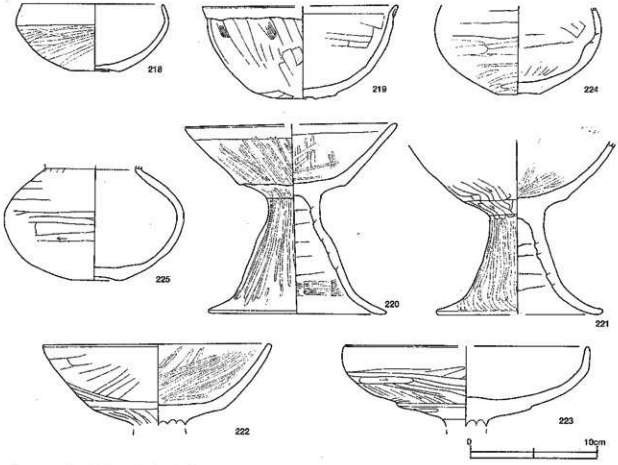
覆土　黒褐色や黒色などを呈する腐植土からなる。レンズ状の堆積を示した自然堆積である。

土層解説

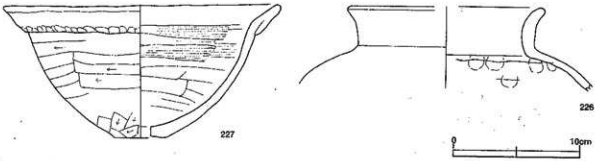
1	黒　色	ロームブロック・炭化物少量，焼土ブロック微量
2	黒褐色	ロームブロック中量，炭化物少量，焼土粒子微量
3	暗褐色	ロームブロック中量，焼土ブロック・炭化物微量
4	極暗褐色	ロームブロック中量，焼土ブロック・炭化物微量
5	褐　色	ロームブロック中量，炭化粒子微量
6	黒褐色	ロームブロック・炭化粒子少量
7	極暗褐色	ロームブロック中量，焼土ブロック・炭化物微量
8	黒褐色	ロームブロック・炭化物少量
9	暗褐色	ロームブロック中量，炭化粒子微量
10	暗赤褐色	焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化物少量
11	黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
12	黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化物少量

遺物出土状況　土師器片443点（坏・椀8，高坏127，坩40，甕255，甑13），磨石1点，礫5点，混入した縄文土器片3点，陶器片1点が出土し，炭化材や焼土ブロックも検出されている。土師器片は覆土中からの出土が多く，床面に近いものは東壁沿いを中心に出土している。また，貯蔵穴からも218・219・223・226が出土している。炭化材は壁際の床面から検出され，主軸方向を向くものや直交するもの，斜交するものが見られる。焼土ブロックも壁際に検出されている。

所見　本跡の時期は出土土器から5世紀後半と考えられ，西にある第26号住居跡とほぼ同時期と考えられる。炭化材や遺物の出土状況から，廃棄後に火災にあったものと考えられる。また，調査された住居跡の中では最大の規模を有している。



第66図　第27号住居跡出土遺物実測図(1)



第67図　第27号住居跡出土遺物実測図(2)

第27号住居跡出土遺物観察表（第66・67図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
218	土師器	坏	11.0	5.3	3.6	石英	橙	普通	体部外面ヘラ磨き	貯蔵穴	95%，PL.17
219	土師器	椀	[15.2]	7.4	5.4	石英・小礫	橙	普通	底面ヘラ削り	貯蔵穴	60%
220	土師器	高坏	[16.5]	15.2	14.0	石英・小礫	灰	普通	坏部内・外面ヘラ磨き	西コーナー部，床面	80%，PL.17
221	土師器	高坏	—	(13.8)	[13.1]	石英	橙	普通	脚部外面ヘラ磨き	出入り口部，中層	60%
222	土師器	高坏	17.6	(6.4)	—	石英・小礫	明赤褐	普通	坏部外面ヘラナデ	南コーナー部，下層	50%
223	土師器	高坏	[19.1]	(6.4)	—	石英・小礫	橙	普通	坏部外面ヘラ削り	貯蔵穴，覆土中	40%
224	土師器	壷	—	(6.9)	3.4	石英	橙	普通	底面ヘラ削り	南コーナー部，下層	30%
225	土師器	壷	—	(9.1)	3.8	石英・小礫	にぶい黄橙	普通	底面ナデ	南コーナー部，下層	40%，PL.17
226	土師器	甕	[15.0]	(6.4)	—	石英・小礫	にぶい黄橙	普通	頸部内面指頭痕	貯蔵穴	20%
227	土師器	甕	21.5	10.5	4.0	石英・小礫	明赤褐	普通	底面ヘラ削り	南コーナー部，床面	80%，PL.17

（2）土　坑

第1号土坑（第68～71図）

位置と確認状況　調査区中央部のB3i1区に位置する。周囲には第14・20～22号住居跡などが確認されている。

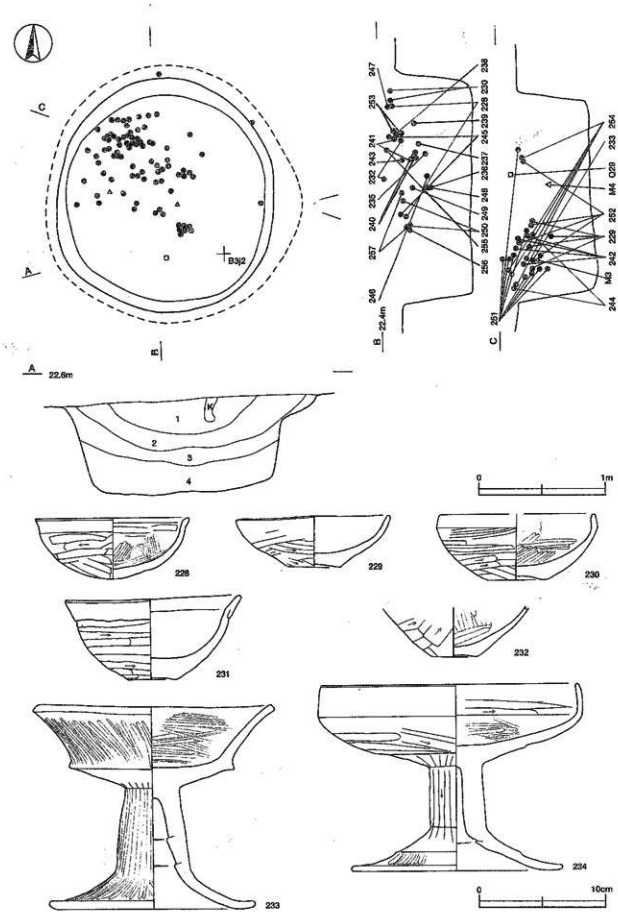
規模と形状　長径1.86m，短形1.72mの円形を呈し，深さ63cmである。壁は底面から円筒状に立ち上がり，確認面近くで緩やかに外傾し，底面は平坦である。

覆土　第2層に遺物が投棄されており，第1層はそれを覆う腐植土層である。第3・4層はローム ブロックからなり，とくに遺物の集中地点の下ではほぼローム ブロックで，人為的に埋め戻されたものと考えられる。

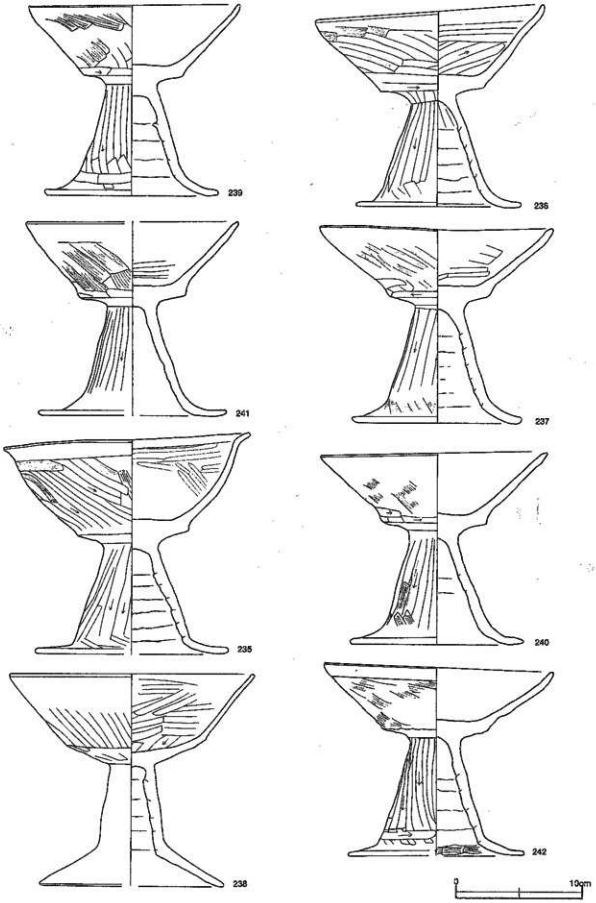
土層解説
1　黒　色　ローム ブロック微量
2　黒褐色　ローム ブロック・焼土ブロック・炭化物微量
3　暗褐色　ローム ブロック中量，炭化物微量
4　褐　色　ローム ブロック多量

遺物出土状況　土師器片653点（坏11，椀9，高坏319，壷1，壺22，甕273，甑18），鉄鏃2点，軽石1点，混入した縄文土器片2点が出土している。土師器片のほとんどは北西寄りの2層から土層の堆積状況に沿って出土しており，投棄された様相を呈している。坏や高坏などは形をとどめているものが多く，甕や甑は破片状で接合を行っても完形にならないものが多い。接合の結果，坏4，椀1，高坏17，壷1，甕6，甑1が復元されている。軽石は土坑の南寄りに土師器片とはやや離れて出土しており，鉄鏃2点は集中した土師器片の中から出土している。

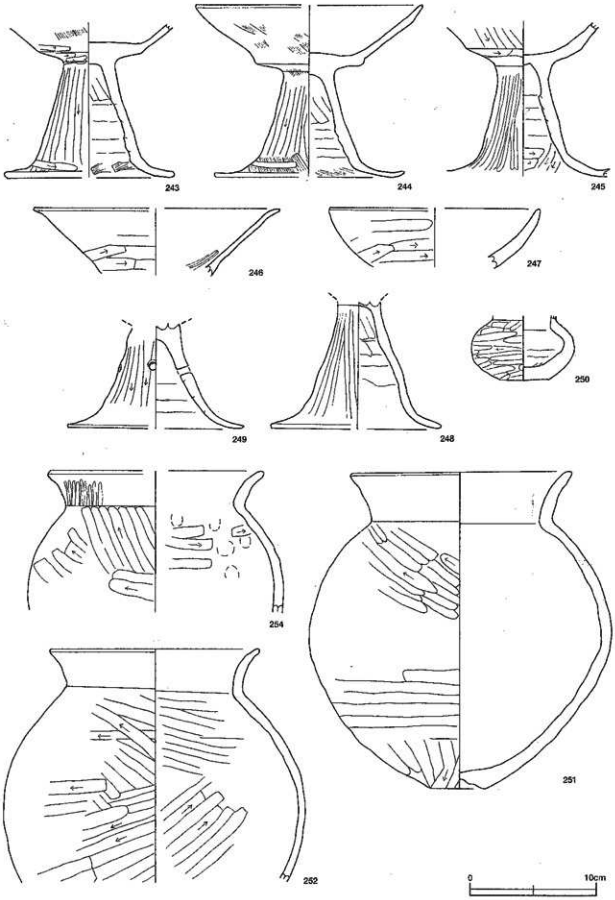
所見　本跡の時期は，出土遺物から5世紀後半と考えられる。中層付近まで土坑を埋め戻し，遺物を一括して投棄した様相を呈しており，祭祀行為の終了とともに埋納された祭祀遺構と考えられる。



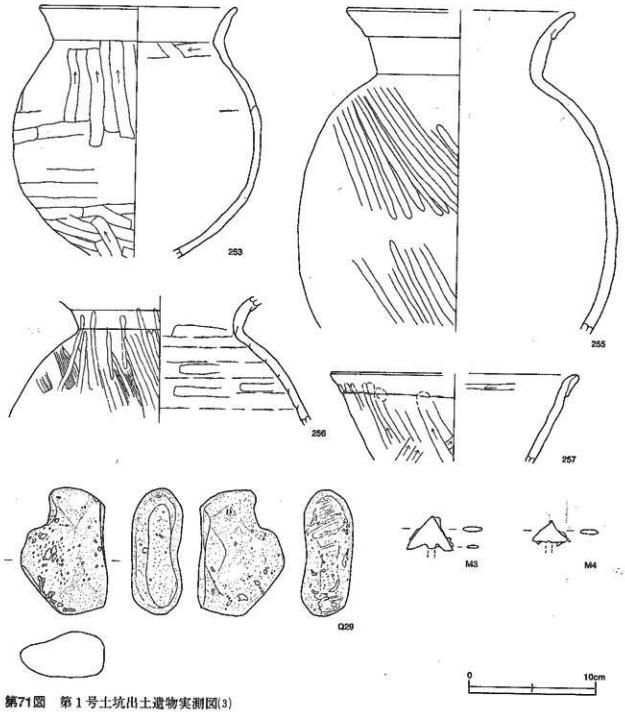
第68図　第1号土坑・出土遺物実測図



第69図　第１号土坑出土遺物実測図(1)



第70図　第１号土坑出土遺物実測図(2)



第71図　第1号土坑出土遺物実測図(3)

第1号土坑出土遺物観察表（第68～71図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
228	土師器	椀	12.1	4.8	—	石英・小礫	橙	普通	体部外面ヘラ削り	上層	85%、PL18
229	土師器	坏	12.0	4.1	4.2	石英・長石・小礫	にぶい橙	普通	底面ヘラ削り	上層	90%、PL18
230	土師器	坏	[12.0]	5.2	4.4	石英・長石・小礫	にぶい赤褐	普通	底面ヘラ削り	上層	60%
231	土師器	坏	13.6	6.7	3.7	石英・長石・小礫	橙	普通	底面ヘラ削り	上層	90%、PL18
232	土師器	坏	—	(3.9)	3.6	石英・小礫	にぶい黄橙	普通	底面ヘラ削り	上層	40%、表面風化
233	土師器	高坏	18.3	16.1	16.3	石英・長石・小礫	にぶい橙	良好	坏部内・外面ヘラ磨き	上層	95%、PL18
234	土師器	高坏	20.0	14.8	16.3	石英・小礫	明赤褐	普通	坏部内面ヘラ磨き	上層	80%、PL18
235	土師器	高坏	19.4	17.5	[15.2]	石英・長石・小礫	橙	普通	坏部内面ヘラ磨き	上層	75%、PL18

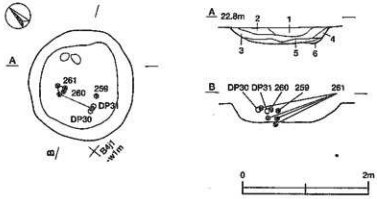
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
236	土師器	高坏	18.0	16.0	12.9	石英・長石・小礫	橙	普通	坏部内面ヘラナデ	上層	90%、PL.18
237	土師器	高坏	18.3	15.4	13.5	石英・長石・小礫	にぶい黄橙	普通	坏部内面ヘラナデ	上層	85%、表面風化 PL.18
238	土師器	高坏	19.1	16.8	[14.4]	石英・小礫	橙	普通	坏部内・外面ヘラナデ	上層	70%、PL.18
239	土師器	高坏	16.6	15.1	13.3	石英・長石・小礫	浅黄橙	普通	坏部外面ハケ目整形	上層	90%、表面風化 PL.18
240	土師器	高坏	17.2	15.3	13.7	石英・長石	にぶい黄橙	普通	坏・脚部外面ハケ目整形	上層	70%、表面風化 PL.18
241	土師器	高坏	[16.6]	15.4	[15.0]	石英・長石	にぶい橙	普通	坏部外面ハケ目整形	上層	40%、表面風化 PL.19
242	土師器	高坏	18.0	15.2	[13.6]	石英・長石	橙	普通	坏・脚部外面ヘラ削り	上層	50%、表面風化
243	土師器	高坏	--	(13.0)	[13.2]	石英・長石・小礫	にぶい橙	普通	坏・脚部外面ヘラ削り	上層	50%、表面風化
244	土師器	高坏	[17.8]	13.6	[14.4]	石英	にぶい橙	普通	脚部外面ヘラ削り	上層	75%、表面風化 PL.19
245	土師器	高坏	—	(12.3)	-	石英・長石	橙	普通	脚部外面ヘラ磨き	上層	50%
246	土師器	高坏	[19.4]	(5.3)	—	石英	にぶい橙	普通	坏部内面ヘラ磨き	上層	10%
247	土師器	高坏	[16.4]	(4.7)	—	石英・長石	にぶい橙	普通	坏部外面ヘラ削り	上層	10%
248	土師器	高坏	----	(10.2)	[12.6]	石英・長石	にぶい橙	普通	脚部外面ヘラ磨き	上層	40%
249	土師器	高坏	—	(8.2)	[13.9]	石英	にぶい黄橙	普通	脚部外面ヘラナデ	上層	30%、脚部付根付近
250	土師器	壺	—	(5.1)	3.8	石英	橙	普通	底面ヘラ削り	上層	70%
251	土師器	甕	17.0	25.1	4.4	石英	赤	普通	底面ヘラ削り	上層	80%、底付近 PL.19
252	土師器	甕	16.4	(18.5)	—	石英・長石	にぶい褐	普通	体部内・外面ヘラ削り	上層	40%、底付近 PL.19
253	土師器	甕	15.3	(19.8)	---	石英・長石	にぶい黄橙	普通	体部外面ヘラ削り	上層	30%、底付近 PL.19
254	土師器	甕	[16.8]	(11.2)	—	石英・長石・小礫	橙	普通	口縁部外面ヘラ磨き	上層	10%
255	土師器	甕	[17.8]	(25.4)	—	石英・小礫	褐	普通	体部外面ヘラ磨き	上層	20%
256	土師器	甕		(10.1)	---	石英・長石	明赤褐	普通	体部外面ハケ目整形	上層	10%
257	土師器	甑	[19.4]	(7.0)	—	石英・長石	にぶい橙	普通	口縁部付近指ナデ	上層	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
Q29	砥石 カ	10.0	6.8	4.0	565	軟石	平坦面1面	上層	PL.20

番号	器種	全長	刃身長	刃身幅	茎現存長	茎現存幅	茎長	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 3	鏃	(2.8)	2.8	3.6	(0.5)	0.6	—	0.4	(3.0)	鉄	刃身部三角形	中層	PL.20
M 4	鏃	(2.0)	(2.0)	(2.9)	—	—	—	0.3	(2.1)	鉄	刃身部三角形	中層	PL.20

第27号土坑（第72・73図）

位置と確認状況　調査区中央部のB 3 i0区に位置する。周囲には第11・17号住居跡，第30号土坑などが確認されている。



第72図　第27号土坑実測図

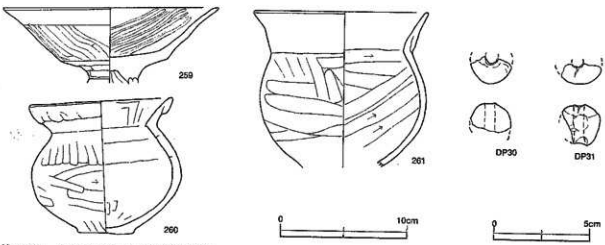
規模と形状　長径1.76m，短径1.65mの円形を呈し，深さ30cmである。壁は外傾して立ち上がり，底面は平坦である。

覆土　上層は極暗褐色や黒褐色の腐植土で，下層は暗褐色のロームブロックからなる。下層はブロック状の堆積を示しており，埋め戻されたものと考えられる。

土層解説
1 黒 褐 色 焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化物少量
2 極暗褐色 ロームブロック中量，焼土ブロック少量
3 暗 褐 色 ロームブロック中量，焼土ブロック・炭化物少量
4 褐 色 ロームブロック中量
5 暗 褐 色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物中量
6 褐 色 ロームブロック中量，焼土ブロック少量

遺物出土状況 土師器片140点（坏5，高坏39，坩6，甕30，甕60），球状土錘2点，礫3点が出土し床面付近には投棄されたと考えられる焼土ブロックが検出されている。土師器片は中央部からやや南寄りの覆土中層から床面に集中し，259とほぼ完形の260は覆土中層から，261は覆土下層から出土している。

所見 遺物は埋納された可能性があり，それらは5世紀前半のものである。



第73図 第27号土坑出土遺物実測図

第27号土坑出土遺物観察表（第73図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
259	土師器	高坏	16.9	（6.1）	—	石英・長石	橙	普通	坏部外面ヘラナデ	中層	40%
260	土師器	小形壺	11.2	10.9	4.3	石英・長石	にぶい橙	普通	底面ヘラ削り	中層	95%，PL18
261	土師器	小形甕	13.4	（12.3）	—	石英・長石	にぶい赤褐	普通	体部内・外面ヘラ削り	下層	50%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重さ	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP30	球状土錘	2.1	（1.5）	0.5	（3.0）	—	灰白	ナデ，被熱・磨滅	中層	40%
DP31	球状土錘	[2.4]	2.1	[0.5]	（2.9）	長石	橙	ナデ，破損	中層	30%

第30号土坑（第74図）

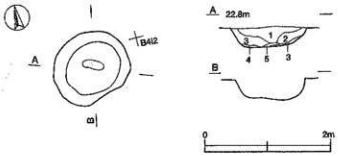
位置と確認状況 調査区中央部のB4 i1区に位置し，周囲には第11・17号住居跡，第27号土坑が確認されている。

規模と形状 長径1.24m，短径1.04mの円形を呈し，深さ31cmである。壁は外傾して立ち上がり，底面は皿状を呈している。

覆土 ロームブロックを含む暗褐色や黒色を呈する腐植土からなる。モザイク状の堆積を示した人為堆積と考えられる。

土層解説
1 黒 色 ロームブロック中量，焼土ブロック微量
2 黒 褐 色 ロームブロック中量，焼土ブロック少量
3 極暗褐色 ロームブロック中量，焼土ブロック少量，炭化物微量
4 暗 褐 色 ロームブロック中量
5 極暗褐色 焼土ブロック中量，ロームブロック少量

遺物出土状況　土師器片10点（高坏1，甕9）などが覆土下層から出土しているが，細片のため図示していない。また，底面より投棄されたと考えられる焼土ブロックも検出されている。



所見　土師器片は古墳時代中期と考えられるが，細片であるため明確な時期は不明である。遺構の形態や，焼土ブロックが検出された点など，南西に位置する第27号土坑と類似しているが，性格については不明である。

第74図　第30号土坑実測図

第72号土坑（第75図）

位置と確認状況　調査区中央部のC3g2区に位置し，周囲には第19・22号住居跡が確認されている。

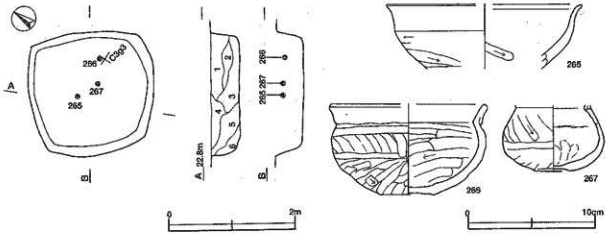
規模と形状　長軸1.96m，短軸1.94mの隅丸方形を呈し，深さ42cmである。本跡の南東壁はN－40°－Wを指している。壁はやや外傾して立ち上がり，底面はほぼ平坦である。

覆土　ロームブロックを含む暗褐色や黒褐色の腐植土からなる。モザイク状の堆積を示した人為堆積と考えられる。

土層解説
1　黒褐色　ロームブロック中量，炭化物少量
2　黒褐色　ロームブロック中量，炭化物少量
3　黒褐色　ロームブロック中量，炭化物少量
4　暗褐色　ロームブロック中量，炭化物微量
5　黒褐色　ロームブロック中量，炭化物少量
6　黒褐色　ロームブロック中量，炭化物少量

遺物出土状況　土師器片46点（坏1，椀7，高坏3，坩7，甕28），礫3点，混入した縄文土器片2点が出土している。土師器片は，覆土中層から北側に散在した状態で出土している。

所見　本跡の時期は出土土器より，5世紀後半と考えられるが，性格については不明である。



第75図　第72号土坑・出土遺物実測図

第72号土坑出土遺物観察表（第75図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	硬度	手法の特徴	出土位置	備考
265	土師器	坏	[15.3]	(5.1)	4.0	石英・長石	にぶい橙	普通	体部内・外面ヘラナデ	中層	10%
266	土師器	椀	[12.0]	7.1	2.6	石英・長石・小礫	明赤褐	普通	底面ヘラ削り	中層	50%
267	土師器	坩	—	(5.2)	—	石英	にぶい橙	普通	底面ナデ	中層	50%

3　平安時代の遺構と遺物

今回の調査で平安時代の土坑１基が確認された。以下，遺構と遺物について記述する。

（1）土　坑

第38号土坑（第76図）

位置と確認状況　調査区東部のC４f8区に位置する。

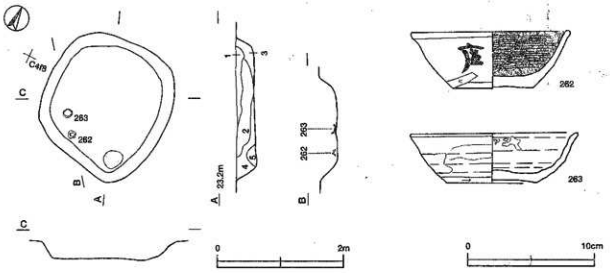
規模と形状　長軸2.06m，短軸1.98mの隅丸方形を呈し，深さ29cmである。本跡の長軸方向はN－４°－Eである。壁は緩く外傾して立ち上がり，底面はほぼ平坦である。

覆土　ロームブロックを含む暗褐色や黒褐色な腐植土からなる。モザイク状の堆積をした人為堆積と考えられる。

土層解説
1　黒褐色　ロームブロック中量，焼土ブロック・炭化物微量
2　黒褐色　ロームブロック中量，炭化物微量
3　黒褐色　ロームブロック少量
4　極暗褐色　ロームブロック少量，焼土ブロック微量
5　暗褐色　ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化物微量

遺物出土状況　土師器坏１，須恵器坏１，混入と考えられる土師器片６点，礫３点が出土している。また，南東コーナーには焼土ブロックが検出されている。262は南西コーナー床面から逆位で出土し，263は同じく正位で出土している。

所見　本跡は，形状や覆土の状況，また遺物の出土状況から墓壙と考えられ，時期は９世紀後半と考えられる。調査区内には，本跡と同時期と考えられる遺構は確認されていない。



第76図　第38号土坑・出土遺物実測図

第38号土坑出土遺物観察表（第76図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
262	土師器	坏	12.2	4.6	6.4	石英・長石	にぶい橙	普通	底面ヘラ削り，内面黒色処理	床面	95%,体部外面墨書「寅」，PL.18
263	須恵器	坏	13.0	4.0	7.1	石英・長石・雲母	暗	普通	底面ヘラ削り	床面	98%,出土者,PL.18

4　その他の時代の遺構と遺物

今回の調査で年代が明らかではない遺構として，溝跡1条，土坑66基，ピット群1か所を確認した。以下，確認した遺構と出土した遺物について記載する。

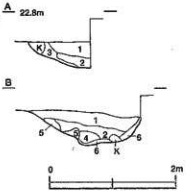
（1）溝　跡

第1号溝跡（第77図・付図）

位置と確認状況　中央部の調査区境界に沿い東西方向に延び，C3i0～C3j4区にわたっているが，南側半分が調査区域外となっている。

重複関係　東部のC3i8区で第73号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　確認面付近で幅1.8mほど，長さ22m以上をはかり，深さは0.5mほどである。東端は緩く外傾して立ち上がっているが，西端は南西方向に連続している。C3j6区付近で両壁が確認され，断面は椀状を呈している。



第77図　第1号溝跡土層実測図

覆土　黒褐色や暗褐色を呈する腐植土からなり，ブロック状の堆積を示す人為堆積と考えられる。

土層解説
1　極暗褐色　ロームブロック・焼土粒子・炭化物微量
2　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量
3　黒　褐　色　ローム粒子少量
4　暗　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
5　褐　　色　ローム粒子中量，炭化粒子微量
6　褐　　色　ローム粒子多量

所見　最近の地籍図の範囲と位置がほぼ一致していることから，境界区画の役割を持ち，根切り溝の性格を持つと推定される。遺物は出土していない。

（2）土　坑

時期不明の土坑66基が確認された。これらについては代表的なものについて記述し，ほかのものは一覧表で記載する。

第4・5，18～21，23～26号土坑（第78図）

これらは，調査区中央部の南寄りに位置する径1mほどの円形の土坑であり，人為堆積を示す覆土の状況も類似している。遺物が出土しておらず時期や性格について明確には断定できないが，形態や覆土の状況から中世以降の墓壙の可能性が考えられる。これらについては，一括して平面図及び土層断面図を示す。

第4号土坑土層解説
1　暗 褐 色　ロームブロック少量
2　褐　　色　ロームブロック中量

第5号土坑土層解説
1　暗 褐 色　ロームブロック少量
2　黒 褐 色　ロームブロック少量
3　暗 褐 色　ロームブロック少量

第18号土坑土層解説
1　黒 褐 色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
2　暗 褐 色　ロームブロック少量，炭化粒子・焼土粒子微量

第19号土坑土層解説
1　黒 褐 色　ロームブロック少量，炭化物微量
2　暗 褐 色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
3　極暗褐色　ロームブロック少量，炭化粒子微量

第20号土坑土層解説
1　黒 褐 色　ロームブロック少量，炭化物微量
2　極暗褐色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
3　暗 褐 色　ロームブロック少量，炭化物微量

第21号土坑土層解説
1　黒 褐 色　ローム粒子・炭化粒子微量
2　暗 褐 色　ロームブロック中量，炭化物微量
3　褐　　色　ローム粒子中量

第23号土坑土層解説

1　黒　褐　色　炭化物少量，ロームブロック微量
2　極暗褐色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
3　暗　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
4　暗　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量

第24号土坑土層解説

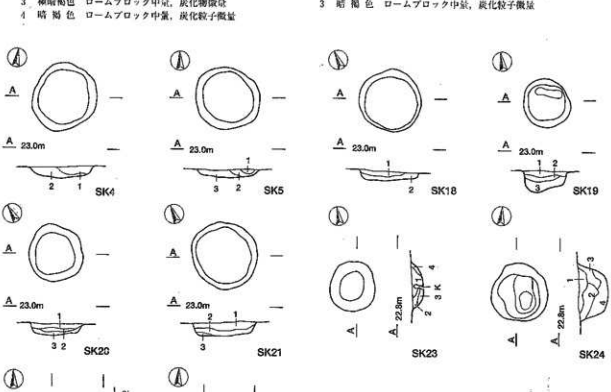
1　黒　褐　色　ロームブロック・炭化粒子少量
2　暗　褐　色　ロームブロック中量，炭化物微量
3　極暗褐色　ロームブロック中量，炭化物微量
4　暗　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量

第25号土坑土層解説

1　極暗褐色　ロームブロック少量，炭化物微量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
3　暗　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量

第26号土坑土層解説

1　極暗褐色　ロームブロック中量，炭化物微量
2　暗　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量
3　暗　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量



第78図　第4・5，18～21，23～26号土坑実測図

第33号土坑（第79図）

位置と確認状況　調査区中央部のC4f3区に位置する。

規模と形状　長軸2.22m，短軸2.07mの長方形で，深さ15cmである。壁は緩やかに外傾して立ち上がり，底面は，ほぼ平坦であり，小さなピットが4か所認められる。

覆土　ロームブロックを含む黒褐色の腐植土からなる。レンズ状の堆積を示す自然堆積である。

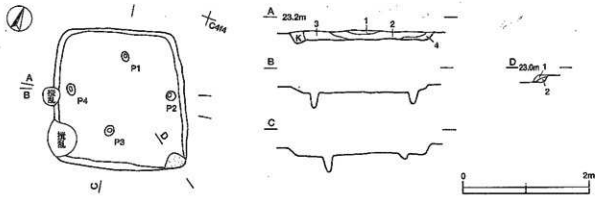
土層解説

1　黒褐色　ロームブロック少量，炭化物少量
2　黒褐色　ロームブロック少量，炭化物微量
3　黒褐色　ロームブロック少量，炭化物少量
4　暗褐色　ロームブロック少量，炭化粒子微量

遺物出土状況　南東コーナーに焼土ブロックが検出されているが，遺物は出土していない。

焼土ブロック土層解説
1　暗褐色　ローム粒子・焼土ブロック・炭化物少量
2　褐　色　ローム粒子中量

所見　時期や性格については不明であり，遺物は出土していない。

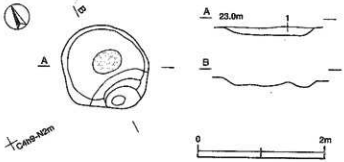


第79図　第33号土坑実測図

第53号土坑（第80図）

位置と確認状況　調査区東部のC４g9区に位置し，周囲には後述するピット群が確認されている。

規模と形状　長径1.45m，短径1.35mほどの円形で，深さは11cmである。底面には凹凸が見られ，中心部付近がやや赤変している。



覆土　１層からなり，堆積状況は不明確であるが人為的な堆積と考えられる。

土層解説
1　暗褐色　ローム粒子中量，焼土ブロック・炭化物少量

所見　形態から炉穴と考えられる。遺物は出土していない。

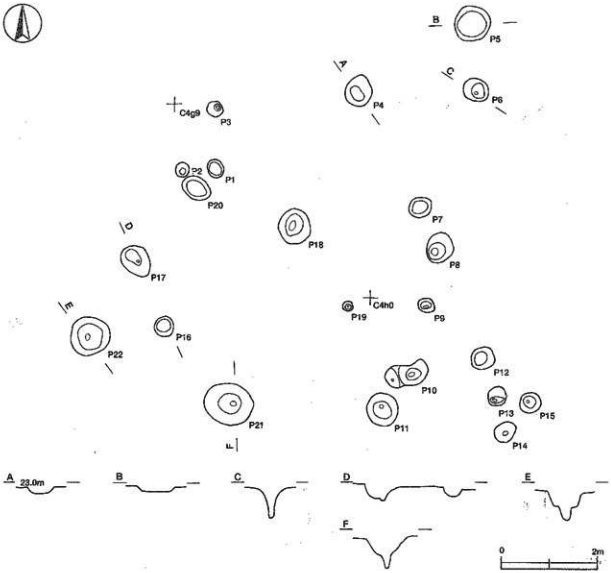
第80図　第53号土坑実測図

（３）ピット群（第81図）

位置と確認状況　調査区東部のC４g9，C４h9，C４g0，C４h0区などを含む約16m四方に22か所のピット（P1～P22）が集中して確認されている。ピット群の周囲には確認面において縄文土器片（第83図，TP２～４・８）が数点出土し，周囲には第１～４号陥し穴や炉穴と考えられる第53号土坑が確認されている。

規模と形状　多くのものは径40～70cmの円形または楕円形で，最も小さいものは径20cm，大きいものは径104cmであり，深さは８～49cmほどである。

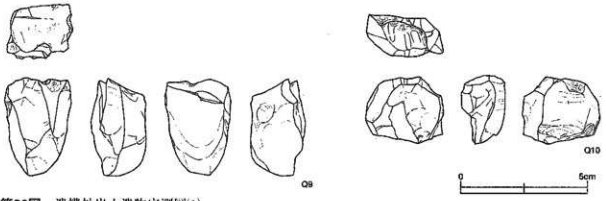
所見　ピット群の範囲が広く，並び方に規則性が認められない。また，ピット中からは遺物は出土していない。遺構確認面から出土した縄文土器片は早期後半の鵜ヶ島台式が多いが，直接的に遺構と遺物との結びつきはなく，ピット群は時期的には新しいものと考えられる。



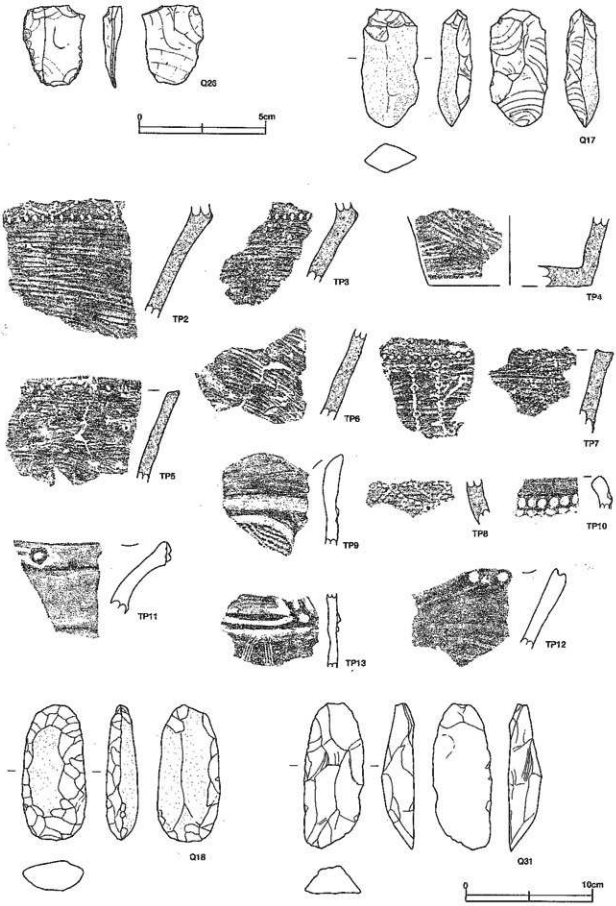
第81図　ピット群実測図

5　遺構外出土遺物

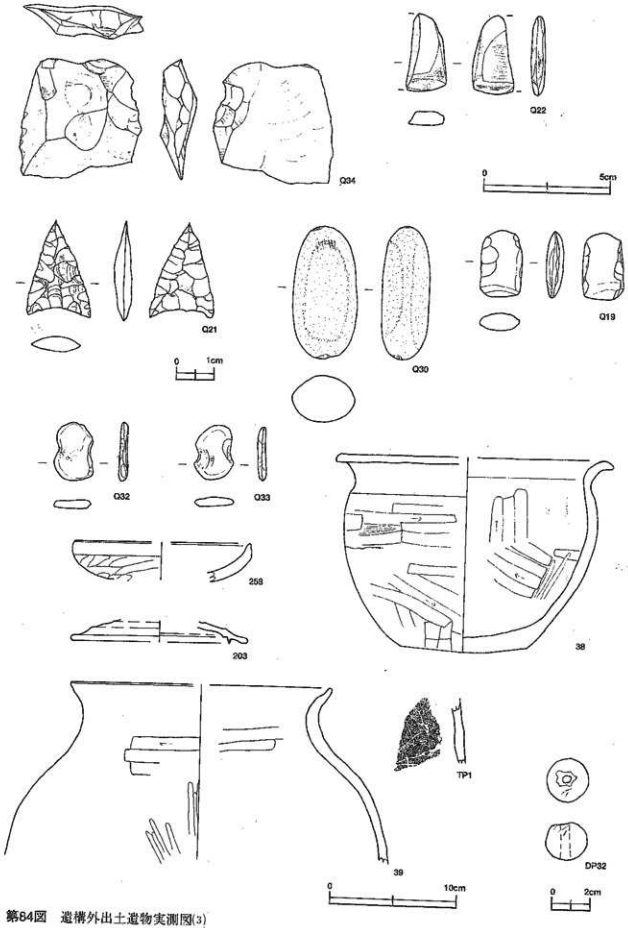
今回の調査で，遺構に伴わない土器・石器などが出土している。これらの出土遺物について実測図および観察表を掲載する。



第82図　遺構外出土遺物実測図(1)



第83図　遺構外出土遺物実測図(2)



第64図　遺構外出土遺物実測図(3)

遺構外出土遺物観察表（第82～84図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石材	出土位置	特徴	備考
Q 9	石核	3.7	2.6	2.2	25.5	チャート	西部、表土	打面を上に設定し、細かな剥離片が剥離された石核	PL.20
Q10	石核	2.7	3.0	1.8	15.6	頁岩	西部、表土	上下から剥離が行われた石核	PL.20
Q17	石核	9.4	4.5	2.6	111.1	安山岩	西部、表土	表面の上端が潰されも、実にも大きな剥離が行われている。	PL.20
Q26	スクレイパー	3.2	2.4	0.7	4.4	玉髓	中央部、表土	やや縦長の剥片を素材として、左側縁と平端部、右側縁に微かな調整を加えて刃部を作り出している。	PL.20

番号	時期	形式	器形および文様の特徴	出土位置	備考
TP1-4	縄文時代早期後半	鵜ヶ島台式	TP2・3・6～8は頂部や口縁部片である。無底で僅く屈曲し、上部は円形刺突文・押引文と2段階字状モチーフが描かれ(TP2・8)、下部は貝殻条痕文が施され、内面にも施される(TP5・7)。TP6は胴部片、TP4は平底深鉢の底部片である。繊維。	遺構確認面(TP2・4・8) 東区、表土(TP5・6・7) 北部、表土(TP3)	PL.20
TP1-9	縄文時代中期後半	加曽利E式	TP9・10とも器体の口縁部片である。TP9は沈線による区画内に結節浮文LRが施され、TP10は刺突文が施される。	東部、表土(TP9) 遺構確認面(TP10)	PL.20
TP1-2	縄文時代後期初頭	堀之内式	TP11・12は口縁部片、TP13は胴部片である。TP11は半截竹管による沈線と円形の隆帯文、TP12は口縁部に刺突文が施される。TP13は中央に沈線・刺突文を伴う帯状と隆帯文が施される。	遺構確認面(TP11・12) 中央部(TP13)	PL.20

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石材	出土位置	特徴	備考
Q18	打製石斧	10.8	4.9	2.9	174.7	ヒン岩	中央部、表土	下端に表・裏面から剥離によって刃部が作られている。表・裏とも剥離を残し、全体形に調整が加えられている。	
Q19	磨製石斧	5.3	3.1	1.2	35.9	絶縁岩	中央部、表土	全面研磨された小形の磨製石斧	
Q21	石鏃	2.5	1.7	0.4	1.1	チャート	西部、表土	凹基無茎鏃	
Q22	磨製石斧	3.1	1.6	0.5	3.8	粘板岩	遺構確認面	全面研磨、左側を破損した小形の磨製石斧	
Q30	磨石	10.4	5.1	3.6	294.0	砂岩	遺構確認面	上・下端に敲打痕、表面に擦痕	
Q31	打製石斧	11.7	4.7	2.1	128.6	安山岩	遺構確認面	表面は節理面を残し、裏面は下・側方からの大きな剥離によって作られている。	
Q32	石錘	4.7	3.0	0.6	12.4	安山岩	遺構確認面	両側縁抉り、左側縁擦痕	PL.20
Q33	石錘	4.3	3.1	0.7	12.6	安山岩	遺構確認面	両側縁抉り、左側縁擦痕	PL.20
Q34	二次加工を有する剥片	4.7	4.6	1.4	26.7	凝灰岩	遺構確認面	右側縁の表面に剥離が加えられており、左側縁の表面にも少こはれ状の細かな調整が見られる。	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地紋	手法の特徴	出土位置	備考
38	土師器	壺	[21.0]	15.4	10.0	石英・長石	にぶい橙	普通	底面ヘラ削り	SI 7 表土中	70%、PL.19
39	土師器	壺	[20.4]	(13.8)	—	石英・長石	にぶい黄橙	普通	体部外面ヘラ磨き	SI 7 覆土中	20%、PL.19
203	須恵器	壺	[13.8]	(1.7)	—	長石	黄灰	普通	口縁部内・外面ロクロナデ	SI 23覆土中	5%
258	土師器	坏	[13.8]	(3.0)	—	石英・長石	橙	普通	体部外面ヘラ削り	中央部、表土	20%
TP1	土師器	高坏	—	(5.2)	—	石英	橙	普通	外面荒削り、杯部土器今	西部、表土	5%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重さ	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP32	環状土錘	2.2	1.9	0.4	9.1	—	にぶい橙	ナデ、穿孔部付近擦痕	遺構確認面	100%

第4節　まとめ

1　はじめに

谷田部漆遺跡では，縄文時代の陥し穴4基，古墳時代中期の竪穴住居跡24軒，同後期の竪穴住居跡2軒，土坑4基，平安時代の墓壙1基，時代不明の土坑66基，溝跡1条，ピット群1か所が調査され，古墳時代中期の集落跡を主体とする複合遺跡であることが確認された。古墳時代中期以外では，前述のように7世紀前半の住居跡2軒のほか，9世紀後半の墓壙も確認されていることから，調査区周辺には古墳時代中期以降も，断続的に集落などが営まれていたと考えられる。

茨城県における古墳時代中期の集落跡の検出例は前・後期のものに比べて少なく，当遺跡は遺構や遺物の遺存状態が良好で，今後は重要な資料のひとつになると考えられる。また，中期の遺構は5世紀前半（第1期）と5世紀後半（第2期）の2期に細分され，第2期に相当する第1号土坑からは祭祀行為に関連して埋納されたと考えられる高坏類などが出土している。以下，本節では古墳時代中期の集落の変遷と第1号土坑に関する若干の考察を行う。

2　古墳時代中期における集落の変遷

(1) 第1期（5世紀前半）

集落の様相（第85図　第1期の遺構配置）

第1期の遺構は，第1～5・7～18号・第20・21・24号住居跡の20軒の住居跡と第27号土坑が分類され，当遺跡において遺構数の最も多い時期である。竪穴住居跡は調査区東部と中央部に検出され，隣接する住居間の間隔は5～10mほどでやや密集している。しかし，重複するものは認められず，比較的短期間で廃棄されたものと考えられる。また，調査区西部には遺構の分布が見られず，地形の状況から集落は南東方向の台地縁辺沿いに延びていた可能性がある。

当遺跡は，西に西谷田川を望む台地の縁辺部に立地しており，集落の生産基盤は西谷田川の低地における水田耕作や台地部の畑作が考えられる。第12号住居跡の貯蔵穴から出土した種籾と推定される炭化米は，これを支持する貴重な資料である。

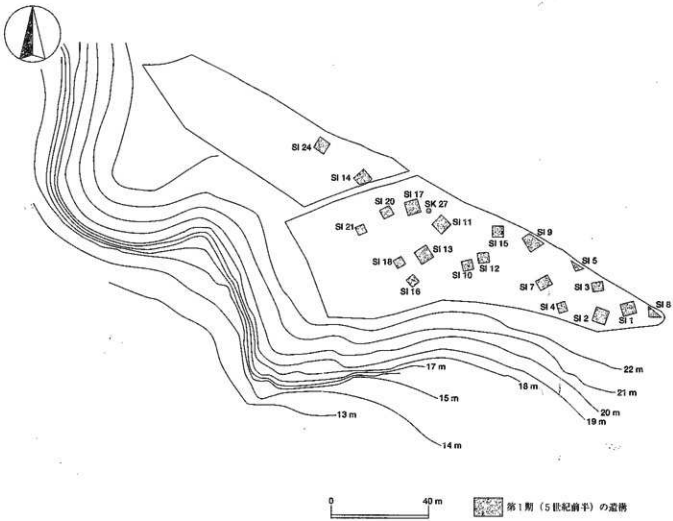
竪穴住居跡の平面形は，方形のものが多く，炉，出入り口施設，貯蔵穴を持つ。炉は，出入り口部より奥側に寄った位置に設けられている。貯蔵穴は，出入り口部側のコーナー部に多くが設けられ，左側10，右側5，両側2のほか，1軒は貯蔵穴が無く，ほかの2軒は不明である。住居跡は20軒中12軒（60%）が焼失家屋と確認され，第12号住居跡を除いて床面の硬化度が弱く，使用頻度は低かったと推定される。

出土遺物

遺物は土師器の高坏・坩・甕・甑を主体とし，坏・椀類は少なく，須恵器は出土していない。時期については櫻村他編年の第Ⅰ期～第Ⅱ期[1]に相当すると考えられる。第17号住居跡は，南西部を中心に高坏8・坩9・甕3などが一括出土しており，土器類の保管状況や器種構成を考える上で重要な資料となっている。この住居跡出土の高坏は，脚部が中空で裾部が「ハ」の字状に広がるものと，全く広がらないものの二種類に分類され，後者には器高が9～12cmほどの小形のものが含まれる。坩は小形のものが多く，甕は頸部にハケ目整形を残すものが見られる。また，甑は，第3号住居跡出土の甕形で単孔式のものや，第4号住居跡出土の鉢形で単孔式のものの両者が見られる。

第3号住居跡から出土した3点の土製支脚は，炉に据え置き甕などの煮沸具を支えたものである。これらは，

ほぼ完形で出土し，炉における煮沸具の使用方法を示す良好な資料といえる。破損しているが第13号住居跡からも同様なものが出土し，類似する形態のものは前野東遺跡の第75・79号住居跡や，美浦村野中遺跡の第７号住居跡などからも出土している。



第85図　第１期の遺構配置

（２）第２期（５世紀後半）

集落の様相（第86図　第２期の遺構配置）

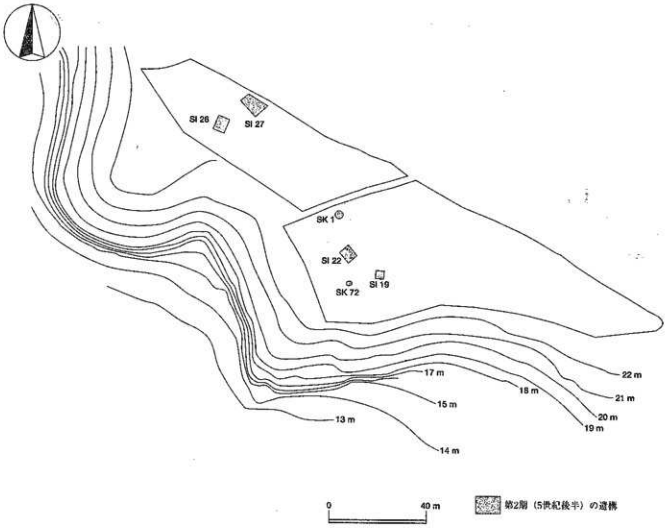
第２期の遺構は，第19・22・26・27号住居跡，第１・72号土坑が該当し，第１期に比べて散在的である。住居跡は第19・22号住居跡が中央部，第26・27号住居跡が西部に位置しており，第１期で遺構が集中していた東部には，第２期の遺構は検出されていない。そのため，第２期集落が，第１期集落跡から北西にやや位置をずらして形成され，この集落は調査区外へも延びているものと考えられる。また，当期住居跡出土の土器の中にはこの地域に見られない形状の他系統的な器形のものが若干見られるが，他地域との交流による搬入品と考えられる。

中央部に確認された第22号住居跡に隣接する第19号住居跡には，炉や柱穴が確認されず生活痕が認められない。そのため住居以外の建物跡と推定される。これは，近接した第22号住居跡に併設された倉庫的な性格を持

つ建物跡の可能性もある。また，西部に確認された第26号住居跡の平面形は長方形を呈し，2か所の炉が付設されている。さらに，第27号住居跡は一辺が8mを超えて調査区内最大の規模を有し，第2期の中心的住居と想定される。第2期では，4軒中3軒が焼失家屋と確認され，第1期のものと同様に床面の硬化度は弱い。

出土遺物

土師器は，坏・椀・高坏・坩・甕・甑などが出土し，坏・椀類の出土が多く，須恵器は共伴していない。これらの時期は，樫村他編年の第Ⅲ期に相当する。坏・椀類は，体部が丸みを有した平底のものが多く，高坏は第1期と比べて目立った変化はないが，223や234は棒状の短い脚部に皿状の坏部を持つ特異な形態を示している。また，坩は大形のものが出土し，甕には目立った変化は認められないが，壺（169）のような直立した口縁を持つものもある。甑は鉢形を呈するものが多いが，甕形で穿孔部が大きなもの（200）も出土している。高坏の器形では，223・234の形状が特異であり，この類例は県内では見られず，ほかの地域でも探すことはできなかった。器形的に特徴的であり，他地域からの影響を受けたものと考えざるを得ない。



第86図　第2期の遺構配置

3　第１号土坑の出土遺物

調査区中央部に確認された第１号土坑は円筒形の形態を有し，坏４，椀１，高坏17，壷１，甕６，甑１など多数の土器類のほか，鉄鏃２，砥石（軽石製）が出土している。土器の様相から５世紀後半（第２期）の遺構であり，特異な器形の高坏（234）の出土から，第27号住居跡と密接に関連するものと考えられる。これらの遺物は，中層付近まで土坑を埋め戻した後に一括投棄された様相を呈し，祭祀行為の終了とともに埋納されたものと考えられる。

出土状況を詳細に見ていくと，これらの土器類には故意に破砕された様子は認められず，高坏はほぼ完形のもの（233・234）が出土している。また，甕（251～253）には，外面に炭化物が付着し，日常的に煮炊きに使用されていたものが出土している。土器類は上層と中層，鉄鏃は土器が含まれる中層のやや下方から出土し，砥石（軽石製）は上層から出土している。

第１期の第17号住居跡から出土した高坏の出土量（９点）と比較すると，第１号土坑出土の高坏の量は，「イエ」の単位と考えるよりも，「ムラ」のような地域の共同体を単位とした祭祀儀礼に関連した供献土器の一部とした方が妥当と考えられる。「ムラ」の祭祀儀礼については，農耕・治水・疫病退散等の祈願があげられる[2]が，その内容を示す特徴的な遺物が出土していないため特定は難しい。地域共同体の祭祀では，それを執り行う首長の存在が想定され，出土遺物に類似性が見られる第27号住居跡は，最大の規模を持つことからも首長の居館であった可能性がある。

4　まとめ

谷田部遺跡における古墳時代中期の遺構は，５世紀前半（第１期），５世紀後半（第２期）に区分される。遺構の分布状況や出土遺物から，集落はその地域に基盤を持つ同族集団によって５世紀後半（第２期）に第１期とやや地区をずらした新集落が形成されたものと考えられる。その生活基盤は西谷田川流域の水田と想定されるが，全体の集落構造については両期とも調査区外に延びるため把握されていない。

註

1）　櫻村宣行・土生朗治・白石真理　「茨城県における５世紀の動向」『東国土器研究』第５号　東国土器研究会　1999年

2）　石野博信ほか編　「古墳時代の研究３　生活と祭祀」　雄山閣　1991年

表1　住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 長軸×短軸 (m)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	備考 (時期)
								柱穴	ベッド状遺構	ピット	カマド	炉			
1	C 6 j1	N-17°-W	長方形	5.95 × 4.90	35～45	平坦	全周	3	1	—	炉	1	自然	土師器(高坏・埦・壺・甕・甑),須恵土師,石玉	5世紀前半
2	D 5 a8	N-68°-W	方　形	6.10 × 5.77	35～40	平坦	一部	4	1	—	炉	1	自然	土師器(高坏・埦・壺・甕),砥石	5世紀前半（廃棄）
3	C 5 g8	N-10°-W	長方形	5.24 × 4.08	20～26	平坦	一部	4	1	6	炉	1	自然	土師器(高坏・埦・壺・甕・甑),土製支脚	5世紀前半（廃棄）
4	C 5 j4	N-70°-E	方　形	4.27 × 4.25	27～35	平坦	一部	4	1	2	炉	1	自然	土師器(高坏・埦・甕・甑),砥石	5世紀前半
5	C 5 e6	(N-26°-W)	方向が出土状態と一致	(4.80)×(2.65)	33	平坦	一部	1	—	—	—	1	自然	土師器(椀・高坏・埦・壺),須恵土師,砥石	5世紀前半（廃棄）
7	C 5 g3	N-26°-W	長方形	6.14 × 5.22	40～50	平坦	一部	4	1	3	炉	1	自然	土師器(高坏・壺・甕・ミニチュア土器),滑石土錘	5世紀前半（廃棄）
8	C 6 j4	(N- 6°-W)	方向が出土状態と一致	(4.30)×(4.20)	32～35	平坦	—	1	1	1	—	—	自然	土師器(坏・高坏・埦・壺・甕)	[5世紀前半]
9	C 5 c1	N-30°-W	方　形	7.07 × 7.00	35～43	平坦	一部	3	2	1	炉	1	自然	土師器(高坏・埦・壺・甕・ミニチュア土器),須恵土師,石玉	5世紀前半（廃棄）
10	C 4 e5	N-15°-W	方　形	4.15 × 4.10	15～20	平坦	一部	4	—	—	炉	1	自然	土師器(高坏・埦・甕)	5世紀前半
11	C 4 a2	N-43°-W	方　形	6.16 × 6.13	18～30	平坦	全周	4	2	5	炉	2	自然	土師器(椀・高坏・埦・壺・甕・甑)	5世紀前半

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 長軸×短軸 (m)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設 主柱	内ピット	外ピット	炉・ふど	貯蔵穴	覆土	主な出土遺物	備考 (時期)
12	C 4 d6	N-10°-W	方 形	4.85 × 4.70	15~23	平坦	—	4	1	17	炉	1	人為	土師器(甕(坏・器台・埦・壺・鉢)須恵土器,須恵器造品,管石	5世紀前半 (廃失)
13	C 3 d0	N-35°-W	方 形	6.60 × 6.44	40~49	平坦	全周	4	2	5	炉	1	自然	土師器(甕(坏・壺・手捏土器・ミニチュア土器),須恵器(杯),鉄刀	5世紀前半 (廃失)
14	B 3 f3	N-47°-W	方 形	5.17 × 5.15	41~43	平坦	一部	3	…	1	炉	—	自然	土師器(高坏・器台・埦),不明鉄製品	5世紀前半 (廃失)
15	C 4 b8	N- 3°-W	方 形	4.35 × 4.18	4~23	平坦	全周	4	1	—	炉	2	自然	土師器(高坏・器台・埦・壺・甕・鍋),須恵器造品,滑石,管石	5世紀前半
16	C 3 g9	N-42°-W	方 形	4.33 × 4.16	12~25	平坦	一部	4	—	4	炉	1	自然	土師器(甕・高坏・埦・鉢・壺・ミニチュア土器),須恵土師器,管石	5世紀前半 (廃失)
17	B 3 i9	N-18°-W	方 形	6.30 × 6.29	23~30	平坦	—	4	2	4	炉	1	自然	土師器(甕・高坏・埦・鉢・壺・ミニチュア土器),須恵土師器,管石	5世紀前半 (廃失)
18	C 3 e7	N-31°-W	方 形	4.40 × 4.17	30~50	平坦	—	3	1	2	炉	1	人為	土師器(高坏・埦・鉢・壺・甕),須恵土師	5世紀前半 (廃失)
19	C 3 f6	N-14°-E	方 形	4.32 × 4.30	32~40	平坦	全周	…	—	—	—	1	人為	土師器(甕・高坏・埦・壺・鉢・甑)	5世紀後半
20	B 3 i6	N-27°-W	長方形	5.00 × 4.37	9~14	平坦	全周	4	1	1	炉2	1	人為	土師器(高坏・埦・壺・鉢)	5世紀後半
21	C 3 a3	N-20°-W	方 形	4.15 × 4.05	8~19	平坦	一部	4	1	2	炉	—	自然	土師器(高坏・埦・鉢)	5世紀前半
22	C 3 e2	N-40°-W	方 形	5.33 × 5.13	46~50	平坦	一部	4	1	2	炉	1	人為	土師器(坏・高坏・埦・鉢・甑),須恵提造品,滑石,不明鉄製品	5世紀後半 (廃失)
23	B 2 d7	N-45°-W	長方形	4.12 × 3.65	35~45	平坦	—	4	1	…	竈	—	自然	土師器(坏・鉢)	7世紀前半 (廃失)
24	B 2 e9	N-53°-W	方 形	5.45 × 5.40	30~39	平坦	一部	4	1	…	炉	1	自然	土師器(高坏・埦・鉢),須恵提造品	5世紀前半 (廃失)
25	B 2 b2	N-35°-W	長方形	3.91 × 3.55	45~55	平坦	—	—	1	—	竈	—	自然	土師器(坏・鉢)	7世紀前半 (廃失)
26	A 1 j9	N-71°-W	長方形	6.38 × 5.24	34~43	平坦	一部	4	1	3	炉2	1	自然	土師器(甕・高坏・鉢・甑)	5世紀後半 (廃失)
27	A 2 h2	N-38°-W	不整方形(北辺欠)	8.66 × (7.60)	45~50	平坦	一部	3	1	3	炉	1	自然	土師器(坏・椀・高坏・埦・鉢・甑)	5世紀後半 (廃失)

表2　土坑一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 長径(軸)×短径(軸) (m)	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 (時期)
1	B 3 i1	—	円 形	1.86 × 1.72	63	直立	平坦	人為	土師器(坏・高坏・埦・甑・甕),滑石,鉄鏃	5世紀後半
4	C 3 h9	—	円 形	1.09 × 1.00	16	緩斜	平坦	人為		墓壙か
5	C 3 h8	—	円 形	1.07 × 0.97	12	緩斜	平坦	人為		墓壙か
6	C 3 a1	N- 2°-W	楕円形	1.60 × 1.13	18	緩斜	平坦	人為	縄文土器片,土師器片	
7	B 3 f2	N-32°-W	楕円形	1.08 × 0.68	25	緩斜	平坦	自然	縄文土器片,土師器片	
8	B 3 j2	N-62°-E	楕円形	1.07 × 0.81	23	緩斜	平坦	自然	土師器片	
9	C 3 a2	N-87°-W	楕円形	0.96 × 0.66	20	緩斜	凹状	自然		
10	C 3 b5	N-25°-W	楕円形	1.60 × 1.06	26	外傾	平坦	自然		
11	C 2 c0	N-13°-E	楕円形	0.99 × 0.75	20	緩斜	平坦	自然		
12	C 2 c0	N-41°-E	長方形	1.23 × 0.99	14	外傾	平坦	自然		
13	C 3 c7	N-20°-W	楕円形	3.85 × 1.24	46	外傾	平坦	自然	土師器片	
14	C 3 b8	N-75°-E	楕円形	1.58 × 1.15	22	外傾	平坦	人為	縄文土器片,土師器片	
15	C 3 b9	N-57°-W	楕円形	0.92 × 0.68	21	緩斜	凹状	人為		
16	C 4 d4	N-44°-W	楕円形	1.17 × 0.80	21	緩斜	凹状	人為		
17	C 3 b8	N-75°-E	楕円形	1.47 × 1.24	16	緩斜	平坦	人為	土師器片	
18	C 3 b7	—	円 形	1.00 × 0.96	15	緩斜	平坦	自然		墓壙か
19	C 3 h7	—	円 形	0.80 × 0.72	43	直立	凹凸	人為		墓壙か
20	C 3 g7	—	円 形	0.91 × 0.87	20	外傾	平坦	人為		墓壙か
21	C 3 g6	—	円 形	1.06 × 1.01	22	外傾	平坦	人為	土師器片,鏃	墓壙か
22	C 3 b6	N-62°-W	楕円形	2.33 × 1.45	34	外傾	平坦	自然	土師器片	
23	C 3 h6	—	円 形	0.80 × 0.70	23	緩斜	凹状	人為		墓壙か
24	C 3 h6	—	円 形	0.93 × 0.90	45	外傾	凹凸	人為		墓壙か
25	C 3 h5	—	円 形	0.98 × 0.88	37	外傾	平坦	人為		墓壙か
26	C 3 h5	—	円 形	0.72 × 0.66	34	外傾	平坦	人為		墓壙か
27	B 3 i0	—	円 形	1.76 × 1.65	30	緩斜	平坦	人為	土師器(高坏・小形壺・小形甕),球状土錘	5世紀前半
28	B 4 i1	—	円 形	0.78 × 0.65	12	緩斜	平坦	自然		
29	B 4 i1	N-50°-E	楕円形	0.80 × 0.61	108	直立	平坦	人為		

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 長径(軸)×短径(軸) (m)	規模 深さ (cm)	壁面	底面	埋土	主な出土遺物	備考 (時期)
30	B 4 i1	—	円形	1.24 × 1.04	31	外傾	皿状	人為		
31	B 4 h1	N-50°-W	楕円形	1.56 × 1.02	44	緩斜	平坦	自然	土師器片	古墳時代中期
32	B 4 h1	N-76°-W	楕円形	1.12 × 0.88	24	緩斜	凹凸	自然	土師器片,礫	
33	C 4 f3	N-20°-W	長方形	2.22 × 2.07	15	緩斜	平坦	自然		
34	B 3 j4	—	円形	0.80 × 0.71	17	緩斜	皿状	人為		底面ピット有
35	B 3 j4	N- 9°-W	楕円形	1.71 × 1.20	14	緩斜	平坦	人為		
36	C 4 b3	—	円形	0.73 × 0.61	31	外傾	皿状	人為		
37	C 4 f7	—	円形	1.45 × 1.28	25	緩斜	平坦	人為		
38	C 4 f8	N- 4°-E	隅丸方形	2.06 × 1.98	29	緩斜	平坦	人為	土師器(坏),須恵器(坏),礫	墨板(9世紀後半)
39	C 4 f9	N-58°-W	楕円形	2.35 × 0.98	17	緩斜	平坦	自然	縄文土器片(鵜ヶ島台式),土師器片	
40	C 5 h1	—	円形	0.70 × 0.60	30	緩斜	皿状	自然		
41	C 5 e1	—	円形	0.83 × 0.70	13	緩斜	皿状	自然	縄文土器片(鵜ヶ島台式)	
42	C 5 e1	—	円形	0.75 × 0.70	20	緩斜	皿状	自然		
43	C 5 e1	N-57°-W	楕円形	1.67 × 0.88	40	緩斜	皿状	人為	縄文土器片	
44	C 5 g1	N-60°-W	楕円形	1.04 × 0.79	13	緩斜	皿状	人為		
45	B 4 g1	N-62°-W	楕円形	1.04 × 0.79	13	緩斜	平坦	自然		
46	B 4 h1	—	円形	0.66 × 0.57	8	緩斜	平坦	自然		
47	B 3 e6	N-27°-E	楕円形	1.35 × 0.93	59	外傾	平坦	人為		近代
48	C 5 h2	N- 0°-E	楕円形	2.62 × 1.94	145	直立	皿状	自然	縄文土器(加曽利B1式)	第1号溝,穴(縄文時代)
50	C 5 f1	N-27°-E	隅丸長方形	2.76 × 1.60	68	外傾	平坦	人為		
51	C 5 f2	N-24°-W	不整楕円形	1.96 × 1.36	32	緩斜	凹凸	人為	縄文土器片,土師器片	
52	C 5 e5	N-40°-W	楕円形	1.55 × 1.09	34	外傾	段状	自然		
53	C 4 g9	—	円形	1.45 × 1.35	11	緩斜	凹凸	人為		底面中央角穴?
54	C 4 h2	—	円形	1.00 × 0.95	17	緩斜	平坦	人為		
55	C 4 h4	N-62°-E	楕円形	0.82 × 0.56	16	緩斜	皿状	人為		第2号溝,穴(縄文時代)
56	C 4 i0	N-78°-W	楕円形	2.20 × 1.36	98	外傾	皿状	自然	礫	
58	C 4 h9	N-87°-W	楕円形	1.86 × 0.84	8	緩斜	皿状	自然		
60	C 4 f9	—	円形	0.69 × 0.61	15	緩斜	凹凸	自然		
61	C 5 i2	—	円形	0.75 × 0.75	28	緩斜	平坦	人為		
63	B 4 i1	N-24°-E	楕円形	1.20 × 0.99	99	外傾	平坦	人為	土師器片	
64	C 5 i1	N-43°-E	楕円形	(2.02)× 1.24	144	外傾	平坦	自然		第3号溝,穴(縄文時代)
65	C 5 i1	N-33°-W	楕円形	2.71 × 1.62	106	緩斜	平坦	人為		第4号溝,穴(縄文時代)
66	C 5 g7	N-45°-W	円形	(1.15)× 1.03	30	緩斜	皿状	人為		
67	C 5 j2	—	円形	0.63 × 0.62	19	緩斜	平坦	自然		
68	C 5 i3	N-82°-W	楕円形	2.80 × 0.90	13	緩斜	平坦	自然		
69	C 3 f0	N-61°-W	楕円形	0.99 × 0.61	5	緩斜	平坦	自然	土師器片	
70	C 3 f0	—	円形	1.30 × 1.24	47	外傾	平坦	人為	縄文土器片,土師器片,礫	
71	C 3 f0	—	円形	1.11 × 0.95	31	緩斜	凹凸	自然		
72	C 3 g2	N-40°-W	隅丸方形	1.96 × 1.94	42	外傾	平坦	人為	土師器(坏・椀・埦),縄文土器片,礫	5世紀後半
73	C 3 i8	N-14°-W	[楕円形]	[1.46]× 1.09	75	緩斜	平坦	自然		
74	C 3 d1	N-26°-W	方形	2.56 × 2.48	14	外傾	平坦	人為	土師器片	
75	C 5 f1	—	円形	1.05 × 0.94	29	外傾	平坦	人為		
76	C 4 c0	N-65°-E	楕円形	1.03 × 0.82	27	外傾	平坦	人為		
77	C 4 d0	—	円形	0.60 × 0.55	26	緩斜	段状	自然		
78	C 5 f7	N-45°-W	不整楕円形	0.94 × 0.52	45	外傾	平坦	自然		
81	C 3 i1	N-67°-E	長方形	2.43 × 1.90	15	緩斜	平坦	人為	縄文土器片	
82	C 3 g5	N-15°-W	楕円形	1.41 × 0.92	42	外傾	凹凸	人為		
83	A 2 h2	N-46°-E	楕円形	1.50 × 1.07	55	緩斜	凹凸	人為		

付章　自然科学分析

『炭化材樹種同定』

パリノ・サーヴェイ株式会社

〈目次〉

はじめに …… P.1
1　島名前野東遺跡 …… P.1
（1）試料 …… P.1
（2）方法 …… P.1
（3）結果 …… P.1
（4）考察 …… P.1
引用文献 …… P.2
2　島名境松遺跡 …… P.3
（1）試料 …… P.3
（2）方法 …… P.3
（3）結果 …… P.3
（4）考察 …… P.3
引用文献 …… P.4
3　谷田部漆遺跡 …… P.4
（1）試料 …… P.4
（2）方法 …… P.4
（3）結果 …… P.4
（4）考察 …… P.5
引用文献 …… P.5

島名前野東遺跡他から出土した炭化材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

島名前野東遺跡・島名境松遺跡・谷田部漆遺跡では、5世紀～6世紀の住居跡が検出されている。これらの住居跡の中にはいわゆる火災住居跡も見られ、住居構築材などと考えられる炭化材が出土している。

本報告では、各遺跡の火災住居跡等から出土した炭化材の樹種同定を行い、用材に関する試料を得る。

1．島名前野東遺跡

（1）試料

試料は、5世紀代の火災住居跡（SI-77,79）から出土した炭化材8点と、中世（13世紀）の建物跡から出土した炭化材1点の合計9点である。

（2）方法

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

（3）結果

樹種同定結果を、表1に示す。炭化材は、針葉樹1種類（ヒノキ）と広葉樹2種類（コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属コナラ亜属コナラ節）に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

表1　島名前野東遺跡の樹種同定結果

遺構名	時　期	番号	用　途	樹　種
SI-77	5世紀代	1	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		2	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		3	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		4	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
SI-79	5世紀代	C1	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		C2	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		C3	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		C4	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
ピットB群P8	中世（13世紀）	1	柱材	ヒノキ

・ヒノキ（Chamaecyparis obtusa　(Sieb. et Zucc.) Endlcher）　ヒノキ科ヒノキ属

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が晩材部付近に認められるが、顕著ではない。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に1～3個。放射組織は単列、1～15細胞高。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節（Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Cerris）　ブナ科

環孔材で、孔圏部は3～4列、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち、漸減しながら放射状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節（Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Prinus）　ブナ科

環孔材で、孔圏部は1～2列、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

（4）考察

5世紀代の住居跡から出土した炭化材は、いずれも住居構築材の一部が炭化・残存したものと考えられる。樹種は、落葉広葉樹のクヌギ節とコナラ節であった。住居別に見ると、SI-77ではクヌギ節とコナラ節が混在

しているが、SI-79はコナラ節1種類で構成される。この結果から、住居によって用材が異なっていた可能性がある。しかし、点数が少ないため、断定には至らない。

クヌギ節とコナラ節は、共に関東地方の平地林（雑木林・二次林）の主構成種である（犬井，1992）。現在の植生を考慮すれば、クヌギ節はクヌギ、コナラ節はコナラと考えられる。これまで県内で行った調査では、海岸からやや離れた内陸部に位置する遺跡の住居構築材にクヌギ節・コナラ節が多数認められており（パリノ・サーヴェイ株式会社、1993a，1993b，1993c，1994a，1994b，1997），今回の結果とも調和的である。これらのことを考慮すると、内陸部では遺跡周辺にクヌギ節・コナラ節を主とした平地林が見られ、これらの木材の入手が容易であったことが推定される。また、クヌギ節・コナラ節の木材が高い強度を有していることを考慮すると、木材の強度などを考慮した用材が行われていたことが推定される。

一方、中世の建物跡から出土した炭化材は、柱材の一部が炭化・残存したものと考えられる。樹種は針葉樹のヒノキであった。この結果から、5世紀代の住居とは異なった用材がうかがえる。ヒノキは、現在の遺跡周辺には自生していないことから、離れた地域から木材が運ばれてきた可能性がある。ヒノキが建築材として本格的に利用されはじめたのは、古代の宮殿や寺院からで、日本書記の中にもヒノキの用途として宮殿の柱材を挙げた説話が見られる（西岡・小原，1978；伊東・島地，1979；島地ほか，1980；島地・伊東，1988；伊東，1990）。木理が通直で加工が容易なこと、耐水性・防虫性に優れていること等の材質とともに、最大で径90～150cm、高さ30mになり、大型建築物に必要な大材が得られることも利用された背景として考えられる。

引用文献

犬井　正（1992）関東平野の平地林．162p.古今書院.

伊東隆夫（1990）日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途ＩＩ．木材研究・資料，26，p.91-189，京都大学研究所.

伊東隆夫・島地　謙（1979）古代における建造物柱材の使用樹種．木材研究・資料，14，p.49-76，京都大学木材研究所.

西岡常一・小原二郎（1978）法隆寺を支えた木．NHKブックス318，226p.,日本放送出版協会.

パリノ・サーヴェイ株式会社（1993a）ヤツノ上遺跡出土炭化材同定報告について．茨城県教育財団文化財調査報告第81集「牛久北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ｉ）ヤツノ上遺跡」，p.299-303，住宅・都市整備公団つくば開発局・財団法人茨城県教育財団.

パリノ・サーヴェイ株式会社（1993b）北前遺跡構内出土炭化材の樹種同定・茨城県教育財団文化財調査報告第83集「茨城県自然博物館（仮称）建設用地内埋蔵文化財調査報告書Ｉ　原口遺跡・北前遺跡」，p.309-310，財団法人茨城県教育財団.

パリノ・サーヴェイ株式会社（1993c）中久喜遺跡から出土した炭化材の樹種．茨城県教育財団文化財調査報告第86集「牛久北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅱ）中久喜遺跡」，p.254-257，住宅・都市整備公団つくば開発局・財団法人茨城県教育財団.

パリノ・サーヴェイ株式会社（1994a）西ノ脇遺跡から出土した炭化材の種類．茨城県教育財団文化財調査報告第87集「伊奈・谷和原丘陵部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書１　西ノ脇遺跡・前田村遺跡」，p.278-281，財団法人茨城県教育財団.

パリノ・サーヴェイ株式会社（1994b）高崎貝塚構内出土炭化材の樹種について．茨城県教育財団文化財調査報告第88集「茨城県自然博物館（仮称）建設用地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ　高崎貝塚」，p.318-321，財団法人茨城県教育財団.

パリノ・サーヴェイ株式会社（1997）第５号住居跡出土炭化材の樹種．茨城県教育財団文化財調査報告第137集「阿見東部工業団地造成工事地内埋蔵文化財調査報告書　星合遺跡・中ノ台遺跡」，p.111-112，茨城県・財団法人茨城県教育財団．

島地　謙・伊東隆夫編（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，296p，雄山閣．

島地　謙・伊東隆夫・林　昭三（1980）古代における宮殿・宮衙の使用樹種．古文化財編集委員会編「考古学・美術史の自然科学的研究」，p.249-260，日本学術振興会．

高橋　敦・植木真吾（1994）樹種同定からみた住居構築材の用材選択．PALYNO，２，p.5-18，パリノ・サーヴェイ株式会社．

２．島名境松遺跡

（１）試料

試料は、６世紀中頃の住居跡（SI-17,22,28）から出土した炭化材５点である。

（２）方法

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

（３）結果

樹種同定結果を、表２に示す。炭化材は、落葉広葉樹２種類（コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属コナラ亜属コナラ節）に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を、以下に記す。

表２　島名境松遺跡の樹種同定結果

遺構名	時　期	記号	用　途	樹　種
SI-17	６世紀中頃	イ	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
SI-22	６世紀中頃	ロ	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		ハ	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
SI-28	６世紀中頃	ニ	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		ホ	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節（Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Cerris）　ブナ科

環孔材で、孔圏部は１列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら放射状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節（Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Prinus）　ブナ科

環孔材で、孔圏部は１～２列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

（４）考察

住居構築材の可能性がある炭化材は、落葉広葉樹のクヌギ節とコナラ節であった。住居別に見ると、SI-17とSI-28はクヌギ節，SI-22はコナラ節で構成されており、住居によって種類が異なる。この結果から、住居によって用材が異なっていた可能性があるが、各住居の試料数が少ないため、断定には至らない。

クヌギ節とコナラ節は、関東平野の平地林（雑木林・二次林）の主構成種である（犬井，1992）。現在の植生を考慮すれば、クヌギ節はクヌギ、コナラ節はコナラと考えられる。県内でこれまでに行った調査では、主に内陸部の住居跡から出土した炭化材に多く認められている（パリノ・サーヴェイ株式会社，1993a，1993b，1993c，1994a，1994b，1997）。本遺跡周辺では、島名前野東遺跡でも同様の結果が得られており、今回の結果はこれまで周辺地域の調査結果から得られた傾向とも一致する。住居構築材の用材は、基本的に遺跡周辺の植

生を反映すると考えられている（高橋・植木，1994）。このことから、本遺跡周辺でも、クヌギ節やコナラ節を主とした植生（平地林）が見られ、そこから木材を得ていた可能性がある。また、クヌギ節とコナラ節の木材が強度に優れた材質を有しているから、木材を選択する際に強度などを考慮していたことが推定される。

引用文献

犬井　正（1992）関東平野の平地林．162p.古今書院.

パリノ・サーヴェイ株式会社（1993a）ヤツノ上遺跡出土炭化材同定報告について．茨城県教育財団文化財調査報告第81集「牛久北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅰ）ヤツノ上遺跡」，p.299-303，住宅・都市整備公団つくば開発局・財団法人茨城県教育財団.

パリノ・サーヴェイ株式会社（1993b）北前遺跡遺構内出土炭化材の樹種同定・茨城県教育財団文化財調査報告第83集「茨城県自然博物館（仮称）建設用地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ　原口遺跡・北前遺跡」，p.309-310，財団法人茨城県教育財団.

パリノ・サーヴェイ株式会社（1993c）中久喜遺跡から出土した炭化材の樹種．茨城県教育財団文化財調査報告第86集「牛久北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅱ）中久喜遺跡」，p.254-257，住宅・都市整備公団つくば開発局・財団法人茨城県教育財団.

パリノ・サーヴェイ株式会社（1994a）西ノ脇遺跡から出土した炭化材の種類．茨城県教育財団文化財調査報告第87集「伊奈・谷和原丘陵部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ　西ノ脇遺跡・前田村遺跡」，p.278-281，財団法人茨城県教育財団.

パリノ・サーヴェイ株式会社（1994b）高崎貝塚遺構内出土炭化材の樹種同定について．茨城県教育財団文化財調査報告第88集「茨城県自然博物館（仮称）建設用地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ　高崎貝塚」，p.318-321，財団法人茨城県教育財団.

パリノ・サーヴェイ株式会社（1997）第5号住居跡出土炭化材の樹種．茨城県教育財団文化財調査報告第137集「阿見東部工業団地造成工事地内埋蔵文化財調査報告書　黒合遺跡・中ノ台遺跡」，p.111-112，茨城県・財団法人茨城県教育財団.

高橋　敦・植木真吾（1994）樹種同定からみた住居構築材の用材選択．PALYNO，2，p.5-18，パリノ・サーヴェイ株式会社.

3．谷出部漆遺跡

（1）試料

試料は、5世紀代の住居跡（SI-3，22）から出土した炭化材6点である。

（2）方法

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

（3）結果

樹種同定結果を、表3に示す。炭化材は、落葉広葉樹2種類（コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属コナラ亜属コナラ節）に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を、以下に記す。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節（Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Cerris）　ブナ科

環孔材で、孔圏部は3～4列、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち、漸減しながら放射状に配列する。道

管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節（Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Prinus）　ブナ科

環孔材で、孔圏部は1～2列、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

（4）考察

住居構築材の可能性がある炭化材は、落葉広葉樹のクヌギ節とコナラ節であった。この結果から、住居がこれらの木材を利用して構築されていたことがうかがえる。この結果は、周辺地域でこれまでに行った住居構築材の樹種同定結果（パリノ・サーヴェイ株式会社，1993a，1993b，1993c，1994a，1994b，1997）とも一致する。このことから、同様の用材が、周辺地域で広く見られたことが推定される。

表3　谷田部漆遺跡の樹種同定結果

遺構名	時期	記号	用途	樹種
SI-3	5世紀代	イ	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		ロ	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		ハ	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
SI-22	5世紀代	ニ	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		ホ	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		ヘ	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節

クヌギ節・コナラ節は、関東平野の平地林あるいは雑木林と呼ばれる二次林の主構成種である（犬井，1992）。現在の植生を考慮すれば、クヌギ節はクヌギ、コナラ節はコナラと考えられる。住居構築材が遺跡周辺の植生を反映すると考えられることから（高橋・植木，1994）。本遺跡周辺にはこれらの落葉広葉樹が生育する植生が見られ、そこから木材を得ていたことが推定される。いずれも強度に優れた材質を有することから、住居構築材として強度の高い木材を選択・利用していたことが推定される。

茨城県内では、これまでにも多くの遺跡で住居構築材の樹種同定が行われている。その結果を見ると、主に沿海地周辺では、アカガシ亜属やシイノキ属などの常緑広葉樹が多く利用されている（パリノ・サーヴェイ株式会社，1994c，1998）。一方、内陸部ではクヌギ節・コナラ節等の落葉広葉樹を主とした種類構成が見られる。この違いは、両地域の植生の違いを反映した結果と考えられる。今回行った調査結果も、基本的にこれまで行った結果と一致している。しかし、茨城県の潜在自然植生（宮脇，1986）は、クヌギ節・コナラ節が確認されている地域も、常緑広葉樹のシラカシを極相とするシラカシ群集と考えられている。そのため、沿海地と内陸部の植生の違いは、人為的な影響の違いと考えられる。具体的には、内陸部では、森林の伐採が継続的に行われ、その結果クヌギ節・コナラ節を主とした二次林の景観が続いてきたことが推定される。

引用文献

犬井　正（1992）関東平野の平地林．162p.,古今書院．

宮脇　昭編（1986）日本植生誌　関東．641p.，至文堂．

パリノ・サーヴェイ株式会社（1993a）ヤツノ上遺跡出土炭化材同定報告について．茨城県教育財団文化財調査報告第81集「牛久北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（1）ヤツノ上遺跡」，p.299-303，住宅・都市整備公団つくば開発局・財団法人茨城県教育財団．

パリノ・サーヴェイ株式会社（1993b）北前遺跡遺構内出土炭化材の樹種同定・茨城県教育財団文化財調査報告第83集「茨城県自然博物館（仮称）建設用地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ　原口遺跡・北前遺跡」，p.309-310，財団法人茨城県

教育財団.

パリノ・サーヴェイ株式会社（1993c）中久喜遺跡から出土した炭化材の樹種．茨城県教育財団文化財調査報告第86集「牛久北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅱ）中久喜遺跡」，p.254-257，住宅・都市整備公団つくば開発局・財団法人茨城県教育財団.

パリノ・サーヴェイ株式会社（1994a）西ノ脇遺跡から出土した炭化材の種類．茨城県教育財団文化財調査報告第87集「伊奈・谷和原丘陵部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ　西ノ脇遺跡・前田村遺跡」，p.278-281，財団法人茨城県教育財団.

パリノ・サーヴェイ株式会社（1994b）高崎貝遺構内出土炭化材の樹種について．茨城県教育財団文化財調査報告第88集「茨城県自然博物館（仮称）建設用地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ　高崎貝塚」，p.318-321，財団法人茨城県教育財団.

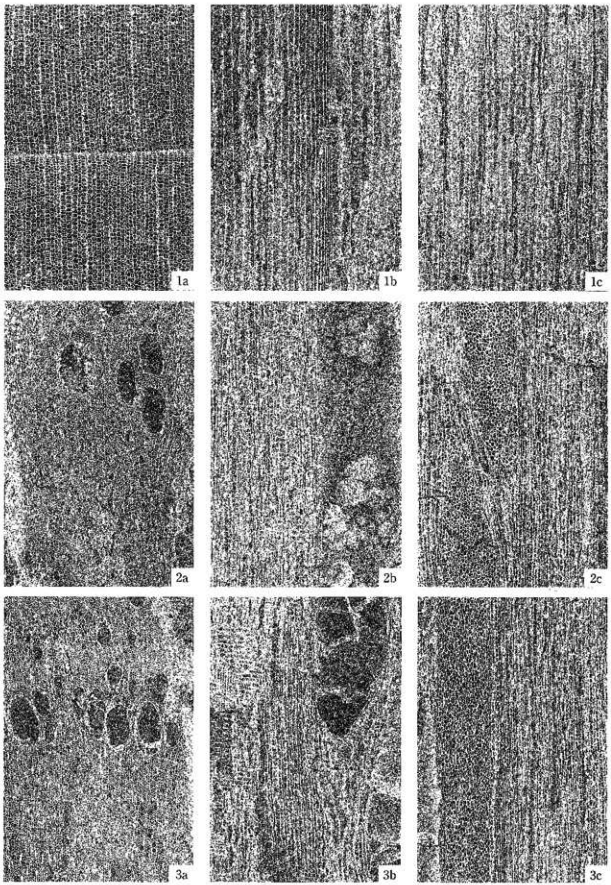
パリノ・サーヴェイ株式会社（1994c）平出久保遺跡第38号住居跡出土炭化材の樹種同定について．茨城県教育財団文化財調査報告第98集「主要地方道水戸鉾田佐原線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書　平出久保遺跡」，p.137-138，財団法人茨城県教育財団.

パリノ・サーヴェイ株式会社（1997）第5号住居跡出土炭化材の樹種．茨城県教育財団文化財調査報告第137集「阿見東部工業団地造成工事地内埋蔵文化財調査報告書　星合遺跡・中ノ台遺跡」，p.111-112，茨城県・財団法人茨城県教育財団.

パリノ・サーヴェイ株式会社（1998）炭焼遺跡から出土した炭化材の樹種．茨城県教育財団文化財調査報告第130集「北浦複合団地造成事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ　炭焼遺跡・札場古墳群・三和貝塚・成田古墳群」，p.276-278，茨城県・財団法人茨城県教育財団.

高橋　敦・植木真吾（1994）樹種同定からみた住居構築材の用材選択，PALYNO，2，p.5-18，パリノ・サーヴェイ株式会社.

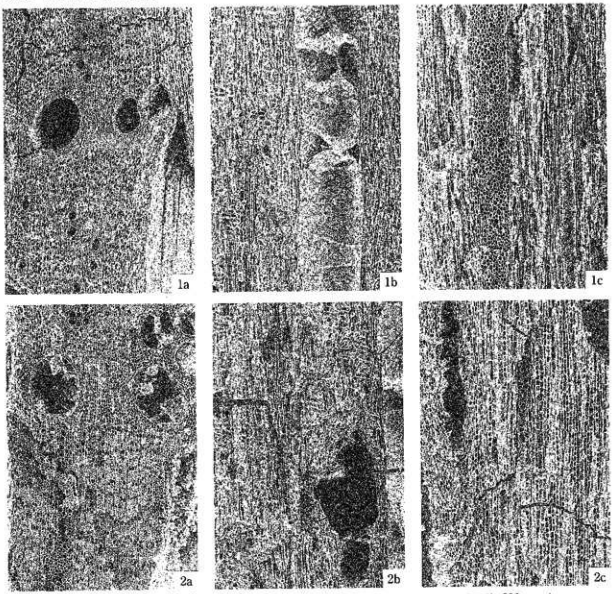
図版1　島名前野東遺跡の炭化材



1. ヒノキ（ピットB群P8-1）
2. コナラ属コナラ亜属クヌギ節（SI-77 No.1）
3. コナラ属コナラ亜属コナラ節（SI-79 C2）
　a：木口、b：柾目、c：板目

200μm：a
200μm：b、c

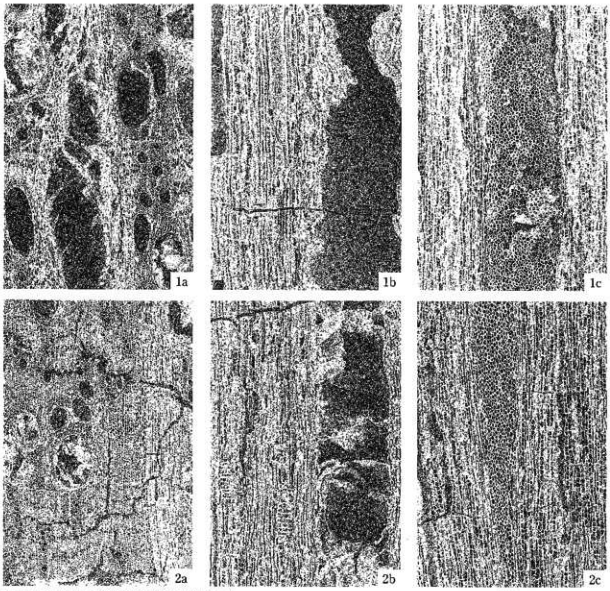
図版2　島名境松遺跡の炭化材



1. コナラ属コナラ亜属クヌギ節（SI-28 ホ）
2. コナラ属コナラ亜属コナラ節（SI-22 ハ）
　a：木口，b：柾目，c：板目

200 μm：a
200 μm：b，c

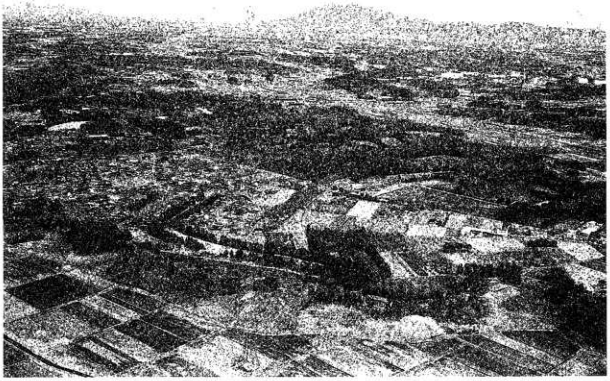
図版3　谷田部漆遺跡の炭化材

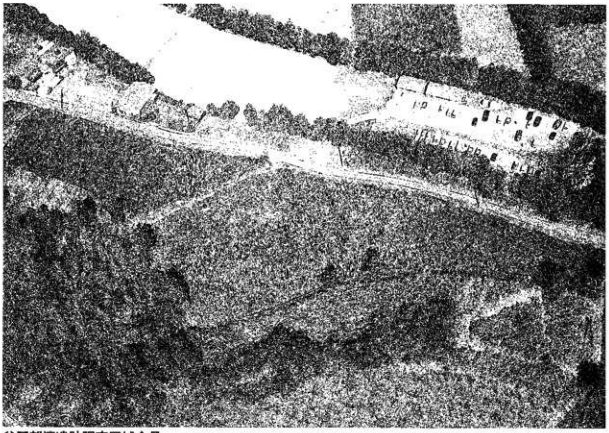


1. コナラ属コナラ亜属クヌギ節（SI-3 ロ）
2. コナラ属コナラ亜属コナラ節（SI-22 ホ）
　a：木口，b：柾目，c：板目

200 μm：a
200 μm：b，c

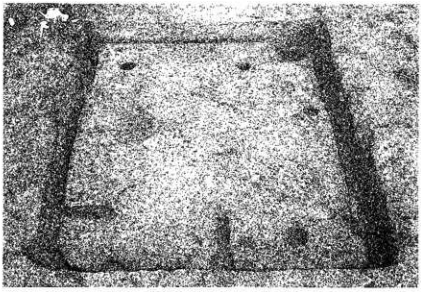
写 真 図 版



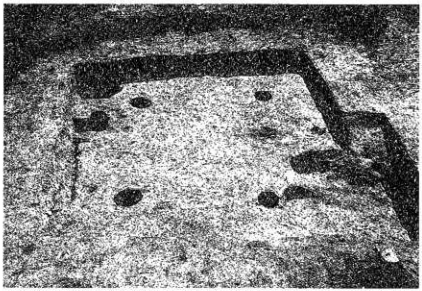


谷田部漆遺跡調査区域全景

谷田部漆遺跡完掘状況

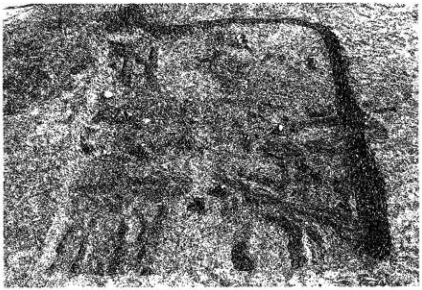


第1号住居跡完掘状況

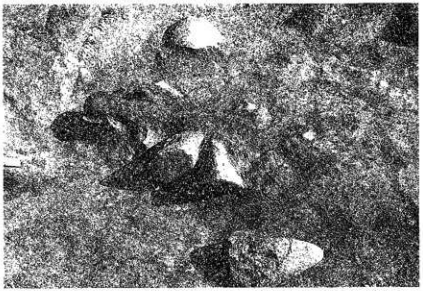


第2号住居跡完掘状況

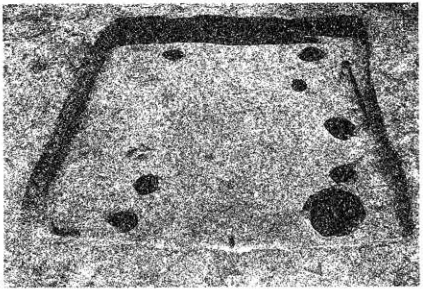
第2号住居跡遺物出土状況



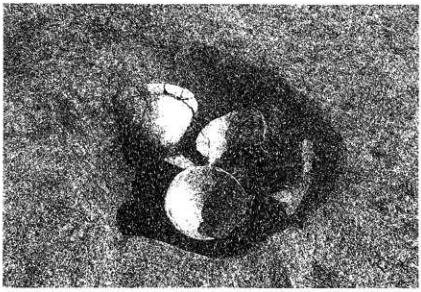
第3号住居跡遺物出土状況



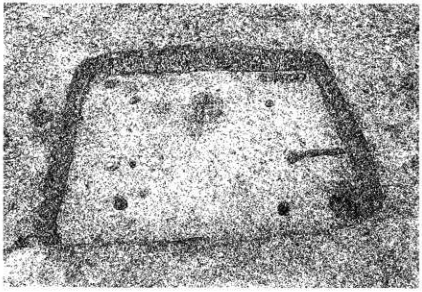
第3号住居跡遺物出土状況



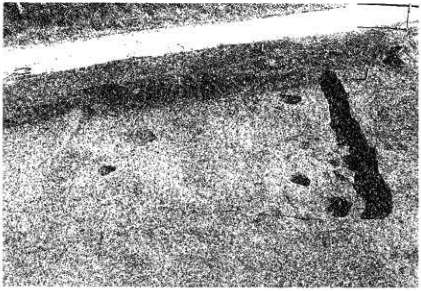
第4号住居跡完掘状況



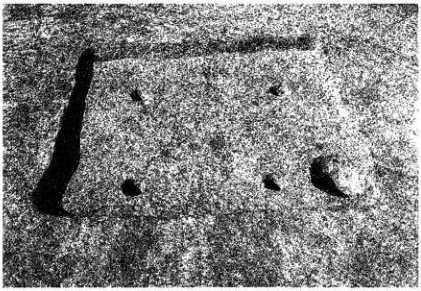
第4号住居跡
貯蔵穴遺物出土状況



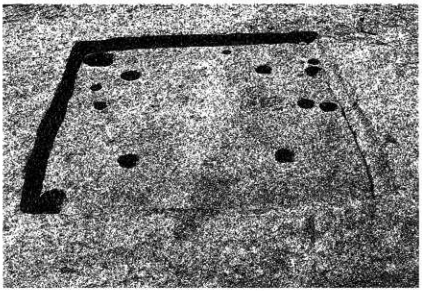
第7号住居跡完掘状況



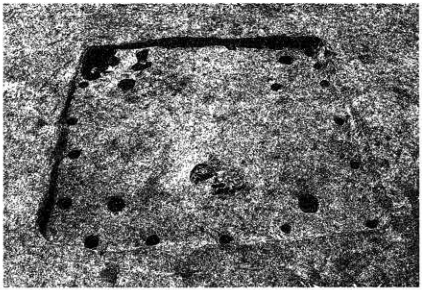
第9号住居跡完掘状況



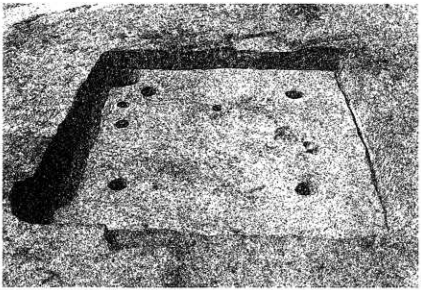
第10号住居跡完掘状況



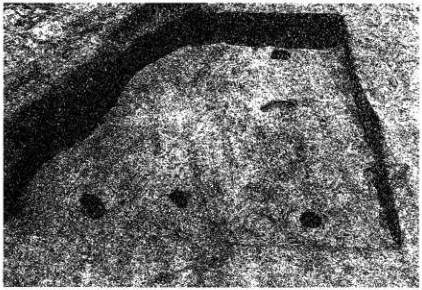
第11号住居跡完掘状況



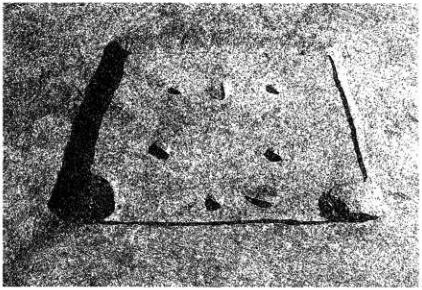
第12号住居跡完掘状況



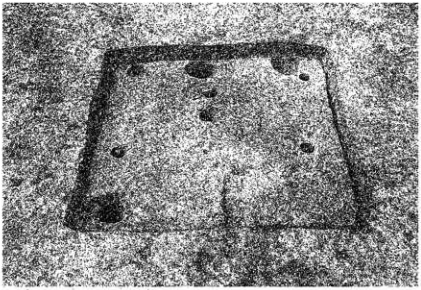
第13号住居跡完掘状況



第14号住居跡完掘状況

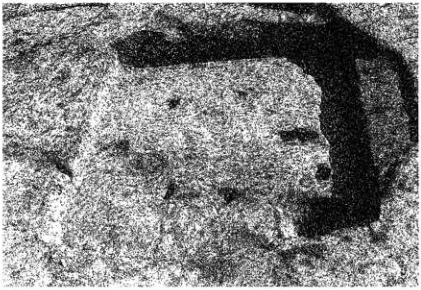


第15号住居跡完掘状況

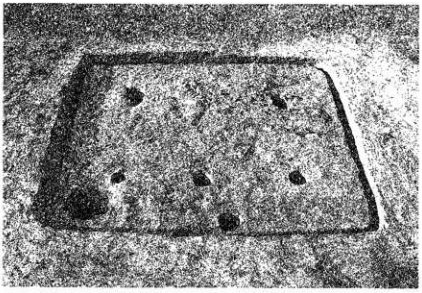


第16号住居跡完掘状況

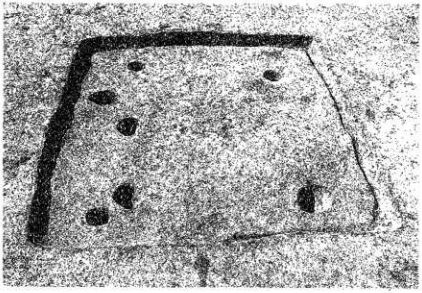
第17号住居跡遺物出土状況



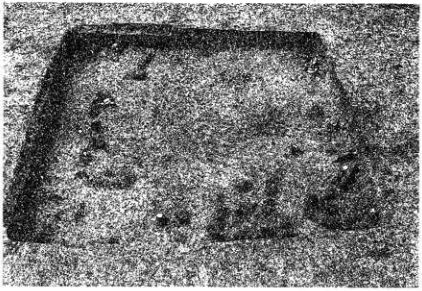
第18号住居跡完掘状況



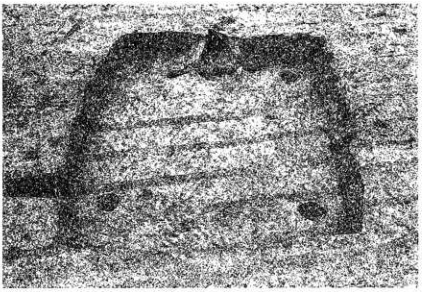
第20号住居跡完掘状況



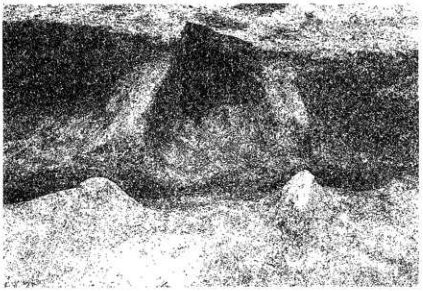
第21号住居跡完掘状況



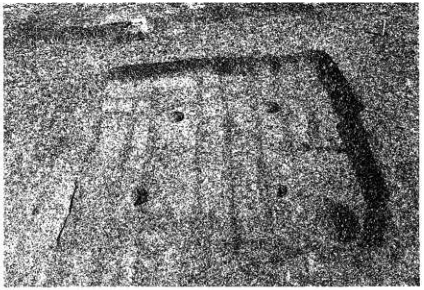
第22号住居跡遺物出土状況



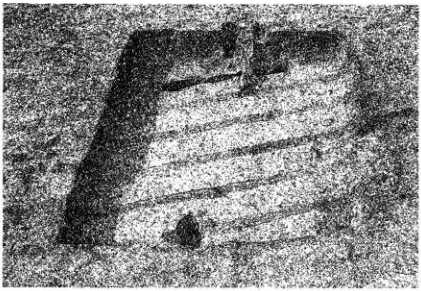
第23号住居跡完掘状況



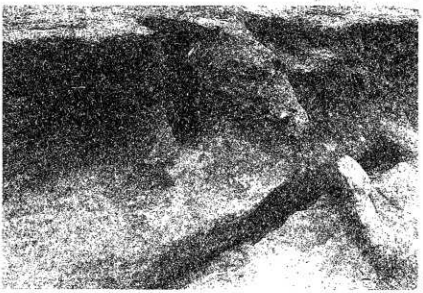
第23号住居跡竈完掘状況



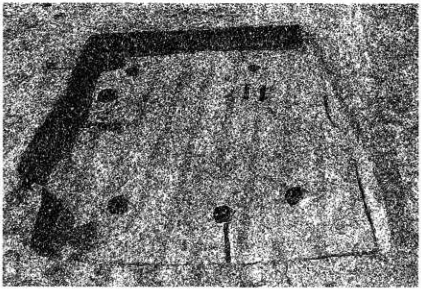
第24号住居跡完掘状況



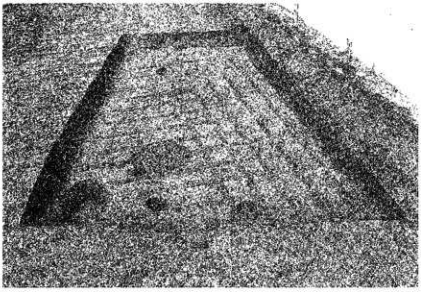
第25号住居跡完掘状況



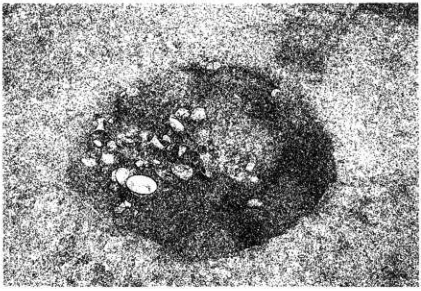
第25号住居跡竈完掘状況



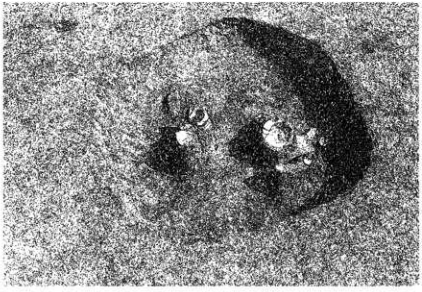
第26号住居跡完掘状況



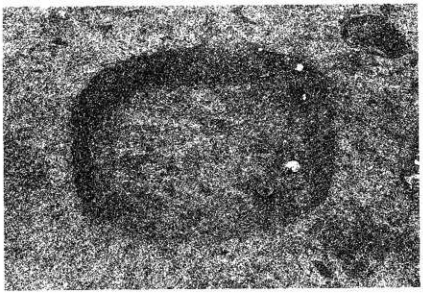
第27号住居跡完掘状況



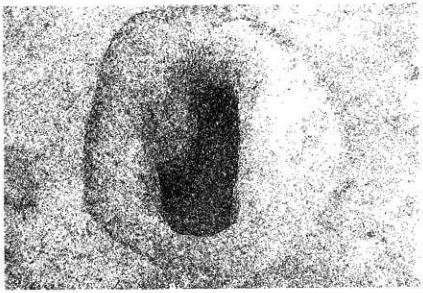
第1号土坑遺物出土状況



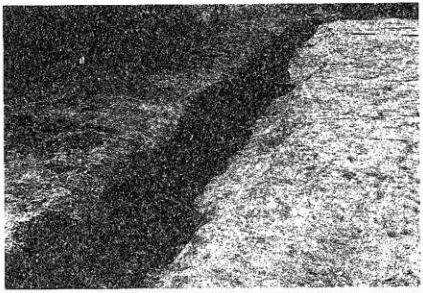
第27号土坑遺物出土状況



第38号土坑遺物出土状況



第1号陥し穴完掘状況



第1号溝跡完掘状況

SI 2-14

SI 2-15

SI 3-20

SI 2-13

SI 1-1

SI 2-9

SI 2-10

SI 4-26

SI 4-27

SI 3-25

SI 4-29

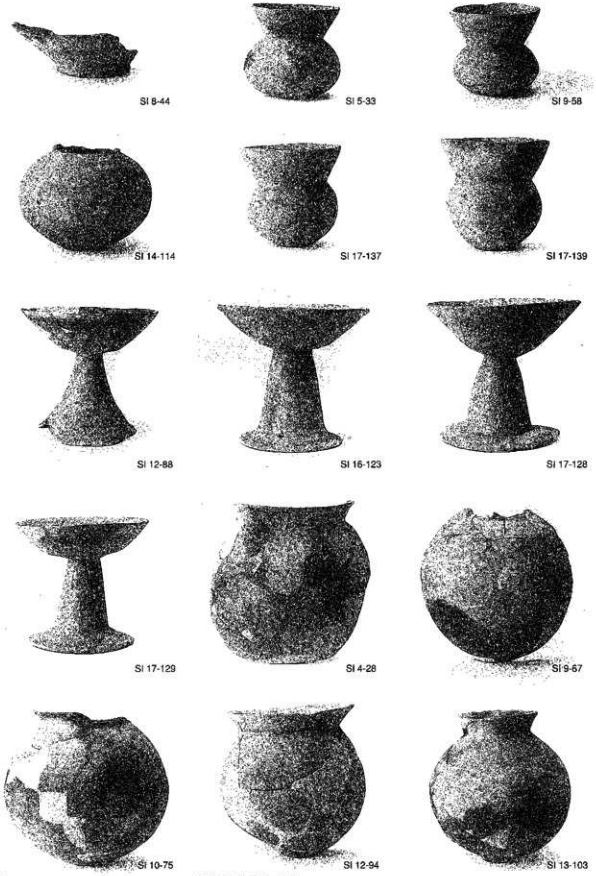
SI 4-30

SI 1-6

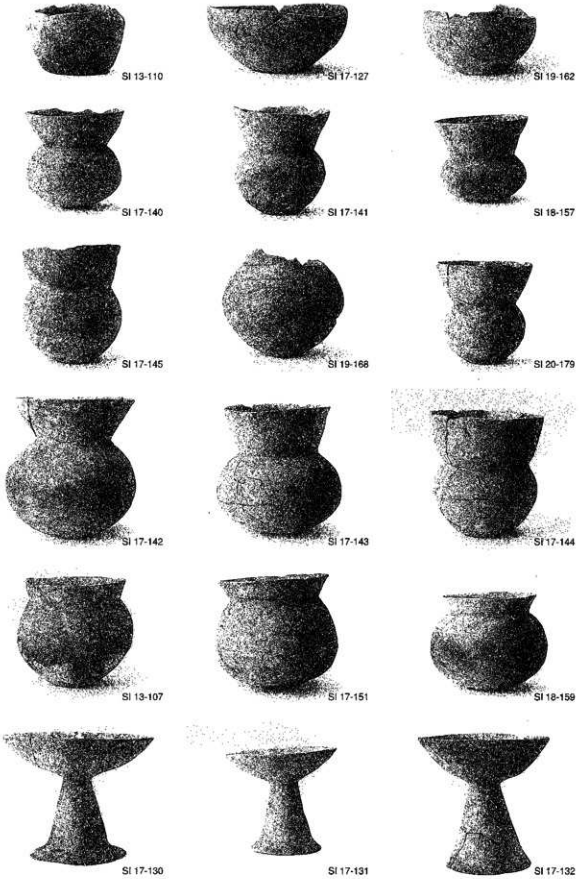
SI 2-16

SI 3-22

第1～4号住居跡出土遺物



第4・5・8～10・12～14・16・17号住居跡出土遺物



第13・17～20号住居跡出土遺物

SI 17-133

SI 17-134

SI 17-135

SI 19-163

SI 22-194

SI 22-195

SI 15-120

SI 16-126

SI 18-158

SI 17-148

SI 17-149

SI 17-150

SI 19-169

SI 19-170

SI 19-171

第15～19・22号住居跡出土遺物

SI 22-189

SI 22-190

SI 25-209

SI 27-218

SI 26-212

SI 26-213

SI 27-225

SI 27-220

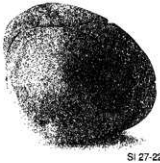
SI 26-211

SI 22-198

SI 26-215

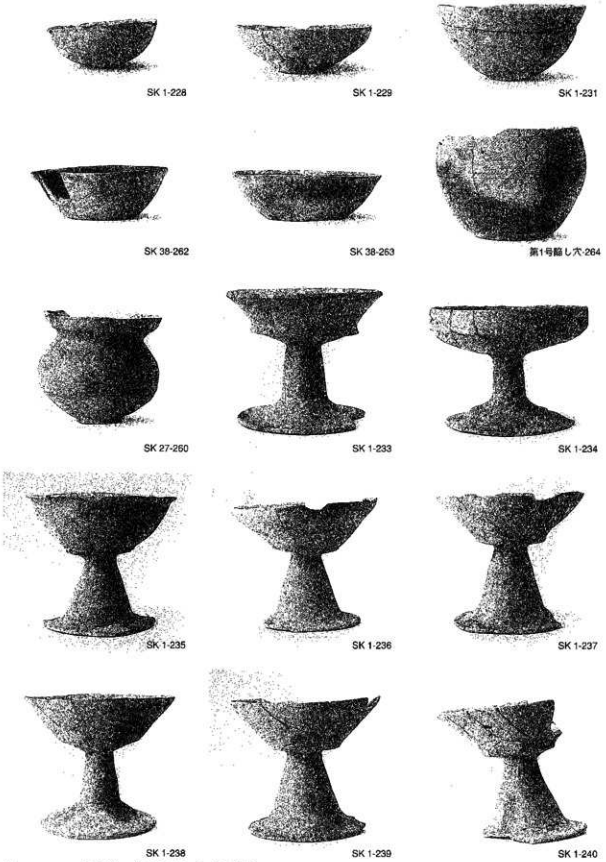
SI 23-202

SI 22-200


SI 27-227

SI 26-214

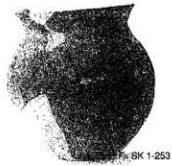
第22・23・25～27号住居跡出土遺物

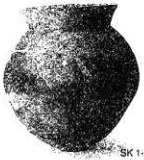


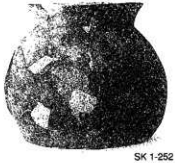
第1・27・38号土坑，第1号陥し穴出土遺物

SK 1-241

SK 1-244


SK 1-253


SK 1-251


SK 1-252

遺構外-38

SI 12-DP9～DP14

SI 17-DP21～DP28

遺構外-39

SI 3-DP2

SI 3-DP3

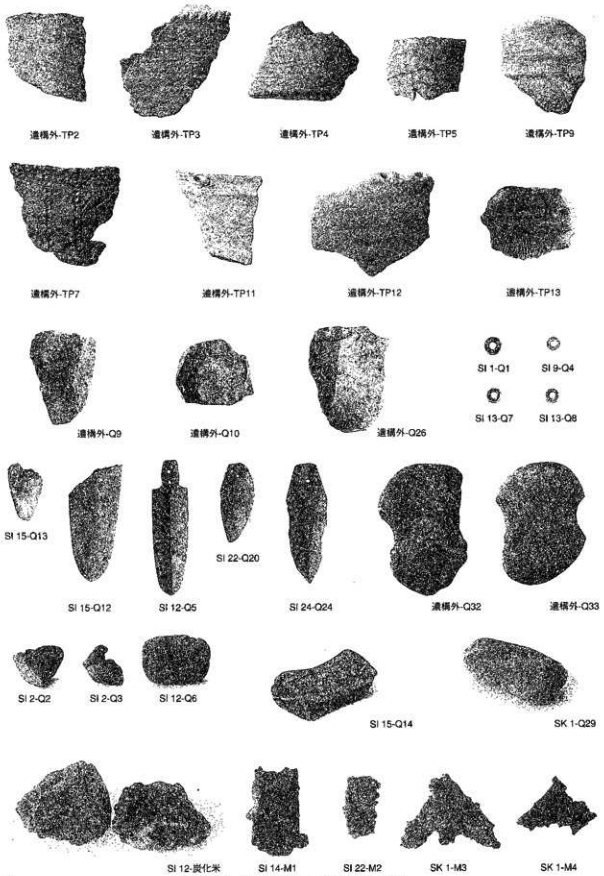
SI 3-DP4

SI 3-DP2～DP4

SI 13-DP19

SI 13-DP20

第3・12・13・17号住居跡，第1号土坑，遺構外出土遺物



第1・2・9・12～15・22・24号住居跡，第1号土坑，遺構外出土遺物

茨城県教育財団文化財調査報告第191集

谷田部漆遺跡

下　巻

平成14(2002)年3月20日　印刷
平成14(2002)年3月25日　発行

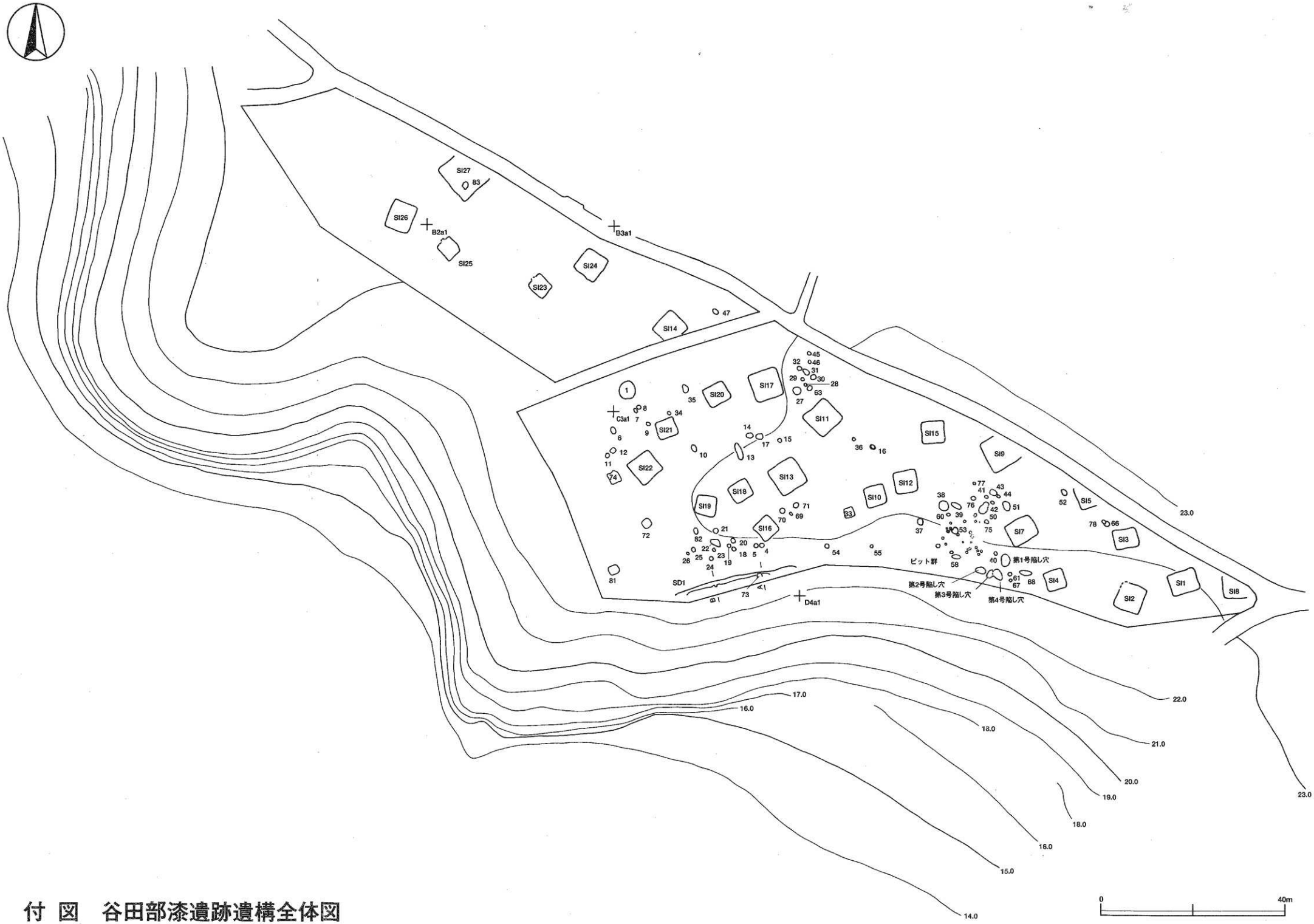
発行　財団法人　茨城県教育財団
〒310-0911　水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL　029－225－6587

印刷　富士オフセット印刷株式会社
〒310-0067　水戸市根本3丁目1534－2
TEL　029－231－4241㈹

付　　図

茨城県教育財団文化財調査報告第191集

谷田部漆遺跡遺構全体図



付 図　谷田部漆遺跡遺構全体図